gaia education

Ecovillage Design Education

持続可能性デザインの原理を学ぶ４週間の包括的コース

ギース（GEESE：Global Ecovillage Educators for a Sustainable Earth）によって着想されデザインされたカリキュラム

Version 5

© Gaia Education, 2012

http://gaia.gen-jp.org/

目　次

はじめに 2
持続可能性の輪 5
なぜガイア・エデュケーションが必要なのか？ 7

世界観

概要 11
世界観１：ホリスティックな世界観 13
世界観２：自然ともう一度つながろう 16
世界観３：気づきと意識の転換 19
世界観４：個人と地球の健康 21
世界観５：社会的に行動するための精神性 24

社会

概要 29
社会１：コミュニティ創設と多様性の享受 32
社会２：コミュニケーション・スキル: ファシリテーション、意思決定 36
社会３：個人の主体性の確立、自立する力とリーダーシップ 41
社会４：アート、儀式、社会変革 44
社会５：学ぶこと、つながること、そして行動に起こすこと 47

経済

概要 53
経済１：グローバル経済を持続可能な世界へとシフトさせる 55
経済２：適正な暮らし 59
経済３：地域経済 62
経済４：コミュニティ銀行とコミュニティ通貨 65
経済５：制度面と資金面の問題 67

環境（生態系とその環境）

概要 72
環境１：エコ建築（グリーン・ビルディング）と改修 76
環境２：地場産の食べものと栄養素の循環 79
環境３：インフラストラクチャー、水、エネルギー 81
環境４：自然再生、都市再生、災害復興 84
環境５：俯瞰的なシステムデザイン 87

生きることを通して学ぶという教授法 94
地域のニーズに合わせた EDE 97

はじめに

ガイア・エデュケーションのこれまでの歩み

1998 年、55 のエコビレッジ教育者たちが、ガイアトラストの招きでデンマークに集まりました。そこに集まった人々はグローバル・エコビレッジ・ネットワークメンバーであり、広い専門領域における学術的、実践的バックグランドを有していました。この集まりの目的は、エコビレッジ運動の経験に基づいた持続可能性についての教育のための新しい学際的な方法を議論するためでした。

ガイア・エデュケーションは、これらの国際的なエコビレッジ教育者たちの話し合いを通して設立されました。そして、そのグループの名称をギース（GEESE：Global Ecovillage Educators for a Sustainable Earth)とすることを決めました。これは雁の群れ（geese）が季節の変わり目に国境を越えて移動する際、協力し合い互いにリーダーシップを取り合うことの重要性の認識からの命名でした。ギースは、エコビレッジで練り上げられた知識や技術に関心をもつ人々に広く利用できるものとすることを目指して組織されました。

現時点での、ガイア・エデュケーションの主な成果や重要な出来事は以下の通りです。

第一に画期的な EDE (Ecovillage Design Education)カリキュラムの展開です。これは、世界中で最も成功しているエコビレッジとコミュニティのプロジェクトのいくつかのネットワークの経験と専門家の助言により実現しました。EDE は 2005 年 10 月のフィンドホーンエコビレッジにおけるグローバル・エコビレッジ・ネットワークの十周年記念大会の期間中に正式に発足しました。このカリキュラムは幅広く適用可能なものとなっており、持続可能な暮らしの実践例としてコミュニティで作られ、試されてきた革新的な教材やアイディアそしてツールを豊富に含んでいます。
第二に、2008 年 10 月にカタルニア・オープン大学（UOC：Open University of Catalonia）との連携による持続可能性について学ぶインターネット上のガイア･エデュケーションデザイン（GEDS：Gaia Education Design for Sustainability）の展開です。

第三に、持続可能性について学ぶガイア・エデュケーションデザイン（GEDS）の大学院課程―これもカタルニア・オープン大学（UOC）との連携による―を 2011 年 10 月に立ち上げました。この GEDS は 2014 年秋までに 2 年間の正式な修士課程となる予定です。

ガイア・エデュケーションは、ウェブ上で提供されることになる追加的な教育プログラムを開発中です。
これは持続可能性のためのデザインに焦点を当てたオンラインでの GEDS を含んでいます。また、若者向けの EDE カリキュラムも開発中です。

EDE のカリキュラムは無料で公開されており、持続可能性についての基本的な考えを学びたい人、また特にそれぞれの地元地域で EDE を教えたいと思っている人は自由に使うことができます。補助教材として以下のものがあります。

EDE を開催するためのガイドライン―認定を受けた EDE を実施する場所において入手できます。
講師用マニュアル―講師と主催者のための、より詳細な手引きです。これは、講師がヒントを得たり、指導するためにカリキュラムの多様なトピックについてより詳細に検討するためのものです。

地球上のどこででも使える持続可能性のための四つの鍵―上記の教材に加えて、ガイア・エデュケーションはイギリスの出版社（Permanent Publications）の協力のもと四つの追加的な論文集を出版してきました。これは世界中のエコビレッジの教育者によって編集、執筆されたものです。四つの鍵は EDE が組み立てられる四つの領域と対応しています。つまり、世界観、社会、経済そして環境の領域です。したがって、それぞれの本は EDE の一つの領域を扱っています。最善の EDE 講師陣他の論文を読むことで、受講生同様講師の創造性も刺激されるでしょう。これらもガイア・エデュケーションのウェブサイトから無料でダウンロードできます。もしくは有償で書籍版を注文することができます。四つの鍵はそれぞれ以下の通りです。

社会の鍵『**あなたと私を超えて**』コミュニティを創るためのインスピレーションと知恵
経済の鍵『**ガイア経済**』地球の許容する範囲で良く生きる
環境の鍵『**環境に配慮した住まいのデザイン**』場のセンスの創造
世界観の鍵『**地球の歌**』新しく生まれつつある科学的世界観と精神的世界観の統合

5 冊目の本が出版予定であり、タイトルは『**生活と学びの教授法**』です。

コースのファシリテーターは、ここで示されたテーマについて自分自身で調べ準備をすることになります。プログラムの責任者はガイア・エデュケーションによって記された「認定ガイドライン」に沿ってコースのスケジュールをデザインし、カリキュラムの狙いをすべて満たすように地域で使えるリソースを活用します。

EDE は、より大きな文脈におけるエコビレッジ運動における軸となる価値と一致し、これらを反映しています。その価値とは、多様性を前提とした一致を尊重すること、異なる文化と信仰を讃えること、人種、文化、ジェンダーの平等を実践すること、社会正義と環境保全の自覚を促進すること、平和と地域での自主的な問題解決の実現に励むこと、個人と地域で活動する人に活力を与えること、意識と人間のもつ潜在的な力を高めること、そしてこれらに共通する基本的な価値として、この生きた地球を、私達の家である星として尊重することです。

2012 年 1 月時点の EDE 開催地

EDE は国連持続可能な開発のための教育の 10 年（UN-DESD-2005-2014）を補完し、連携し、その基準設定を助けるものとして世界に紹介されました。

EDE の教材は非商業目的であれば誰でも利用でき、ほとんどの EDE のコースはガイア・エデュケーション認定委員会によって認証されています。そしてこの委員会は EDE の開催地、コースの内容そして提案された講師の質を評価しています。

ガイア・エデュケーションはデンマークのガイアトラストによって財政的支援を受けており、現在も継続してこの支援を受けています。最初のプロジェクトは GEN（クローバルエコビレッジネットワーク）主催の試行的なプログラムでした。2009 年からガイア・エデュケーションは慈善目的の株式会社としてスコットランドで法人となっています。GEDS からの収益が事業収益全体に占める割合は増えています。グルントヴィ成人教育プログラムを通して、EU はここ数年に渡って GEDS の参加者に十分な資金を提供してきました。エコビレッジとコースのファシリテーターは彼ら、彼女らの献身的で特別な努力をもってこのプログラムを支えています。ガイア・エデュケーションは特にアフリカや南米、発展途上にあるアジアにおいて、広がり、成長し続けるために十分な資金を必要としています。ガイア・エデュケーションが最終的には財政的に自立するようになることを私たちは目指しています。

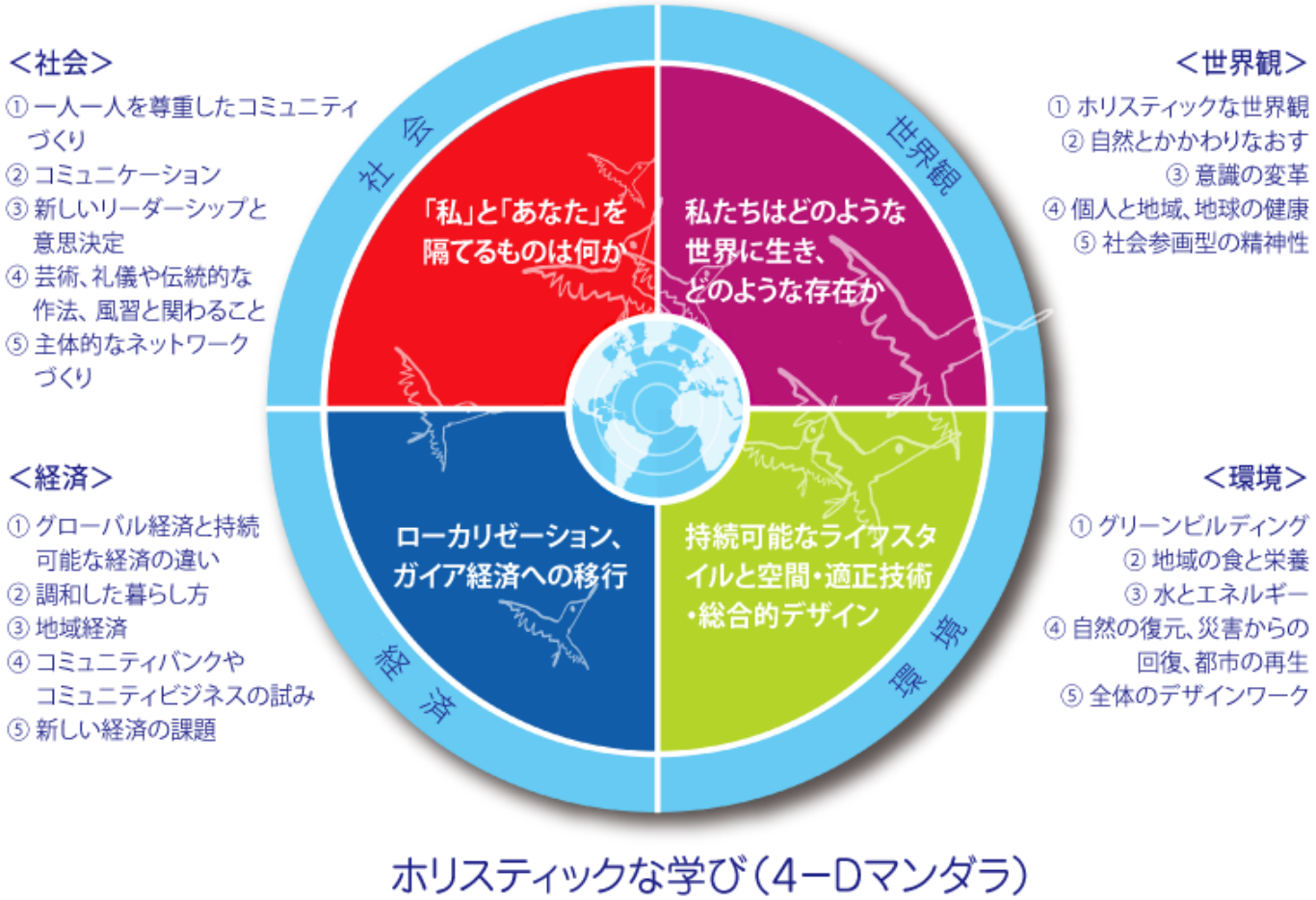
EDE の願いは、壊れたコミュニティを再生させ、持続可能な生存力の範となる新しいコミュニティを創造し、傷ついたエコシステムを再生させ、街々を活性化させ、前向きに考えられる感覚を取り戻すことにあるのです。つまり、私たちと将来世代のために地上のいのちに新しい命を吹き込むことにあるのです。

共に歩んでいきましょう。
The GEESE

持続可能性の輪

四領域を通しての学びの道筋

EDE は、人間が生きていく上で欠かせない基本的かつ本質的な４つの要素を、曼荼羅のような形で体系化しています。その４つとは、環境、社会、経済、そして世界観です。これら４つが、それぞれ５つの学習単位（この学習単位を以下「課」と呼びます）で構成され、合計で 20 の課になります。
４つの要素をつなげている曼荼羅構造は、学習モデルの基本型として変わることはないでしょう。
一方で、個々の課が持つ title や内容は、この先少しずつ進化したり変化したりしていくかもしれません。
このカリキュラムはその構成自体が柔軟で、地域に特有なニーズや状況に一つ一つ対応できるようになっています。



ホリスティックな学び（4−Dマンダラ）

同じく４週間という枠組みも目安ではありますが、決められたものではなく、小さなワークショップ向けに内容を凝縮することも、逆に長い期間をかけたプログラムに合わせて内容を広げることも、場所や時期を変えて何度かに分けて行う分割型のプログラムにすることも可能です。このように、元々が柔軟に考えられていることから、EDE は、農村部あるいは都市部の目的共同体でも実施可能ですし、あるいはまた伝統的な村落、学校、職場他でも実施可能なプログラムです。

EDE のカリキュラムは＜ホリスティック＞ であるといえます。エコビレッジをつくる上で考えなければならない多様な側面を、包括的かつ相互に支え合う「１つのもの」として表していこうとしています。また、EDE は＜統合的＞だともいえます。このことは、すべての構成要素に同等の光が当てられ、それぞれの特徴が描き出されることを意味します。というのも、まさにそれらの要素が相互に関係しあいながら一つの全体をなしているからです。さらに EDE は＜ホログラフィ的＞でもあります。つまり、カリキュラムの本質は隅々にまでおよんでいるので、どの部分をとっても再編成が可能です。部分的な参加や見学だけでも、EDE 全体の目的を正確に理解することができるでしょう。

学びの成果

それぞれの領域には 5 つの学びの成果があります。そして、その成果は随時 EDE 参加者の意見を聞きこれをプログラムに取り入れることで変わるものです。これらは以下の点から形作られました。すなわち、問題について学ぶ人の気づき、提示されたコンセプトについての知識と理解、そしてそれぞれの領域の学びの課と関連したスキルです。コースを実施しようとする人たちは、カリキュラムのどの項目からでも自信をもって始めることができます。また学びの項目がそれぞれ切り離されないように、また学びが持続可能性の統合的な考えとして示すことができるようにコースのスケジュールを変更することもできます。

認定されたコースということは、プログラム実施者が以下のことに留意していることを意味します。つまり、EDE と同様の学びの成果をプログラムに組み込み、それらをカリキュラムの中心的な内容と関連づけ、体験的活動と評価方法をデザインするということです。この方法によって、上記に挙げたものと同様の目標とガイア・エデュケーション委員会によって定められた認定基準に至ることが可能になります。コースを実施する人はカリキュラムをそのまま使うこともできますし、コースが開催される場所の地域のそして特定の文化的な現実にその内容を合わせることもできます。

なぜガイア・エデュケーションが必要なのか？

「私たちは客体が集まったものではなく主体のつながりの働きである…私たちは種の次元において私たち自身を新しく作り直さねばならない」

トーマス・ベリー

私たちの生存とこの地球上での未来の持続可能性を脅かす地球規模での未曽有の危機に人類が直面していることは広く知られています。 地球上の至る所で自然の回復速度をはるかに超えた速さでの自然資源が使用されており、その結果に私たちは苦しんでいます。多くの重要な生物および自然資源の生産はすでにピークに達しています。森林、水産、サンゴ礁は損傷され失われつつあります。土地は作物の作りすぎと化学物質の使用により不毛となっています。生物多様性は遺伝子操作によって失われつつあります。淡水の埋蔵量は減少し、今日世界人口の半分以上が水不足に直面しています。

さらに気候変動が、地上において食料生産と住居に適さない地域を大規模に拡大させるという危機をもたらしています。 すでに気象パターンの変化が旱魃や壊滅的な被害をもたらす嵐、広範な作物の不作、海岸の都市や土地に洪水をもたらす海面上昇をうみだしています。そして今、おぼろげに見え始めているのが「ピークオイル」です。この状況には適応や技術的対応で対処可能かもしれませんが、残された化石エネルギーへのアクセスを巡って長期的な紛争が起こる可能性もあります。
これらすべての問題については多くの書籍や文書が出版されています。しかし現在、この問題の広がりについて知っただけでは、半分しか学んだことになりません。あとの半分は、世界における人間の存在を作り直すために、実践的なスキルを獲得し、分析的な力を身につけ、思想的な深さを獲得することです。適切なスキルとトレーニングがなければ、私たちは複雑に絡み合い、異なる専門領域と関連する問題―これらの問題は私たちのライフスタイルをデザインし直し、私たちのコミュニティと社会の変化に関わっています―に対する私たちの取り組みは手遅れになってしまいます。

私たちは、上に挙げた問題のすべては分裂と断片化と要素還元主義から生じていると考えます。そして、体系的な方法だけが、グローバルな生存に関わるという新たな段階に達した問題に対応できると考えます。
つまり、グローバルな連帯とつながりにおいてこの体系的な方法は実施されます。この連帯とつながりによって、平和、ローカリゼーションそして持続可能性の文化が未来に向けての唯一の実行可能な道であることが認識されます。

この危機の中で、またとない機会も見出すことができます。問題がこれほど複雑であるとすれば、可能性も同様に包括的なのです。意識の包括的な変化が人間のコミュニティで生まれています。このことは、ここ数世紀にわたって支配的だった還元主義的で物質主義的な世界観から私たちを自由にします。私たちは質素、簡潔さ、そしてすべてはつながっているとういう一体感の社会的美徳を認識し始めています。

アインシュタインの言葉を思い出すなら、私たちは問題を作り出した同じマインドセット（考え方）ではその問題を解決することができません。スパイラル・ダイナミクスの用語を使うなら私たちは第一段階から第二段階に進む必要があります。私たちは進化の螺旋におけるいくつかの段階において私たちの意識を高める必要があります。つまり、私たちは協力して行動することにつながる世界観、ビジョン、価値を必要としています。

ブタペストクラブで開催された世界賢人会議は以下のように主張しています。「混沌への破綻、もしくは新しい文明への躍進が運命づけられているわけではない。未来は予言されるものではなく創造されるものだ。生まれながらに気づくことのできる人間はすべてまさに未来を形づくることができる。今日の世界での私たちの生き方とは異なる、有効な方法があり、それは私たちを危機に至らせる流れを変え、より持続可能で平和な新しい文明へと私たちを導いてくれるかもしれない」と。では、あらゆる生命は一つであるという世界観を作り出し、北の国々でエネルギー消費を 80〜90%減らすようなライフスタイルを作り出すことはできるのでしょうか。地球の気温上昇を摂氏 2 度以下に留め、南の国々で暮らす人々の生活の条件を向上させることはできるでしょうか。人々の意識を変えて人口を減らすと同時に社会、経済、政治構造を世界的に変える道を見つけることはできるでしょうか。取り組むべき課題は前代未聞の規模のものです。

エコビレッジ運動

世界中の意欲あるエコビレッジの人々は、すでにこれらの問題に気づき、モデルとして改革の取り組みを始めました。そして、自分自身と社会の変革のビジョンとともにホリスティックな世界観に基づいて小規模の持続可能なコミュニティを作りました。また、今日私たちが直面するシステムと関わる課題への対応として、新しく、ささやかではあるけれど充実したライフスタイルを進めました。このビジョンから EDE は生まれてきたのです。

1990 年代初頭からエコビレッジで暮らす人たちは、情報を交換しお互いに学び合うために世界規模でネットワークを作ってきました（たとえば、GEN はその一例です）。ガイア・エデュケーションは 6 つの大陸にある持続可能なコミュニティから集まった教育者たちの組織で、世界中で使うことのできる共通のカリキュラムにこれらのすべての経験を集約させ、体系的に取りこんでいます。このカリキュラムは、主に対面とオンラインの二つの方法で展開してきました。

EDE（Ecovillage Design Education）は 120 時間の講座であり、2005 年以降 6 つの大陸の多数の国において 100 回以上実施されてきました。

GEDS（Gaia Education Design for Sustainability）は、ガイア・エデュケーション共催による UOC（The Open University of Catalonia in Barcelona：バルセロナのカタルーニャ大学通信講座）として提供される 8 か月間のネットワーク上の講座です。講座は 2008/2009 年から英語とスペイン語で毎年開講されており、2011/2012 年から大学院コースになります。

私たちが、全世界のために一つのカリキュラムをもっているということが、持続可能な世界を作ることができること、そしてそれが必要なことをこれまで示してきました。文化、地図上の場所を問わず持続可能なコミュニティは共通の世界観、ビジョンそして価値を共有しています。当然、それを教える方法は文化的な背景やどこでそれが教授されるか—農村コミュニティか都市部か伝統的な村か大学の講義か—によって詳細は多様なものになるでしょう。

世界観と価値を結び付けるビジョン

世界観は私たちのビジョンの基礎であり持続可能性、相互依存そしてグローバルな正義の価値を表しています。世界中のコミュニティはそこで暮らす住民とともに変革されなければなりません。ローカルな民主主義、ローカルなエネルギー供給そして富の創出のローカルな管理を含む「ローカリゼーション」へのシフトは、新しいライフスタイルの主要な目標です。グローバルなコミュニケーションや文化交流などグローバリゼーションのポジティブな面は維持していきたいと思いますが、経済的、環境的、社会的側面での搾取やグローバルな次元での不正義などのネガティブな面は受け入れることはできません。すべてのローカルなコミュニティが持続可能になる必要があります。私たちは異なる気候のもとで暮らし、入手できる原材料も異なります。この違いに基づき、将来、分業は人々が何を作りたいのかという希望に基づくものとなり、その成果を自発的に分かち合うという形をとる必要があるでしょう。ガイア・エデュケーションにおいて、私たちは気候、信条、環境そして歴史に根差した多様性を大切にします。

それぞれのローカルなコミュニティは、世界全体を統合的に反映したものになるでしょう。この新しい世界観は「文化的創造的生活者（Cultural Creatives）」と呼ばれる人々の基盤となっています。そして、このような人々の数は一定して増え続け、今では米国と欧州の人口の三分の一になっています。南の国では、スリランカで印象深いモデルが実施されています。これはサルボダヤ運動と呼ばれ、アリ・アリヤラトネ氏のリーダーシップのもと仏教思想に基づいてつくられたものです。彼はその革新的な働きが評価されてガンジー平和賞を受賞しました。いくつかのアジアの国々で同様の理念がスラック・シワラック氏と彼の仲間たちによって教授されています（SEM：精神教育運動）。

- **世界観に関する価値としては**、新しい社会構造を求めることを挙げることができます。主権国家は責任をもって、どのようにして社会正義に則り、他国とそして自然と調和して生きていきたいのかを自ら決めなければなりません。目指すのは均一性ではなく多様性です。また地球からの暴力的な収奪による枯渇ではなく持続可能性です。
- **社会に関する価値としては、**すべての人が参加することを挙げることができます。これは、私たちが「主体的な個人の集まり」であることを表します。そして、私たちがどのように自然とそして互いに生きたいのかを定める権利（つまり、人権と環境権です）を挙げることができます。
- **環境に関する価値としては、**きれいな土地、空気、水、住まいそして豊富にある地域の新鮮な食べ物を挙げることができます。これは、多様なエコシステムにおいて、許容できる「エコロジカルフットプリント」の範囲内で営まれる生活です。
- **経済に関する価値としては、**ローカルな民主主義の下でのローカルな経済を挙げることができます。つまり、これはエコロジーを経済に優先させることであり、その逆ではないことを意味します。

気づきの転換

私たちは、この古くから伝わってきたものを回顧としてではなく未来へのポジティブなビジョンとしてとらえます。瞑想と自己啓発は、一つであること（すべてのものがつながっていること）を経験する方法として北の国々で急速に広まっています。有名な西洋の精神的指導者であるエックハルト・トールは、強欲、恐れ、怒りを手放し、「感情の痛み」に執着しないように私たちに求めます。というのもこれらは実際の私たちではないからです。また、他の西洋の指導者はシンプルな生活を送ることそして恐れと強欲を手放すことを勧めています。これは、最終的に一つであることそして幸せの経験に至ります。同様の教えが東洋の思想においてはよくみられます。

異なる環境で実施される EDE

産業革命の後、コミュニティは非常に多様になってきました。そしてこれは巨大都市、郊外、より小さな都市、田園農村そして自然の中、という世界的な序列のどこにそのコミュニティがあるのかによって異なります。これらのコミュニティはすべて技術と競争経済の要求に応える一環で生まれてきました。これらは直線的であり、物事の循環的性質を尊重したものではありません。したがって私たちの計画や教える方法は、私たちの住んでいる場所とローカルな文化にどれだけ親しんでいるかよって変わります。私たちはこれまで以下に挙げるような多くのそして多様な参加者に EDE を提供してきました。

- 持続可能なコミュニティもしくはエコビレッジを創り、そこで暮らしたいと考えている人たち。
- サンパウロやメキシコシティ、ロサンジェルス等の大都市に住む人たち。
- 地域活性化を望む都市プランナーと地方自治体。
- 学生たちにホリスティックな考えを教えたいと考えている大学教員。
- 世界規模での破壊的な潮流を変える方法を探している大学生。
- 西洋流の「開発」を避け、ローカルな未来に向けてスピード感をもって進んでいきたいと望んでいる先住民と南の国の人々。

私たちが EDE を教える方法は、これらの人たちそれぞれによって異なります。なぜなら直面するリアリティが異なるからです。しかし、目標は同じです。すなわち、ローカリゼーション、地球に配慮した民主主義そしてローカルなエリアにおける持続可能な豊かさです。私たちは持続可能な豊かさという言葉を使うことにします。というのも私たちはシンプルな地元での暮らしには、社会的なつながり、創造性、精神的な気づき、新鮮な地元の食べ物そしてシンプルな喜びに満たされながらも、このような暮らしの環境負荷は低いと固く信じているからです。

EDE はしばしば持続可能なコミュニティにおいて開催されます。そこでは地元の人々が学んだことを生活に活かしています。私たちはこの考え方を「生活を通した学び」と呼んでいます。つまり、地域でのフィールド学習、練習、ゲームそして具体的なプロジェクトを用いて理論的な事柄を学びます。他にはない特徴はエコビレッジの文化です。これは数十年に渡って展開してきたもので、芸術、音楽、祝祭、セレモニーに満ちた創造的なライフスタイルです。

初期の EDE の多くはブラジルの都市部で実施されました。ここでの力を入れたのが、社会経済的な側面、大都市の緑化を試みること、そして意識を高めることでした。

ガイア・エデュケーションはトランジションネットワークと協力して、EDE のカリキュラムとトランジショントレーニングを使った共同教育プログラムを創りました。トランジションタウンは都市と街における市民を基盤とした新しい社会運動であり、その目的は地域のエコロジカルフットプリントを下げることとエネルギー資源の減少に備えることです。

先住民族もしくは文化の混在した地—たとえば、セネガル、南アフリカ、アルゼンチン、ブラジル、スリランカ、タイ、インド、中国等での EDE は「開発」と「都市化」といった考えには共通の理解はないので、その場所に合わせた扱いが必要なことを私たちに教えてくれてきました。アフリカでは、ローカルな食料生産と送電網から独立した再生可能エネルギー、ローカルな経済が重要なテーマです。特にこれは人口の 8 割が暮らす農村部において当てはまります。そこでは社会構造がしばしば無傷で残っています。そこで暮らす人たちは自分たちがもっているものを大切にし、そこから引き出すことを学ぶ必要があります。

EDE で教える素材には多様な考え方、アイデア、参考資料そしてゲームを含んでいます。そしてこれらは EDE の大きな枠組みに留まりつつ地域で必要とされていることに合わせることができるのです。

世界観領域

学びの目標

参加者は以下のことについて学びます。

- ✓ 習慣化された精神的実践（瞑想、ヨガ、祈り）によって力を得ること
- ✓ それぞれの夢、思索、観察を日々記録すること
- ✓ 自然とのつながりを深めること。
- ✓ 自分の健康へのはっきりした道筋の見取り図を創造的に描いてみること
- ✓ 変革の主体、新しい世界の実現に貢献できる人になること

「すべての人の必要を満たすのに十分なものはあるが貪欲を満たすものはない。」

マハトマ・ガンジー

概 要

今日、社会の持続可能な発展に関しては、主に三つの包括的なテーマに沿って語られるのが一般的になっています。経済と社会と生態系（あるいは環境）の三つです。どれも、人間の生の営みには基本となるものばかりで、持続可能な発展を考える際に触れないわけにはいきません。EDE はさらにもうひとつ、考慮すべき重要な観点をつけくわえています。それをここでは「世界観」と呼びましょう。常に根底にあるものにもかかわらず、語られることは稀であり、時として隠されている文化のパターンがあることが知られています。世界観とはこのようなものです。そして、これは経済的な関係や社会的関係そして生態系に強く影響をおよぼし、実際には、そうした関係のありかたを潜在的に決めてしまいかねないほど大きなものなのです。

「現実」というのは個々に解釈されるもので、その解釈された「現実」が、あらゆる文化や集団、そして歴史の動きを方向づけています。元は科学の営みを説明する時に使われていた「パラダイム」という言葉は、現在では主に、信条、哲学、神話などが互いに浸透しまじりあったもののことを指して用いられています。そしてこのまじりあったものは人のものの考え方を決める文化的な視点を形成しています。人はこの「考え方」を通して世界を認識します。もちろんこのパラダイムは、新しい知識が発見もしくは創造されることによっても変化し、また人類が成熟することによってより深く豊かな気づきを受けいれられるようになった時にも変化していくのです。

多くの人たちが感じ、書き記していることが示していることですが、欧米化した暮らしを送っているわたしたちは今、このパラダイムの転換期にあります。新しい世界観が生まれつつあります。この世界観は長いあいだ培われてきた伝統的な哲学や知恵と補い合い、溶けあっています。これは意識の進化とも言いうるものであり、文化のグローバリゼーションがもたらすさまざまな結びつきにより、前例なく比類ない規模のものになるでしょう。こうして、私たちは人類をひとつの大きな家族、ひとつの人間集団、地球にあるあらゆるものとつながった存在として感じることができるようになるでしょう。そして、あたかも宇宙飛行士が宇宙から地球を眺めたように、わたしたちは、わたしたちが暮らすこの星を、ひとつの生命を持って呼吸する超

越的な有機体「ガイア」として感じることができるようになるのです。新しい世界観は「現実」の解釈において、機械論から全体論へ、あるいは「現実」を物質的にではなく精神的に解釈することへの進化として理解されつつあります。意識が物質を生み出し、思考が形態を創り出す。この深い次元での一致を表現するためによく使われる語が「ワンネス」です。以上をふまえ、この「世界観」の章では、意識の進化における諸要素を明確にしていくことを目的としています。というのもこの意識の進化は持続可能なコミュニティ・モデルを考案し実現させていくことと関連しているからです。

EDE の世界観の領域は次の 5 つ学習単位（以下、課とします）について学びます。これらは人間存在にとって不可欠の側面です。

- ✓ **世界観 1：「ホリスティックな世界観」**では、新しい世界観の誕生、つまり、再び調和に向かいはじめた科学と精神世界という、現在起こっている変化について述べていきます。
- ✓ **世界観 2：「自然ともう一度つながろう」**は、精神的な実践を通して人間が自然界と再びつながりあうためのガイドとなるセクションです。
- ✓ **世界観 3：「意識の転換」**は、精神世界への旅を決意することで得られることを詩的に語るセクションになります。
- ✓ **世界観 4：「私たち自身の健康と地球の健康」**は地球と個の健康が深いつながりにおいて一つであることを私たちに思い起こさせます。
- ✓ **世界観 5：「社会の問題と関わる精神性」**では、健全な精神的生活とは社会に積極的に関わっていく生活であり、現在ではこのふたつを引きはなすことはできないという観点について説明しています。

世界観の資料：『地球の歌』

世界観の鍵『地球の歌―新しく生まれつつある科学と精神的世界観の統合』はガイア・エデュケーションの双書『地球上のどこででも使える持続可能性のための四つの鍵』における世界観の鍵です。これは無料で次のサイトからダウンロードできます。　www.gaiaeducation.org

世界観１：ホリスティックな世界観

目 標

- ホリスティックな世界観を理解するための語彙を紹介する。
- 瞑想、省察、自分自身と環境についての気づきの習慣を身に着ける。
- 自然と現実の根底に明確な精神的な基盤が存在していることを提起した「ニューサイエンス」が明らかにしたことを確認する。
- 精神の世界と科学との分断と同時に現代と伝統的な文化のパラダイムの分断を埋める助けをする。
- 命のつながりあいとは単なる比喩ではなく、わたしたち人類が責任を負わなければならない真実だということを、実感をもって自分のこととして考えられるようになる。

内 容

わたしたちはこれまで、世界や宇宙は個々の独立した物体からできあがっているという教育を受けてきました。その教育のもとでは、すべての物体は互いに分離していて、それらは、合理的、決定論的、機械論的法則に則って共同してはたらいているとされてきました。けれども今日、こうした世界観は、科学の分野における驚くべき発見によって根絶されようとしています。トーマス・ベリーは、この変化の内容について端的に次のように述べています。「宇宙は、客体が集合したものではない。主体が関係しあっているものなのだ」。新しいパラダイムが現れつつあります。このパラダイムでは、宇宙は生命システムが一体となったパターンとして経験され、関係の複雑なネットワークですべてが根源的に相互に関係し合っています。この新しいパラダイムは「ホリスティック＝包括的」で「インテグラル＝統合的」な、新しい世界観の到来を告げています。

この統合的な世界観を示す実証的なデータが、数多くの科学分野で同時に提示されています。物理学、生物学、心理学、システム理論、生理学、複雑系理論、これらすべてに共通するのは、目に見える物質領域の向こうに、私たちが知覚して経験しているこの世界に何か体系を与えている、あるいは何か影響を及ぼしている、そういう目に見えないパターンや原理があるということです。表面に現れている様相の向こう側で姿を現しつつある何かの存在に、科学が気づきつつあるのです。

こうした発見によって、現実世界に対するわたしたちの理解は急速に変化しはじめています。物質と意識とがこれまで考えられなかったような次元で互いにつながっていることが、科学的に明らかになろうとしています。今や物理的現実は分離した要素の組み合わせではなく、動的な関係のつながりに基礎を置いていると考えられるようになりました。ニューサイエンスの知見は次のことを示しています。つまり、わたしたちにとって具体的で安定していて変わらないものと感じられるようなことが、実は、常に動きつづけている無数の要素（内からの強力な推進力によって活発に動きまわるエネルギーや粒子や電荷）がつながりあってできているということです。こうしたことを通して学ぶべきことは、いたってシンプルです。わたしたちが豊かな未来を築くためには、わたしたち人間の社会が、そして社会と自然界の関わり方が、動的につながりあう「命のつながり」を反映させたものでなければならないということです。

意識が間違いなく物質に影響をおよぼしていることも、わくわくするような新発見です。物質的な世界と意識の世界は、わたしたちには未だ完全に理解することができない深淵な仕組みでつながりあい、重なりあっているのです。物理学と生命科学における数々の発見により、わたしたちは最新の科学的理解と幾世代にもわたる精神世界の教えとが収束に向かう、その驚くべき地点へ向かおうとしています。また、非線形力学と

複雑系理論 が、宇宙とは巨大なホログラム のようなものだということを明らかにしつつあります。「フラクタル」あるいは「ホラーキー」と呼ばれるこのホログラム的構造の中で、物質と意識は、広大で精緻なタペストリーのように、混ざりあっています。こうしたシステムを形づくるそれぞれの「要素（ホロン）」の本質は、「全体（ホラーキー）」の本質と同じもので、「上の如く、下も然り」といえるシステムになっているのです。

この「ホリスティックな世界観」は、この上なく大きな広がりを持ち、それ自体がもっている魅力に溢れています。けれども、実生活の経験に沿うものでなければ、知識のみの空しい抽象概念にすぎません。このホリスティックな世界観において、ワクワクするような具体的実践例としてエコビレッジが現れます。個々のホロン（要素）が広大なホラーキー（全体）の複製であるのと同じように、エコビレッジは、人間の間尺に合った規模は小さいものではありますが地球全体がつながりあった社会をつくっていく可能性を示す場となっています。持続不可能な文明が抱える無数の病的な症状の手当てをするだけでなく、さらに体系的な癒しをうながしていく場所でもあります。

エコビレッジは今や持続可能な人間文化の新しいモデルを育むのに最適な、生きた実験室となっています。エコビレッジ・モデルでは「システム」という考え方が重要視されます。行動とその過程、そしてそれらが組織立てられていくことの関係性に重きを置きつつ、より広くより包括的に「持続可能なコミュニティ」についての理解を深めていきます。エコビレッジで生活すると、あるいはエコビレッジをデザインすると誰でも、全てがつながっていること、それぞれが相互に関わりを持っていることがはっきりとわかります。例えば、有機食品を生産することが補完通貨（国の発行する貨幣とは異なる仕組みで自主的に運営されるもの）とどのように関連しているかについて考えてみることにしましょう。補完通貨は持続可能な経済に関わっています。持続可能な経済形態は全員参加型の意思決定の過程につながり、そしてその全員参加型の意思決定過程は互いを敬う人間同士の誠実な関係へとつながっていきます。そしてそれが愛につながり、愛は野生や自然につながって、さらにそれらを考慮した建築へ…というようにすべてがつながっていくのです。

最後に、ここまで述べてきた「熱い思い」が、夢見がちな神秘家やユートピア思想のエコロジストたちが語る非現実的な空想にすぎないなどと片づけられないよう、アルバート・アインシュタインの言葉を思いだしてみたいと思います。彼は、一点の曇りもない明確な言葉で次のように述べています。

> *「人間とは、わたしたちが宇宙と呼ぶ全体の一部であり、時間と空間に限定された一部である。私たちは。自分自身を、思考を、そして感情を、他と切り離されたものとして体験する。意識についてのある種の錯覚である。*
> *この錯覚は一種の牢獄で、個人的な欲望や最も近くにいる人々への愛情にわたしたちを縛り付けるのだ。わたしたちの務めは、この牢獄から自らを解放することだ。それには、共感の輪を、すべての生き物と自然全体の美しさに広げなければならない。実質的に新しい思考の形を身につけなければ、人類は生き延びることができないだろう。*
>
> アインシュタイン 150 の言葉（40 頁）
> ディスカヴァー・トゥエンディワン/ 1997-03-31/

言い換えれば、持続可能性は諸システム全体についての学びを必要とします。それは、私たちが役割を果たしているより広い状況とすべての命が依存している網の目のような関係性を理解するためです。システム的な考え方はシステムにおけるつながりについての理解をつくりだします。すべてのことはつながっており、このつながりはいくつかの動きとして現れます。簡単に言えば、もし私たちがシステムの一つの部分を変えるなら、他の部分が影響を受けます。私たちが活動しているシステムはとても複雑です。そして基本的な原則として物理法則があります。もちろん、システムとはグローバルなもの、すなわち地球です。質量保存の法則と熱力学法則がここでは重要です。すべては普遍的です。つまり、実際にはそれらは宇宙全体に当てはまります。

もし私たちが持続可能な世界を望むなら、生産性と生物の多様性がシステムの観点から外されてはならないのは議論の余地はありません。生物の多様性は直接、間接に無数の資源を私たちに提供しています。これが生産性の本質的な側面です。生物の多様性とは、互いに支え合う様々な種の複雑な網の目のようなものであり、これが私たちの命が依存している循環を提供しているのです。また、このように多様であることが変化に直面した自然を護るための重要な戦略です。

この課の参考資料

Video
What the Bleep Do We Know!? - 2005, Fox

Internet
www.wisdomuniversity.org
www.duaneelgin.com (Duane Elgin)
www.integrallife.com (Ken Wilber)
www.instituteforsacredactivism.org (Andrew Harvey)
www.joannamacy.net (Joanna Macy)
www.sahtouris.com (Elisabet Sahtouris)
www.GPIW.org (Global Peace Initiative of Women)
www.giordanobrunouniversity.com

実践を通しての学び

以下に示された瞑想の練習を推奨された順序で行い、終了後グループ全体で感想を共有してください。
参加者の感想がどのような学びを得ることができたかを調べる方法を工夫してください。

1. エコビレッジをホログラムとして視覚的に捉えてみましょう。私達の生活している社会からエコビレッジに取りいれてみたい要素はなんですか？どの要素を取り除きたいですか。少ない人数でグループディスカッションを行います。
2. 自分の身体をホログラムとして視覚的に捉えてみましょう。耳、手、足、瞳の虹彩、それらすべてが、体全体で持っているものと同じ要素を持っています。
3. お互い足をマッサージしてもらい、それぞれの部分が全身につながっていることを感じてみましょう。
4. イマジネーションを膨らませる演習１：こころを落ち着かせて座り、体を思い浮かべます。自分の身体を地球の中心と調和しているものとして捉えてみましょう。身体の中心と地球の中心がひとつであると感じることで、ガイア思想を直感的に認識することができます。
5. イマジネーションを膨らませる演習２：自分の身体を銀河の中心と調和しているものとして捉えてみましょう。身体の中心と銀河の中心がひとつであると感じることで、いくつもの次元での宇宙的つながりを認識することができます。
6. イマジネーションを膨らませる演習３：原子の視点から見てみましょう。自分の身体を、振動する無数の原子の集まりとして捉えてみましょう。これらの原子はエネルギーを持ち、やがて広がりはじめ、宇宙全体を覆いつくしていきます。

あなたが思いついたことと深く考えたことを日記に書いてください。あなたにとって、そして他のメンバーにとって興味を引いたあなたが感じたことを共有してください。

世界観２：自然ともう一度つながろう

目 標

- 「自然」に対する感受性を高めます。このことにより、力に溢れ活きいきとしたエコビレッジや持続可能な暮らしのデザインへの取り組みが可能となります。
- 「自然」の健康状態に注意を払うことは、持続可能性を語る基本となることを認識する。
- 「自然」に耳を傾け、「自然」を教師、導き手として理解する。
- 「自然」を大切にし、その健康を取り戻せるように積極的な行動をとる。まず、自分自身の体を大切にし、健康を取り戻すことから始める。
- 知性、身体、精神を通して「自然」と再びつながりあうことを目指す。

内 容

現在わたしたちが直面している深刻な問題の根底には、自然から切り離されてしまったという感覚やイメージがあります。文明、つまり都市文化は、自然を人工の環境ですべて置きかえることに、ひとつの目標を定めてきたかのようです。味気ない四角いコンクリートが巨大な都市を形づくり、そこには人間以外の生き物がほとんど存在せず、人工の物が、かつてあった命ある生態系を完全に埋めつくしてしまっています。人工物の中で暮らす都市生活を何世代も経るうちに、哲学や宗教の思索に変化が見えはじめました。人間は自分たちが自然から切り離された別個の存在らしいと考えだしたのです。それどころか、人間こそが自然に優越する存在であると考えるようになりました。どうしてこのようなことになったのでしょう？ 今までも、今も、そしてこれからも、人間は常にまったく自然の一部にすぎません。人類は、地球の命の物語で語られる 35 億年の生命進化の道筋に、ほんの最近になって現れた存在なのです。ところが人間は、傲慢にも自然より優位に立つと主張し、自然を搾取や消費の対象と見下し、手に負えないほど破壊的な力をふるい始めました。誇張でもなんでもなく、今のままではやがて地球上から、私たちの知っている形での生命を絶滅させてしまうかもしれません。

こうした窮状の中で、もっとも重要な生命線となりえるのは、自然の声に耳を傾けて自然ともう一度つながることです。ではこれをどのように伝えていけばよいのでしょう？

「高貴な野蛮人」的な考えを持ち出すつもりはありませんが、大地に根ざした暮らしを営む土着の文化では、人が自然とつながりあっていると一般に考えられています。そうした土着文化で暮らす人たちは、自らの暮らす場所が持つ生命力と自分自身との間に、互いに利益となるような親密な関係をつくりだしているのは間違いなく、また周囲の環境と互いに有益、かつ互いの関係性を明確にするやり方で、長い時間をかけて進化をしていく傾向があります。このように、実際に生活を営む場所と誠意をもって深く長くつきあい続けることは、持続可能型社会の鍵となります。そしてそうした場所では、地域の自然を健全に美しく保つことがそこで暮らす人たちのためになることも明らかです。このように、人間の生存が自然のあり方に懸かっているというような状況であれば、人は自然と調和してつながりつづけていくことでしょう。

「自然の声に耳を傾け、自然ともう一度つながろう」というテーマを学ぶにあたって、エコビレッジは非常にユニークな立場にあります。都会であれ、郊外であれ、田舎であれ、エコビレッジを特徴づける定義の一つに「人の活動が自然界に害をおよぼすことなくその一部になっている居住地である」という点があげられ

ます。理想主義的に聞こえてしまうかもしれませんが、これは出発点として評価できるでしょう。なぜなら、人間がもう一度自然の一部となることは、どうしても必要なことだからです。これを果たすべく、世界中のエコビレッジが次のような方針や実践を試みています。

- 土地の多くの部分を自然のままに残しておく。
- 特徴のある場所を見きわめて神聖な場所として保護する。木立や丘の頂き、崖、水脈など。
- 瞑想を行うスポットや聖域を設ける。
- 大地を祀るお宮、お堂、祭殿などを建てる。
- 建物は建築学と用地選定手法を用いてその地の景観になじむよう工夫する。
- 以前ダメージを受けたエリアを再生させ、よみがえらせる。
- エコビレッジの中には自然を取りいれ、できるだけどこからもよく目につくようする。

以上の方針や実践その他の手法を取りいれることで、エコビレッジは人間と自然との間に生じてしまった分断を癒し、最適な共生環境をつくり出していきます。その過程でもう一度自然に耳を傾けることができるようになり、そして日常を淡々と過ごしていく中で自然と再びつながりあっていきます。

世界観 2 では、EDE カリキュラムの精神面と環境面のつながりを学びます。自分の心や内面を常に見つめていると、自分や自己に対する意識が大きく広がっていくでしょう。そして、地球を癒すことは自らの責任なのだと受け入れ、さらにその責任は、疑問の余地がないほどはっきりしたものだと感じるようになります。いのちは、分けることのできないひとつのまとまりであり、また同時に部分がひとつになったものでもあります。そして各部分のすべてが元気で活き活きとしていなければ完全な状態を保つことができないという性質を持っています。ですから、自然とつながりなおすことは自己の内面を見つめることにもなるのです。手つかずのままの自然は、悲しみや苦しみを和らげ、深い問いかけへの答えを用意してくれる精神再生の源となりえます。庭にみずみずしい緑を育てていくこと、場が持っている生命力を敬い再生させること、自らを自然と切り離された存在であると認識することで自分自身も自分以外の人たちも抱えてしまっている心の傷を癒すこと。これらはすべて精神が本来持っている営みです。この営みによって、地球規模の進化やすべての生き物の（人類であれ他の種であれ）生命の可能性が高められるのです。生物圏において意識的に再生を試みることのできる存在としての人類。この考え方が新しい人類にとっての、精神的な使命になりうるでしょうか。

35 億年。これほど長い年月を経てきた自然のあり方には、存続を可能にしてきた何かが本質的にそなわっているはずです。人間がその傲慢さを捨て、先生でありガイドでもある自然に敬意をもって接していくとき、自然はわたしたち人間に多くの重要なことを教えてくれるでしょう。人体は 35 億年という進化の過程を経て生みだされた細胞による、見事なオーケストラといえます。つまり、自然とつながりなおすためのもっとも身近な環境は、私たち自身の身体なのです。自然に触れることのできる、あまりじゃまの入らなそうな場所に行ってみてください。近所の公園でも、自宅の庭でも構いません。しばらくの間静かに穏やかに座りつづけます。そして感覚のすべてを開いていきます。そのとき、自然の中に何を見ることができるでしょうか？

ここで、デヴィッド・ホルムグレンの言葉を紹介しましょう。デヴィッドは、パーマカルチャー（自然の中に見出されるシステムを倣った人間のシステムを形作るデザインシステム）の共同創始者です。彼の言葉は、私たちの感覚と共鳴します。

> *「わたしたち西洋の文化にはこびる現代心理の問題の一端は、わたしたちが自然から切り離され、その制限を受けないと思っていることにあります。じきに石油エネルギーがピークに達し、そして下降していけば、制限のない自然という考えが徹底的に破壊されるのは明らかです。わたしたちは自然にとっての矛盾でもなければ破壊者でもないという点もまた、認識しなければなりません。わたしたちにも自然の中での居場所があり、それを取りもどすことは可能なのです。」*
>
> デヴィッド・ホルムグレン

実践を通しての学びの例

この課では、とても創造的で柔軟性に富んだ活動が考えられます。参加者と一緒に学びの結果得たものを確認する方法を考えてみてください。時間の許す限り、できるだけ多く以下に挙げる活動に取り組んでみてください。

1. 自然の中を心の動きに意識しながら歩き回ってください。そしてそこで経験したことについて語ってください。
2. あなたの日記に詩や物語、そして個人的な考えも含めてください。
3. 一本の樹木とじっくり向き合ってみましょう。樹を単なる幹と枝の集まりとして見るのではなく、風景の中でその樹が果たしている働きのすべてを見るのです。
4. 個人であるいはグループで、自然や私たち人間を讃える儀式やセレモニーを新しく考えてみましょう。
5. 森のほとりで静かに座って観察の眼を養いましょう。そしてあなたの観察、感覚、考え、感情そして理解したことを書き留めましょう。
6. 蛙や川など別の生命の声を借りて、その視点から世界がどう見えるのかをグループに伝えます。
7. 風水やヴァストゥに基づく分析を行ったり、四方や七方向に向けて大地の祭壇を作ってみましょう。
8. ビジョン・クウェスト/木の儀式：自然とつながることで、私たちが誰であり、なぜここにいるのかについての理解が深まります。

いずれの場合も歓びと祝いの気持ち、団らんの真ん中にある炎と食べ物を大事にすることで、私たちの経験は素晴らしいものになるでしょう。

世界観３：気づきと意識の転換

目 標

- わたしたちの地球での「いのち」が宇宙との関わっているという視点と気づきを獲得する。
- わたしたちが生きる使命と目的を、より深いレベルまで掘りさげてみる。
- 精神的な気づきと意識の転換につながる実践をはじめる、あるいはその実践を深める。
- 内省を通して、私たちの場所について深く考える。

内 容

人は人生において何らかの「至高体験」をすることで、それまで持っていた基盤を揺すぶられるような、普段とは異なる現実に向き合うときがあります。そうした現実に出会うことで、人は様々な感情を抱くようになります。例えば、他と比べられないくらいの至福、宇宙すべてとつながっているような感覚、見返りを期待されない平穏で満たされた感覚、説明のいらない真実への直感的な理解、すべての生き物に対する無償の愛情などです。そして誰もが、その状態にとどまり続けたい、それを保ち続けたいと願うのですが、悲しいかな、その感情はすぐに消え、元の人生に戻ると、初体験者にはただ見たこともないほど広大で深遠なビジョンを見たという経験が残るだけです。この至高体験が「目覚め」となり、その後、確固とした足取りで内省する旅に踏みだしていく人もいます。

列子をご存知でしょうか。列子は、意識の転換の「目標」つまり「悟り」を強く望み、もっとも偉大な賢者ともっともすぐれた教えを求めてより深い旅を続けました。誠実で熱心だった列子は、学んだすべてのことに真摯に取り組みました。そして、そのような旅が 20 年を過ぎたある日、列子は、心の内側が光を放ち、言葉では言い表すことのできない「永遠なるもの」とごく自然に溶けあい、いつのまにか無意識の海へ浸りきっている自分を体験したのです。それが「悟り」でした。この意識の転換を経験した列子は、それからどうしたでしょう？ 彼は、座っていた座布から立ちあがり仲間たちに別れを告げ、家族の待つ農場にまっすぐに戻っていきました。妻の仕事を手伝い、豚にエサをやり、木を切り、畑の草取りをし、その気高い人生の残りをそこで過ごしたのです。

精神世界を探究する旅は、継続的に上昇していくのではなく、上がったり下がったりを繰りかえしながら、むしろ螺旋状に続いていくもののようです。いわば、旅をすることそれ自体が目的なのです。
そこには、奮闘すべき対象などはなく、ただ生きていく人生があるだけです。至福にしがみつこうすると、ときに失望をもたらします。むしろ、あらゆる人々のための至福が調和の中から常に自然に生まれてくるよう条件を整えていくことが豊かさにつながるのです。これこそが自然のあり方であり、エコビレッジの働きのひとつでもあります。

今、確かに何かが既に変わりました。これまでとは違う位置に重心が置かれたのです。古くて狭い自己中心的な生き方に固執しようとする考えは、すっかり衰退してきているかのように見えます。意識の転換とは、意識を拡大するということです。「私」は、「私」の中に、「私」を取り巻く世界をどんどん取りこみはじめています。「私」はもはや隔離された「個」ではなく、コミュニティをつくるために欠かせない要素のひとつです。人間のコミュニティは、生態系の中にしかるべき場所を見つけ、自然のコミュニティと共に進化していきます。生態系における人間のしかるべき場所とは、より大きな宿主である生命体ガイアの中に無数

に存在する生態系のひとつで、そのガイアは太陽系の一員、そして太陽系は、私たちの銀河の中に存在する無数の天体群のひとつです。さらにこの銀河は、銀河自体の調和のうちから、新しい世界が自然発生的に生まれてくるはっきりとした中心点を持っています。「私」がより多くを受けいれるにしたがって、「私」の責任も広がっていきます。「私」が考えることや行うことは結果をもたらす、つまり、新しい世界の誕生に影響をおよぼしうるということです。

この意識が転換する過程を体験し続けると、たいていの人は、深い本当の謙虚さを身につけ、そして、はかりしれないくらいに広くてきらめくように壮麗な「偉大なる神秘」に対して、誠実で慎み深い畏怖の念を抱くようになります。すべての精神的で宗教的な伝統は、人びとを奉仕の道へと導いているのではないでしょうか。より大きなひとつの存在のために奉仕すること、恵まれない人の苦しみを少しでも和らげるために奉仕すること。それは純粋な愛と共感からの奉仕であり、償いや赦しのための奉仕でもあります。真に愛するものの目をじっと見つめたとき、助けになりたいと願うこと以外、一体わたしたちに何ができるというのでしょう？

この課の参考資料

Videos
The Four Noble Truths - H.H. The XIV Dalai Lama, 1999, Mystic Fire Productions Invitation from God, an Interview with Thomas Keating, Marie Louise Lefevre.

実践を通しての学びの例

朝の話し合いの時に以下の実践の結果の感想を聞いて、どれだけ効果があったか確認してください。

1. 毎朝、静かに瞑想するための時間をとる。参加者がすでに知っている方法を実践する。瞑想に適した場所で行うこと。既定のコース時間内に参加者全員が指導を受けながら行う瞑想も予定されている。
2. 物事を肯定的に視覚化するテクニックを、このことに通じているコースのファシリテーターから学ぶ。
3. 指導が可能であれば。ハタヨーガ、太極拳、気功など、身体を動かす鍛錬を提供する。参加者同士で指導しあってもよい。
4. 一日を通して「意識的」でいられるよう、さまざまな方法をとる。
5. 積極的に個人やグループに関わりを持つ手法のひとつとして、朝の話し合いの時に前の日の晩みた夢の共有を行ってみる。

世界観４：個人と地球の健康

目 標

- 人間をホリスティックな存在、つまり知性、身体、精神が結合したものとして認識する。
- 地球との関係を癒すことが自らを癒すことにつながることを理解し、それに基づけて行動する。
- 人を癒す過程において、内面も含めたその人自身が何を必要としているかに私たちの注意を向ける。
- 伝統的な癒しの技術が持つ叡智を認め、現代の東洋と西洋の医療の知識とのバランスをとる。
- 人間がひとりひとり独自の存在であり、健康への道筋もそれぞれ異なることを認識する。
- 健康を維持し回復する最善の方法として予防を実践する。

内 容

地球との関わりを癒すことを通じて、私たちは自らを癒すことができます。昔の部族たちは、大地の上に生きるものたちが、互いに関わり合っていることに畏敬の念を表してきました。西洋文明は今日に至るまでの長い期間、地球を「利用可能な資源」の貯蔵庫として、また工業化社会が生み出した有害な残留物のゴミ捨て場として扱ってきました。大気や水、大地、食物が汚染され、私たちをむしばむようになりました。裕福な国々は持続可能な割り当てをはるかに超えた消費をこれまで行ってきましたし、なお今も消費しつづけています。こうした貪欲なライフスタイルで暮らすことで、世界中の子供たちが、豊かで健康な未来を享受する機会を狭めているのです。

地球に対する敬意と名誉ある関係を取り戻すことで、私たちは自然に、伝統的な治癒方法の叡智とふたたびつながるようになるでしょう。まずは私たちの周囲で育った健康的な食物を食べることや、散歩の道すがら私たちにほほえみかける薬草たちを集めることで、自らが生活している場の生命エネルギーを取り入れて健康な身体を維持することができます。現代の医療制度は、人工的・工業的に生産された医薬品に依存しており、自然との生き生きとした関係を否定しています。現代医学の技術は突発的なケースには役に立つかもしれませんが、健康の基本は何よりもホリスティックな予防法、いわゆる「ソフトな」アプローチにあるのです。エコビレッジでは、互いに補い合う医療や治療法の間での連携が生まれています。人はそれぞれ独自の存在であり、健康に対してもまたそれぞれですから、あらゆる選択肢が検討されるべきでしょう。

個人に対する医療の提供をグローバルな経済システムに結びつけることは、地域でのニーズを満たすために、強欲な多国籍企業への依存を高めるということになるのです。これは、まったく矛盾したことです。資本主義は、自然や文化的な資産をできるだけ早く、かつ効率的に搾取するようにデザインされたシステムですから、人の健康に関する分野には関係がありません。ほとんどの国で社会的な団結意識は計画的に根絶やしにされ、特に地域社会のレベルにおいて顕著です。そして、貧しい者はさらに貧しくなりつつあります。エコビレッジは、地域レベルで行われるケアの責務を取り戻すためのひとつの解答なのです。今後何年かのうちに、エコビレッジデザインの原則が至る所で退職者のコミュニティに適用されるかもしれません。年老いつつあるベビーブーム世代は、自分たちを支援する用意が政府や企業にはないことに気づき始めているからです。

健康とは単に病気を避けることではありません。健康とは生き方のことです。とても健康であるという状態は身体だけでなく、精神的、感情的な側面や社会的な側面、スピリチュアルな側面とも関係があります。

しかし、こうした生活を構成するあらゆる側面を、現代社会ではひとつひとつ切り離してとらえてしまう傾向があります。たとえば、仕事の場で自分を駆り立て、緊張状態を積み重ねて疲れ果ててしまっても、休暇で「健康な」時間を買うことで埋め合わせができるから大丈夫と考える人もいるでしょう。また、親しい人間関係はプライベートで築くものだから、世の中のことに関しては冷淡で無関心な人間味のない態度をとっていてもかまわないと思う人もいます。エコビレッジの生活は、完全にホリスティックであることを目指しています。そこでは生活のすべての側面が完全に再統合され（つまり細分化されていない状態になり）、全体が健康になっていくことを目標にしているのです。意義深い人間関係のつながりの中で生きることは、健康や癒しの基本です。受け入れられ、愛され、必要とされること ― それは希望にあふれた喜びや、新しいことを喜んで受け入れるおおらかさを、私たちの生活の中に呼び起こしてくれます。

こうした状況においては、病気をひとつの指標として見ることもできます。それは個人のありかたについてだけではなく、コミュニティや社会、そして自然といった周囲の環境についての情報を提供してくれます。とにかく大急ぎで症状を取り除こうとするのではなく、病気そのものを理解し、調整して、それから治していくということを学ぶことができるのです。グローバル化の影響を受けた社会では、いったん病気になったり、年老いて働けなくなり、自分の面倒を見ることができなくなると、経済的な価値を失ってしまいます。これに対してコミュニティでは、団結という新たな慣例をつくることで互いに支え合う場があるのです。

自分の体が社会の一部であるならば、自分の身体を癒すことは社会を癒すことの助けとなるはずです。産業革命とともに切り離されてしまった、心と身体を再結合することが持続可能な健康の始まりです。私たちは身体を「持っている」のではなく、私たちが身体「そのもの」なのです。心は分離された物質ではなく、むしろ身体と環境の間にある精神の橋渡し役であるといえます。身体のニーズに沿うことこそ、個人のベストな健康状態を維持する上でもっとも重要な方策です。そして、そのニーズとは新鮮な空気やきれいな水、栄養のある食べ物、定期的な運動、スキンシップや愛情なのです。あなたは自分と身体の関係はどのような状態にあると考えていますか？改善の余地はありませんか？ 自分と身体との関わりをより深く知る力を取り戻すために「身体認識を高める」エクササイズは数多くあります。そのいくつかを体験してみましょう。身体と身体に起こる感覚を探索する瞑想もあります。定期的に練習すれば、身体をエネルギーがある場として知覚することができるようになり、エネルギーのブロックされている部分や密度の高い部分に注目できるようになります。

こうしたエネルギーのレベルにおいては、私たちはみなスピリチュアルな存在として創造されているといえるでしょう。内側から神々しい光を発していて、優美でスピリチュアルな「身体」が物質的な身体の原型に重ね合わせられているのです。感情を妨げるもの、たとえば裁くことや怒り、切望などはすべて私たちの光を曇らせてしまいますから、そうしたものを乗り越え、取り払う必要があります。究極的には、そうしたものはすべてバイブレーションに関係することなのです。ですから、自由なバイブレーションの循環のために妨害は取り除くことです。チャクラの観点から見れば、プラーナの自由な動きを、エネルギーとしての身体システムのすべてのレベルにおいて取り戻す必要があります。そうするだけで、自律した気品を持って、神々しく沸き出すような光を放ち、わたしたちの本当のあり方を取り戻すことができるのです。

実践と通した学びの例

学びの進み具合に合わせて 4 人のグループを作り、以下の練習を一回以上してください。また参加者と一緒に学んだ結果について確認する方法を考えてください。

1. ゲームを通して身体の気づきの瞑想を実践する。
2. 癒しの技術を実践する。気功、陰陽療法、指圧、リバーシング（rebirthing）、呼吸法、プラーナを通じたストレスの発散など。
3. マッサージのサークルをつくる。
4. ハーブティーを調合し、試飲する。
5. チンキ剤や軟膏を調合する。
6. 参加者それぞれが一連のエアロビクス運動をリードする。
7. 他の参加者とフリスビーとバレーボールを楽しむ。ルールを見直してみる。
8. オープンでジェンダーを超えた性に関するコミュニケーション（実際の適用は必要ありません！）。
9. エコビレッジの規模で予防医療のシステムを組み立てる。
10. プログラム参加者と訪問者のための施設内クリニックをデザインし、互いの健康に関する問題に取り組み、治療のための処方を行う。
11. 調査をいくつかした後、薬草用ハーブ園をデザインしてつくりあげる。

世界観５：社会的に行動するための精神性

目 標

- 「内なる」精神転換と「外なる」社会変化の過程を、関連したものとして考える。
- 革新的な先駆者たちが、説得力に富んだ事例を残してくれている。それによって、社会的な行動を伴う精神性を目指す人たちが勇気と力を得られるようにする。
- 精神の目覚めと意識の転換とを、社会変化に必要な一項目として捉え、社会変化への行動を、精神に必要な一項目として捉える。
- 精神的な活動を行っている団体と社会的な活動を行っている団体の､創造的なコラボレーションを促す。相乗効果により双方の目標を共に推しすすめることができる。

内 容

過去何千年もの間、精神世界の探究者たちや修行者たちは、「高みに登る」ために山に登り、砂漠や森へと入っていかなければなりませんでした。そうやって、社会の賑わいや市場の喧騒から逃れるのです。世の中の問題に関わることなく、汚れなき自然の美の中に、求めていた静寂を見つけ隠遁することで、自身を精神世界へと浸らせきることができました。しかし、ここ最近の数十年、世界の騒音と汚染は、彼らが瞑想にふけるその山腹まで迫ってきたのです！ かつて山の修道院を美しく飾っていたのは､汚れのない青い空でした。その空が今では、酸性雨や変容を遂げる気候に蝕まれています。すぐそばで緑をしげらせていた森は、伐採者のノコギリの刃で次々と切りたおされています。人間社会が生みだした手に負えないほどの問題は、地球のありとあらゆるところへと広がってしまったのです。

このため精神世界の探究者たちは、山を下り、自分の修練の一環として世界と関わっていかざるをえなくなっています。近代文明が生みだした危機は、人類の今後の繁栄どころか、ただ生きのびていくためだけに抜本的転換が必要とされるところにまで達してしまいました。精神世界の探究者たちに課せられた大きな課題は、今や、こうした転換をおしすすめていくことなのです。

非宗教的な社会変革のリーダーシップにおいても長く同様の傾向が支配的でした。社会的経済的改革だけに焦点を絞る一方、人生における心のあり方や哲学に関わる微妙な側面を避けてきたのです。社会変化を起こしてきた著名な活動家や組織は、宗教や精神的団体に所属したり関わったりすることを、何がどうあっても避けようとしてきました。社会の変化とは、実際的な文化の刷新であると見なされました。社会の需要がそれを求めるのであり、あくまでも法や企業や科学という枠組みに基盤が置かれていました。個人がどういったことに価値を置くか、あるいはどのように動くかなどは、実用主義的な「現実社会」にはほとんど影響を及ぼさないもので、精神性や意識の転換などを考慮しても仕方がないとされてきました。

しかし、人びとの意識と価値観が大きく変わらなければ社会も変わらないことに、改革リーダーたちは気づきはじめました。例を挙げてみましょう。太陽エネルギーを熱心に支持する人たちは、世界中の発展途上国が太陽エネルギーを取りいれられるよう、長期にわたって戦いをつづけてきました。太陽エネルギーは、危険な核エネルギーや汚染をもたらす石油エネルギーとは違い、クリーンな分散型エネルギーです。そして、世界銀行や国際通貨基金(IMF)がその大事なエネルギーをようやく認めました。しかし、その後に起きたことは、辺境の土着部族の社会に太陽エネルギー型テレビが設置され、西側の企業広告や MTV、アメリカのテレ

ビドラマなどが流されるという事態でした。この技術侵略の衝撃と脅威により、地球上にわずかに残されていた持続可能な文化の社会構造は、ほんの数年のうちに、破壊しつくされました。まったく皮肉なことに、地球に優しい太陽エネルギーの美点が、アフリカの奥地の住民にマクドナルドを押しつけ、オーストラリアのアボリジニたちにMTVのヒット曲を歌わせるよう仕向けてしまったのです。

ここからわかることは単純で、次の二つに分けられます。ひとつは社会変革の伴わない精神は動かない脚のようなものであるということ、もうひとつは、精神性を伴わない社会変革は見えない目のようなものだということです。精神的変革を、根本的な社会変革や環境変化を欠いたままで行おうとしても、最終的には虚しい結果に行きつきます。それはいわば、「生物圏がぼろぼろに崩れていくのを放置したままでも、まだ魂が救われると願ってしまうようなもの（セオドア・ロスザック）」なのです。反対に、精神的な気づきなしに社会や環境を変えようとしても、どうにもならないことは明らかです。まるで、人間の魂は滅びゆくままにしておきながら、生物圏が守られるよう願うようなものです。

「精神の覚醒」とは、究極的には、人の心や考えの中に、愛と知恵を芽生えさせることにほかなりません。この転換なくしては、社会や環境の変革がどんなに見込みがありそうに見えても、世界中を覆っている消費主義や人口増加のスピードに、あっという間についていけなくなってしまうでしょう。意識や価値観の転換は、もはや少数だけが選ぶことのできる贅沢な行為などではありません。ごく普通の人たちを含めてすべての人が、ぜひとも取りかからなければならないことなのです。

幸いなことに、ここ十年間、新しい試みが大きなうねりとなって生まれつつあります。そのうねりによって、社会変革と精神的実践との間にあった深い割れ目に、橋がかけられようとしています。「社会的な行動を伴う精神性（霊性）」の革新的な形態が、多くのの方向から一度に現れてきています。これまで瞑想的な修練にのみ身を尽くしていた仏教やヒンズー教の団体も、実際に街に出て社会に直接訴えかけるようになりました。一方で、生活に瞑想を取りいれる社会リーダーたちも、かつてないほどに増えつつあります。社会的に行動するための心のあり方は、新鮮な注目を浴びてはいますが、特に新しい考え方というわけではありません。古代インドの経典、ウパニシャッドでは、瞑想にばかりふける人生も活動にばかり打ちこむ人生も、ともに危険なものであると警告し、活動と瞑想の双方に取りくむ人生のすばらしさを讃えています。

社会的に行動することにおける心のあり方のルーツは、同じく西洋の伝統の中にも強く見ることができます。たとえばユダヤ教の預言は、正義と人間の尊厳を明瞭に求めています。その声は、他の様々な聖典の中で、おそらくもっとも大きなものです。キリスト教の信仰は、長い間、精神的な奉仕の伝統を培ってきました。マザーテレサが果たしてきた使命に、こうした伝統をはっきりと見ることができるでしょう。また、同じようにわたしたちを勇気づけてくれるのが、ドロシー・デイです。彼女は、カトリック労働者運動を創立し、185 カ所におよぶ「ホスピタリティー（もてなし）の家」を設立しました。「ホスピタリティーの家」は貧しい人たちに提供され、社会からの抑圧に立ち向かうための場所となりました。トーマス・マートン、それにベリガン兄弟のようにベトナム戦争に反対した先駆者たちもいます。

かつて、シーク教の大家、タラ・シンは、「人々は貧困を乗りこえてきた。しかし、裕福な暮らしを生きのびることができるかどうかわたしは疑問に感じる」と述べました。社会的に行動するための心のあり方を持つことで、人は単に生きのびるだけでなく、繁栄していくビジョンを大きく広げることができます。わたしたちは、物を手に入れる代わりに精神的な宝物を獲得していくことを学び、限りある外界の資源をひっきりなしに掘り続けるのをやめ、そして、心の内にある無限の泉へと向かっていきます。こうして、抑えのきかない裕福さへの欲望は、溢れ出す愛の中に、溶けてなくなっていくのです。

実践と通しての学びの例

時間の許す限り、以下の活動をできるだけ多く実践してみてください。そしてこれらの活動が参加者にどのようなインパクトを与えたのか確認する方法を考えてください。

1. 物的所有物や名声や評判といった社会的価値に、わたしたちがどのように囚われているか知るための瞑想を行う。こうした執着から解放されるための方法を考え、実践し、議論する。
2. サトゥヤナ研究所の「積極的にかかわりあうような心のあり方の原理」や、フィンドホーンの「共通の場からの声」など、関わりを持つ精神性原理の体系を紹介する。わたしたちの生活に、これらが実際にどのように適用されるかを模索する。
3. 異なる社会階層を経験してみること、そして物質的な豊さと精神的な状態が私たちをどのように条件づけるのかを経験するための小グループでの議論の練習を考える。（Jenny Ladd と Arnie Mendel の活動を参考にする）。
4. 社会的に行動するための心のあり方について、行動に基づく実践的なグループプロジェクトについての意見を出しあう。このプロジェクトでは、社会的行動を伴う精神性という考えに則って（サトゥヤナ研究所に倣う）、特定の社会問題や環境問題に率先して取り組む。
5. 特定の争いや社会的なトラブルに、精神変容のエネルギーや洞察を向けるための手段として、瞑想や祈りのような静かに想いを巡らせる実践を行なう。
6. 議論、演劇、著作を通して社会や環境における不公正の証人となることの持つ力について語り合う（例：「ウーマンインブラック：女性の反戦運動」）。
7. あなたの精神的な状態が、あなたが社会変革をもたらす助けになりうる方法について議論する。

基礎資料

Adams, Patch. (1998). Gesundheit: Bringing Good Health to You, the Medical System, and Society through Physician Service, Complementary Therapies, Humor, and Joy. Rochester, VT: Healing Arts Press.

Aung San Suu Kyi (1995). Freedom from Fear and Other Writings. London: Penguin Books.

Bond, George D. (2004). Buddhism at Work: Community Development, Social Empowerment and the Sarvodaya Movement. Sterling, VA: Kumarian Press.

Beck, Don E. and Cowan, Christopher C. (1996). Spiral Dynamics: Mastering Values, Leadership, and Change. Cambridge, Mass., USA: Blackwell Business.

Berry, Thomas. (1999). The Great Work, Our Way into the Future. New York: Bell Tower.

Berry, Thomas (2006). Evening Thoughts: Reflecting on Earth as Sacred Community. San Francisco: Sierra Club Book.

Benyus, Janine M. (1997). Biomimicry: Innovation Inspired by Nature. New York: William Morrow.

Bohm, David (1980). Wholeness and the Implicate Order. London: Rutledge.

Capra, Fritjof (2004). The Hidden Connections: A Science for Sustainable Living. New York: Anchor.

Chopra, Deepak (1991). Perfect Health: The Complete Mind/Body Guide. New York: Harmony Books.

Dalai Lama. (2010). Toward a True Kinship of Faiths. How the World's Religions can come together. Three Rivers Press, N.Y.

Diamond, John. (2001). Holism and Beyond: The Essence of Holistic Medicine, Ridgefield CT: Enhancement Books.

Eisler, Riane. (1987). The Chalice and the Blade. San Francisco, Harper.

Elgin, Duane. (2000). Promise Ahead: A Vision of Hope and Action for Humanity's Future. (Columbus, Georgia: Quill Publications.

Elgin, Duane. (2009). The Living Universe. San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers.

Gibran, Kahil. (1962). The Prophet. New York: Alfred A. Knopf.

Harvey, Andrew. (2009). The Hope: A Guide to Sacred Activism. Carlsbad, California: Hay House.

Harner, Michael. (1990). The Way of the Shaman. San Francisco: Harper.

Hutanuwatr, Pracha and Manivannan, Ramu. (2005). The Asian Future: Dialogues for Change (Two Volumes). Zedbooks, London

Jackson, Ross. (2007). A Gaian Utopia. Retrieved 1/25/2012 from www.ross-jackson.com

Jackson, Ross. (2000). Kali Yuga Odyssey. San Francisco: Robert D. Reed Publishers.

Klein, Allen. (1989). The Healing Power of Humor. Los Angeles: Tarcher.

Kligler, Benjamin. (2004). Integrative Medicine. New York: McGraw-Hill, Medical Pub. Div.

Keepin, Will. (2007). Divine Duality: The Power of Reconciliation Between Women and Men. Prescott AZ: Hohm Press.

Keepin, Will and Harland, Maddy (Eds.). (2011). The Song of the Earth: The Emerging Synthesis of the Scientific and Spiritual Worldviews. UK: Permanent Publications. Downloaded gratis from www.gaiaeducation.org

Kumar, Satish. (2005. March/April) The Spiritual Imperative. Resurgence Magazine. Issue 229.

Lovelock, J.E. (1979). Gaia: A New Look at Life on Earth. New York: Oxford University Press

Macy, Joanna. (1985). Dharma and Development: Religion as Resource in the Sarvodaya Self Help Movement. Sterling VA: Kumarian Press.

Macy, Joanna. (1998). Coming Back to Life: Practices to Reconnect Our Lives, Our World. Gabriola Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Markides, Kyriacos. (1985). The Magus of Strovolos: The Extraordinary World of a Spiritual Healer. London: Penguin Books.

Melchizedek, Drunvalo. (2003) Living in the Heart: How to Enter into the Sacred, Flagstaff, Arizona:Light Technology Publishing.

McDonough, W. and Braungart, M. (2002). Cradle to Cradle: Remaking the Way We Make Thing. New York: North Point Press.

Næss, A. (1989). Ecology, Community and Lifestyle: Outline of an Ecosophy, Cambridge: Cambridge University Press.

Norberg-Hodge, Helena. (1991). Ancient Futures: Learning from Ladakh. San Francisco: Sierra Club Books.

Russell, Peter. (Sep/Oct 2003). Deep Mind: Beyond Science, Behind Spirit. Resurgence no. 220.

Sahtouris, Elisabet. (1989). Gaia: The Human Journey from Chaos to Cosmos. New York: Pocket Books

Sahtouris, Elisabet. (2000). Earthdance: Living Systems in Evolution. San Jose, CA: iUniverse Publishing.

Seed, John. (1988). Thinking Like a Mountain. Philadelphia: New Society Publishers.

Shields, Katrina. (1994). In the Tiger's Mouth: An Empowerment Guide for Social Action. Gabriola Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Shiva, Vandana. (1994). Staying Alive: Women, Ecology, and Development. London: Zed Books.

Sivaraksa, Sulak. (1999). Global Healing: Essays and Interviews on Structural Violence, Social Development and Spiritual Healing. Bangkok: Thai Inter-Religious Commission for Development.

Sri Aurobindo. (1985). The Life Divine. Delhi: Lotus Press.

Suvaraksa, Sulak. (2005). Culture, Conflict, Change: Engaged Buddhism in a Globalizing World. Boston: Wisdom Publications.

Thich Nhat Hanh. (2003). Creating True Peace: Ending Violence in Yourself, Your Family, Your Community, and the World. New York: Free Press.

Tolle, Eckhart. (2005). The New Earth: Awakening to Your Life's Purpose. New York: Penguin Books.

Wilber, Ken. (2001). A Theory of Everything. An Integral Vision for Business, Politics, Science and Spiritu ality. Dublin: Gateway.

Wong Kiew Kit. (2002). The Complete Book of Chinese Medicine: A Holistic Approach to Physical, Emotional and Mental Health. Rockville, MD: Cosmos Publishers.

社会領域

学びの成果

参加者は以下のことについて学びます。

- ✓ 共同プロジェクトのために共通のビジョンを創ること。
- ✓ リーダーシップのスキルとグループメンバーが皆参加できる方法を向上させること。
- ✓ 皆が受け入れ、支持できるような決定をすること。
- ✓ 成長のきっかけとして対立と多様性を受け入れること。
- ✓ 自発的で目的をもった儀礼とお祝いを創ること。

「次のブッダは人間の姿で現れることはないだろう。次のブッダはコミュニティの姿で現れるかもしれない。それは他者を理解しようと努め、互いを慈しむ優しさを持ち、大事なことを常に意識しながら、人々が暮らすコミュニティである。これこそ地球の命をつなぐために私たちにできる、最も大事なことではないだろうか」

ティク・ナット・ハン

概 要

考古学的な証拠を見ると、多くの原始的な社会のあり方がわかります。そこでは、人々は比較的平等で、強いつながりを持つ家族規模の「一群」を築き、自然とともに生きていました。今日、私たちは互いに協力し合い、調和を大切にしながらともに生活する暮らしを意識的に再構築する必要に迫られています。したがって有益なコミュニティの種をまき、育み、建て直し、他のコミュニティとの間のネットワークを作ることは、生き生きとした持続可能な未来のためになくてはならないステップとなっています。見本となる「生活と学びのセンター」として、エコビレッジは平和と繁栄の新しいグローバルな文化を育んでいます。そこでは多様な文化をもち、それぞれの精神的な歩みを辿ってきた、経済的背景の異なる人々が、共に多様性とはどのようなものかについて考え、これを受け入れています。個人の成長をもたらし、互いを認め、尊重し、慈しみ合うような、これまでになく広い世界に一歩足を踏み入れることで、またこれらを学ぶ正しい手段を用いることで、私たちは本来人に備わっている能力や創造性を自由に発揮し、それらをあらゆるものにとって役に立つように生かすことができます。私たちが自らの中に、そしてまず自分が暮らす地域の中に、社会的な集まりの中に平和を生み出せるならば、優しさや思いやり、信頼や善意がそこに生まれ、何倍にも広がっていくことでしょう。

工業化社会とグローバル経済システムは、過剰消費と共に人々に自立の感覚をもたらしましたが、それと同時に不快で致命的とも言える副作用ももたらしました。 例えば収奪的な個人主義、疎外感、強い依存関係、家族の分裂などです。開発の進んでいない国々 — 伝統的な人々の間のつながりが残っている国々 — には「北」と呼ばれる先進諸国が学ぶべきことがたくさんあります。今も世界の多くの地域に残っている伝統的

な村のコミュニティシステムの中に、最も持続可能な見習うべき社会のあり方を見ることができるかもしれません。ひょっとすると、途上国と呼ばれている国の人々が、工業社会や過剰な個人主義の段階を飛び越えて、脱工業化した知識ベースの、そして協力と相互の助け合いによるエコビレッジの未来へと到達するかもしれないのです。持続可能な開発のための戦略として、教育とグローバルな交流を重視する理由もそこにあります。

生活の中で多様な人々と関わる機会が広がることは、エコビレッジの暮らしの大きな魅力で、最大の財産とも言えるでしょう。エコビレッジのコミュニティの一員となれば、身勝手に個人を主張する人たちでは手にできないようなたくさんの恩恵にあずかることができます。例えば、安全で保護された環境で子育てができる場所。そこには子どもが将来の手本になる多様な人々との関わりがあります。そして家族や友人とゆったりと過ごす時間が増え、仕事でのストレスや通勤にかける時間を減らすこともできます。自家栽培品の販売やコテージ経営など起業、またはコミュニティ内の友人との共同経営のチャンスも考えられます。また、親にとっては、自宅で子育てと専門職を両立することもできるのです。隣人と一緒に音楽や演劇など創造的な取り組みに打ち込むことも、食事を一緒にすることもできるでしょう。オフィス、店舗、レジャー用設備などを共有し、出費を減らすことにより、たくさん稼がなくても豊かに暮らすことができます。エコビレッジを拠点として政治活動が展開されることも少なくありません。味わいのある人間関係への憧れがここで満たされることで、大量消費、依存症、犯罪は劇的に減ります。エコビレッジは、障害のある人や高齢者、そのほかの試練を抱える人達にとっても社会に溶け込み、今より豊かで満ち足りた暮らしを営める場所となる可能性があります。

私たちの祖先は、コミュニティ内で起こっていることを把握し、そしてその責任を取ることができるくらいの小さな規模のグループを組織して生活していましたが、それは自然のことといえるでしょう。衣食住など基本的な欲求は今よりずっとたやすく満たされたため、娯楽のための時間も多かったのです。これはコミュニティの生活では仕事をしなくていい、と言っているのではありません。実際、自分のふるまいをいつも振り返ることが必要で、それは他者のニーズや癖に対する意識を高めることでもあるのです。特に行き過ぎた個人主義のパラダイムの中で育った人々にとっては、コミュニティ内で他者に敬意をもって、お互いのためになるようなやりとりをする、その繊細さを身に付けるのは、そうした接し方が自分にとって当たり前になるまでは大変かもしれません。そのような人はコミュニティでの暮らし方が、人類が受け継いできた財産の一部で、人に元々備わっているものであると受け入れられるまでは大変に感じるでしょう。

昔からコミュニティが築かれた基盤が無い場所に、良好な関係で結ばれ、調和のとれたコミュニティを創るのは大きなチャレンジであり、大きな試練が待ち受けています。誤解や情報が誤って伝わることから生じる枠や限界を越えて人と人を結びつけるには、明確で穏やかな、強い意志の力が必要です。エコビレッジなどのインテンショナル・コミュニティ の取り組みが分裂に終わる原因で、最も多いのは対立です。そのため、コミュニティの成功例が増えるには、必ず癒しのプロセスが取り入れられることが大切です。そうすることで私たちは人類の歴史で繰り返されてきた苦痛や暴力のサイクルから抜け出し、新しい生き方を始める責任を引き受けることができるのです。実際、この癒しのプロセスは多くの人が望んでいるものであり、そうした健全で建設的な社会スキルの数々は授業を通じて身に付けられるのです！争いがなく生産的な関係は、気まぐれや偶然の産物ではなく、意識して手順を踏むことで確実に選び取れるものなのです。

このように、EDE の社会的側面では、上に挙げたような極めて重要度の高い問題を扱い、問題に効果的に対処するために必要なツールやスキルを提供しています。持続可能なコミュニティの真髄ともいえるエコビレッジで暮らすことで、言葉やコミュニケーションの技術を向上させ、実際に使ってみる、貴重な機会が得ら

れるでしょう。そしてそれらの技術を使って、人と人との相互作用の微妙な部分を目に見える形で表面化させ、観察し、それに向き合い、高めていく機会を得るでしょう。このカリキュラムを通じて私たちは、多くの経験を生かしてこれまでに蓄積され、今も日々積み重ねられている知恵を出来る限り共有していきたいと思っています。目標とするのは、新しいコミュニティの創造と、そして今あるコミュニティの再生を手助けすることです。活力あるコミュニティは、その中で暮らす人々が活き活きとしていることから生まれるのです！

EDE の社会の領域は、次に挙げる 5 つの課を通して人間存在にとって不可欠の側面について取り組みます。

- ✓ **社会 1:「コミュニティ創設と多様性の享受」** この課ではコミュニティ立ち上げの基本を議論し、信頼に満ちた雰囲気を作り出すにはどのような価値観、スキルが有効かを教えます。
- ✓ **社会 2：「コミュニケーション・スキル、対立、ファシリテーションと意思決定」** この課では意志決定と紛争の調停とグループのファシリテーションのための技術を身に付ける旅に出かけましょう。
- ✓ **社会 3 ：「リーダーシップとエンパワーメント」** この課では、「内から湧き出る力」と「抑圧する力」の違いを学び、グループと世界のために責任を果たすという重要な視点からリーダーシップのスキルを身に付けます。
- ✓ **社会 4：「アート、儀礼、社会変革」** この課ではコミュニティと個人が、いかにして祝うことについて創造的な力を呼び起こすことができるのかを描きます。
- ✓ **社会 5 ：「教育、人脈、現状変革のために行動を起こすべきという考え」** この課では、過去と未来の世代、そして世界中のコミュニティと私たちがつながっていることを知り、このことについての気づきを与えてくれる側面をみてみます。

社会領域の資料：『あなたと私を超えて』

『あなたと私を超えて：コミュニティを創るための社会的な道具』はガイアエデュケーションの双書『地球上のどこででも使える持続可能性のための四つの鍵』の社会の鍵です。これは無料で次のサイトからダウンロードできます。
www.gaiaeducation.org

社会１： コミュニティ創設と多様性の享受

目 標

- コミュニティ創設にある社会を変えるほどの大きな力を活用する。
- コミュニティを始めるための社会における人間関係のスキルを獲得する。このことは、コアグループを組織すること、共通のビジョンを練り上げること、コミュニティを結びつける何かを創り出すこと、信頼と善意の空気を吹き込むことを含む。
- 何をするにしても気持ちの問題が含まれていることを学ぶ。
- 他者との関わりにおいて赦し、共感し、和解する資質を身に付ける。
- 多様性を受け入れ、異なっていることが暮らしに豊かさをもたらすことを示す心構えをもつ。

内 容

「自分ごととして引き受ける覚悟のある市民による小さなグループが世界を変えることができる。このことは確かなことだ。実際、これまでもそうだった。」

マーガレット・ミード

コミュニティを創ることの力

コミュニティを創ることには大変大きな可能性が含まれています。「グループの心」はどの個人の心よりもはるかに賢く、そして、グループが持つ潜在能力は、個人ひとりがどんなに努力しても到底及ばないはるかに広い可能性を秘めています。とにもかくにもわたしたちは、いのちの繋がりのひとつとしてのコミュニティの中で生きています。この事実を認識し、コミュニティを、きちんと前向きに形を整えながら率先してつくりだしていこうとするかどうかは、わたしたちが意識して選択することです。

本質的に、生命を尊重するということは、全ての生物レベルのコミュニティを意識し大切にすることです。このカリキュラムの本章では人のコミュニティの創設を取り上げていますが、取り組みに必要となる資質は、自然界との関わりにも基本的に共通するものです。つながりの中で考え、行動することはどの世界においても重要です。物事を注意深く観察し、伝える能力を更にしっかり磨き続けることがその足がかりとなります。わたしたちは自分の中で、「それはもう知っているみんなわかっている」と感じてしまうことがありますが、そうやって内側で決めつけてしまうところから外に顔を出してみることで、物事を新しくとらえることができます。このことにより、それぞれが持っている特別な資質の本当の個性が開花します。そして協力し、共有することが可能となります。新しい世界的な文化は、多くの個性と共同作業が積み重ねられた成果として創りだされるのです。

スタート：コミュニティのメンバーを結び付けるもの

力強く団結したコミュニティは、強い意志を持った個人が集まって作られます。少人数であっても熱意のあるコアグループで新しくことを始めるのが、大抵の場合もっとも簡単な方法になります。シンプルでわかりやすく誰もが心から信じている。そういう共通ビジョンの中に、コミュニティを結びつける「接着剤」としての役割を果たす「グルー」があります。この共通ビジョンを言葉にして記録することは、コミュニティを始めるにあたって、最初の目標として取り組む作業のひとつです。ひとたびコミュニティ全体として目指す目的とそこに秘められた価値観の枠組みが示され、全てのメンバーにしっかりと受け止められれば、グループが育っていける健全な土壌が出来上がったことになります。ダイアン・リーフ・クリスチャンも言うように、ビジョンというものは、そこに向かって集団の全員が一体感を抱くことができ、発想を膨らませ、うちこめるものであるべきです。メンバー全員がそのビジョンに確実に寄与できるいろいろなテクニックも使われます。(例：未来についてのワークショップ)

友情、思いやり、そしてお互いに助け合うことは、人間関係の大事な要素として、コミュニティをひとつに結びつけるものといえます。信頼に満ちた雰囲気の中では共同作業は順調に進み、笑いが溢れる楽しい時間となります。もちろん信頼は徐々に育まれるもので、心と心が深いところで通い合うことから生まれます。もし私たちが自分のことを弱さや強さを含めてありのままの姿で他の人から見られることを受け入れるなら、だれもが考えたことや感じていることをそのまま話せるとしたら、信頼感は自然と生まれるものです。そしてグループ全体の幸福という感覚が生まれます。またとない素晴らしい発見の旅に、これから一緒に出かけるのです。コミュニティは菜園のようなものです。そこでの人の関わりという畑にきめ細かく愛情を注ぎ、手入れが行き届けば、豊かな実りがもたらされるのです。

心の問題を含める

コミュニティでは、社会の構造や組織にも、人間性のさまざまな面が映しだされています。私たちは、頭で考えたことに心と感情、魂と精神を結びつけて、すべてのいのちをつつみこむような解決方法を探し求める必要があります。わたしたちにはビジョンを追い求めるための時間と空間が必要です。また、現実的な話や意思決定をするための時間と空間、大人数のグループの中だけでなく親しい友人たちとの間で、感じたことを創造的に表現するための時間と空間、お祝いをしたり沈黙のための時間と空間、そして最後にもうひとつ大事なのが、一緒に働くための時間と空間です。多くのグループで、内容（言われたこと、議論されている問題）に集中するあまり、プロセス（各人の深い部分のニーズが満たされた度合いによって、グループ内でどんな感情が沸き起こったか）が無視されています。非生産的で感情的なやりとりに迷いこんでしまうことを怖れると、こうしたことが起こりがちです。しかし、感情が淀んで動かない状態になると、グループとして効率的に作業をすすめることは困難になります。感情が美しさと威厳をもって表現されれば、グループを良い方向へ突き動かすことができるのです。

この目的ではいろいろなテクニックも開発されていますが、自分たちの社会的・文化的背景を考慮して「ちょうどいい方法」を見つけることが重要となります。気持ちを伝え合い、反映させるためのお話会や日誌も、心を通い合わせる非常に良い方法です。夢を共有したり劇にしたりという活動からも、グループの問題について、無意識のうちにもっていたわだかまりを発見することがあるかもしれません。非暴力のコミュニケーション、参加者同士で行うカウンセリング、「フォーラム」（ドイツのコミュニティ「ZEGG」で実践されている話し合いの方法）など、他のテクニックによってもコミュニケーションを通じて自己を探究するという雰囲気を強めます。音楽、ゲーム、笑いもコミュニケーションを深めるために欠かせない要素です。そうしたプロセスを通じて、私たちは心を開き、仲間の中にいるときのいきいきとした楽しい感覚を取り戻すことができるのです。

和解と赦しの大切さ

コミュニティづくりの過程で、ともに成長することには時に苦痛も伴います。他者を赦し、そして他者に赦しを請うためには、深い「技（わざ）」を学ばなければなりません。まるで、痛みをそのままにさせないよう、途切れることのない浄化のプロセスが日々の生活とともに起こり絡みあうかのように。例えば、心無い言葉や苛立ち、怒りをぶつけられたときの小さな痛みがあります。それは、人類史が味わってきた、虐待や拷問やレイプや殺戮などで引きおこされる、大きな規模の痛みに通じるものです。多くの国で、平和を求めて立ち上がるグループや個人が、たえず脅威にさらされています。人間の秘める底知れぬ心の闇に分け入るのは恐ろしく、私たちは目を反らしたり、否定したりして、なんとかして私たちの目に留まらないところに追いやろうとします。コミュニティにおいては、私たちは仲間との間にこうした心の奥の苦痛を表現できる場を作り出すことができます。傷つけられた人、傷つけた人双方の話を聞く、それだけでも涙のあふれる気持ちを受け止めることとなり、癒しが始まります。南アフリカ共和国がアパルトヘイトのトラウマの後に経験した「真理と和解のプロセス」には、平和的な変革の道すじが示されています。

> *「赦すことで、過去にとらわれることなく、過去を忘れずにいることが可能になります。赦すことができなければ、前に進むことも歴史をまっすぐ描くこともできずに、対立に後戻りし、繰り返すしかなくなります。古くからの教えにもそうあります」*
>
> デズモンド・ツツ『赦しと和解』の導入部分から

多様性を享受する

エコビレッジの中心にあるのは「多様性の中のまとまり」という考え方で、力強い個々人の成長が、その人だけに生まれながらにして授けられた才能と相乗効果を伴って結びつくことで、夢を一緒に実現させようとするものです。相乗効果を得る（持ち寄ったものの総和より結果が大きくなること）ためには、各人が自分の最良のものを持ち寄る必要があります。そのためには私たちはみな、自分と同じくらいに他者のニーズや考え、才能について興味を持つことが必要です。他者の素晴らしいところを心から喜び合う、そうしたあり方を実践することが求められています。コミュニティでは、他の人が取って代われない居場所と役割が全ての人にあるのです。自然界がそうであるように、生命あるすべての有機体がつながり合い、他のすべての部分と伝達し合っているのです。

歴史を通じて、私たちは民族や宗教、文化的なアイデンティティーを自分と他者とを隔てるものとして使って来ました。今日、単一文化が日々、種の多様性を狭め続けている中、私たちは「異なっていること」こそが頼りになる経験と智恵の宝庫であって、その違いをありがたく思っているのです。車座になって語り合う時、私たちは表現や視点は多様なありながら同じ目標に向かっている光線のようになります。そして、すべての個人が、より大きな真実をつくるための一部分を潜在的に持っているのです。

コミュニティを創設する

コアグループを組織したら、グループの輪を広げるために、以下のプロセスがあります。

- 現在あるコミュニティの前例に学ぶ：訪問、交流、既存のコミュニティがたどったプロセスについて知り、取り入れることはより明確で具体的なビジョンと、成功へ向けて有効性を実証済みの方法論を確立する助けになる。
- 土地が既に確保したら、エコビレッジまたはパーマカルチャー・デザインコースの講義を企画することで、複数の実際の土地利用計画を作ることができ、多くの創造的なアイデアを得ることができる。

こうしたデザインコースが実施されることで、その土地に前向きなエネルギーと祝祭のようなにぎわいを吹き込むことにもなる。参加者の一部が土地利用計画の実現を手伝うために滞在する場合もある。

- ファシリテーションと対立の解決に関するコースは、効果的な意思決定のしくみを確立するのに役立つ。
- 次のステップは、ワーキンググループの組織、課題ごとの担当者の決定。
- その次に、事務局員を指名し、全体の定例会議を始める。
- 重要なこととして、早いうちから毎月の「会費」を設定し、参加者各人が真剣に参画する状況をつくる。
- すべてのプロセスにおいて、祝祭のようなムードをたやさないようにすること、そして何年にもにわたり、長く、時間のかかる開発の道のりを経験しようとしているグループの気持ちの盛り上がりが失われないよう、継続的にエネルギーを補給することがとても大切である。

参考資料

実例集

Communities Directory - Fellowship of Intentional Community, updated regularly Eurotopia: Directory of Intentional Communities and Ecovillages in Europe

Videos

Visions of Utopia - Community Catalyst Project, 2002 The Future of Paradise - David Kanaley Straight from the Heart - Findhorn Foundation, 1995 DVD's from many ecovillages see www GEN

実践を通しての学びの例

以下の方法を使って、機会あるごとにコミュニティを創ることを丁寧に実践してみてください。そして、その有用性と効果を確認する方法を考えてみてください。

1. グループ内で何が起こっているかについて各人の観察を共有し、分析する。
2. 夢で見たことの共有と物語を話すこと。
3. 各人の今までの人生についての分かち合い
4. グループのサークルミーティングでのトーキング・スティックの使用。
5. フォーラム（ドイツ・ZEGG コミュニティより）。
6. コカウンセリング。
7. 共通の価値とビジョンを探求する。
8. Robert Jungk 考案の「 未来についてのワークショップ 」（Ecovillage Living 参照）
9. 事例研究：他のコミュニティの組織について書いて文書を読む
10. 新しいゲームの数々(www.commonaction.org/gamesguide.pdf)

社会 2：コミュニケーションスキル、ファシリテーションと意思決定

目 標

- 「全員一致」による決定に代わりうるように「決定のルール」の定義の範囲を広げてみる。
- ファシリテーターのいる合意形成のプロセスを直接体験する。
- 参加型のプロセスにおけるファシリテーターの役割を担ってみて、それが従来のワンマンなリーダーシップとどのように違うのかを理解する。
- 思いやりのある非暴力コミュニケーションの基本原則と、対立が起こった場合の対処方法について実践する。
- コミュニティの生活における計画、決定、フィードバック、反省そして評価のサイクルを有効に働かせる。

内 容

エコビレッジを含め、人が集まって生活する場所では、いつもその集団をどのように運営するかについて決める必要があります。エコビレッジでは自由な創造力や生来のリーダーシップ（「社会 3」参照）を発揮できるよう人びとに働きかけ、それによって人びとをまとめ上げる新たな方法の探求に力を入れているため、この目的に資するような運営方法は大変重要なものになります。このセクションでは、エコビレッジ内での社会的、政治的な組織づくりに的をしぼり、日常的に起こる問題への対処法も含めて、コミュニティをスムーズに運営するスキルについて考えます。まず、運営を参加型にすることによって、人々が自分の生活に影響する決定に対して声を上げることができるようになります。エコビレッジやその他のあらゆるグループにおいても、ひとりひとりがグループに貢献できるよう、効果的にコミュニケーションを取るためのスキルを学んでいきましょう。

コンセンサスによる意思決定のルール

みんなで話し合った上での合意（＝コンセンサス）による意思決定は、メンバー全員が支持できる決定にたどりつくためには、多数決より有効な方法と言えます。このプロセスの根底には、ひとりひとりが真実の一部を有しているという基本的な信念があります。そのため、ひとりひとりに意見を表明する場と時間を確保しなければなりません。つまり、誰かひとりがグループを支配することは許されないのです。コンセンサスは、生態系がそうであるように、全てのメンバーが相互につながった網の目の中でより大きなコミュニティを秩序づけ、同時にそのコミュニティによって秩序づけられているのです。

コンセンサスは一つの意思決定のルールであり、これはグループの必要と目標に合ったものでなければなりません。コンセンサスのルールは全員一致から大多数の賛成による一致まで多様です。目標は、重要な問題を前に進めるための可能な限り最善の解決策に到達することです。

コンセンサスの持つ力と、魔法のようなその働きが十分に発揮されるには、次のような価値観や要素がしっかりと整っている必要があります。それは、十分な情報を与えられた上で合意プロセスに参加すること、進んで権限を分かち合う意欲、共通の目的、効果的なファシリテーション、予定表、議事の基本原則の活用といったことも含まれます。こうした仕組みや、それがどのように役立つかを探っていきましょう。また、グループには計画立案だけでなく、フィードバックや反省、評価のための場も必要です（何がうまくいったの

か？改善できる点は？その方法は？私たちは個人として、グループとしてどのように意思決定しているだろうか）。

コンセンサスの過程では、投票による採決は行われません。意見や提案はまず発表され、質疑応答と討論がなされた後、最終的に決定の段階に至ります。決定にあたって、グループの各メンバーは３つの選択肢を与えられます。

- 同意する：グループ全員（傍観を選択した人を除く）が提案に対して「賛成」の意志を表明した場合、コンセンサスが成立します。
- 傍観する：個人的に提案を支持できないけれども、グループの他のメンバーがその提案を採用することは構わない、と感じていることを意味します。
- 阻止する：決定の進行を少なくとも当分の間阻止します。阻止は重大な事柄ですから、ある提案が採用された場合にグループ全体のモラルや道徳、安全が脅かされると真剣に考えた人がいる場合にのみ実行されます。

全員一致のコンセンサス以外の方法：「コンセンサス・マイナス・ワン」や大多数の賛成による決定、4 分の 3 での多数決、そのほか状況に対して適切と感じられる手法であればなんでも採用できます。

意思決定の他の方法

近年、様々な民主的に組織されたグループにおける意思決定において上記に挙げたコンセンサスの方法を使うことに懸念が出てきています。民主的な解決と比較して、一人でも決定を阻むことができるので、グループ内における不満や対立を生み出しかねません。これは、参加者のやる気を著しく削ぐことになるか、もしくは決定をコントロールしようとしてきた個人による操作につながります。この懸念に対応するため、いくつかのグループで採用されている新しい方法を二つ紹介します。一つはホラクラシーでもう一つはソシオクラシーもしくはダイナミックガバナンスです。そこにおいて、決定は権限のある二重のサークルでなされます。これは、組織全体についての決定から、より狭い焦点の絞られたワーキンググループについての決定を切り離すためです。これらのグループは、「合意」と呼ばれるものに基づき自分たちの決定をします。このことは、グループは当面到達しうる最善の決定を進めることができることを意味します。そして、その決定はそのグループが一緒に決めたフィードバックに基づき、いつでも変更可能です。このプロセスは、決定、行動、評価の繰り返されるサイクルを創り出します。そして、これは時間の経過とともに変化するグループの必要に応じた結果を向上させ、微調整させることを可能とします。

ファシリテーション

「ファシリテートする」という言葉は、「容易にする」という意味です。ファシリテーターはグループの仕事を容易にするためにどんなことでもします。ファシリテーターは意思決定の過程において、グループをリードしていく「奉仕型リーダー」です。ファシリテーターはグループからの深い信頼に基づいて行動します。力を行使するのではありません。ファシリテーターの責務としては、次のようなものがあげられます。

- グループ全体のニーズや目標を認識する。
- 会議を行う場所を用意して、必要な道具（マーカーなど）を用意する。
- 信頼のおける安全な雰囲気をつくる。
- メンバーの関わり方を平等に保つ。

- 決められた行動計画が確実に実施されるようチェックする。
- グループの行動力を集中させ、仕事を続けさせる。
- 対立点を明らかにして解決方法を提案する。
- 合意事項をまとめ、コンセンサスの形成を試みる。
- 閉会を宣言する。
- 適切なフォローアップの取り組みを組織化する。

ファシリテートの技術は、誰でもトレーニングによってしっかりと身につけることができます。楽しみながらグループ内の役割を交換してみるのもいいでしょう。良いファシリテーターの資質としては、人の意見によく耳を傾ける能力、考えを分かりやすくまとめて簡潔で明瞭な言葉で表現する能力などはもちろん、忍耐強さや感情のバランスを保つ能力、身体的なスタミナも要求されます。柔軟さ、新しいことをすすんで試す意欲、問題解決や人々に対する前向きな姿勢を持っていることも望まれます。グループに貢献する能力を確実に育てていく過程においては、批判を受け入れる能力だけでなく、正直さやユーモア、人間的な温かさを養うことも大切な資質となります。

コミュニケーションスキル

ここで説明するコミュニケーションのスキルは M.ローゼンバーグが提唱した「非暴力コミュニケーション」に強く関連していますが、ティク・ナット・ハンなどの仏教指導者たちの影響も受けています。心から何かを伝えることはコミュニティをつくる上で欠くことのできない要素です。特に対立するような状況になったときに、思いやりを持って他者や自分に向き合うような能力を高めること、それがこの章の目的です。ここで強調されるのが、私たちがどのように行動し、他者に応答するのかについての私たちの個人的な責任です。相手の意見の深い部分にまで耳を傾けてみることは、他者に対する敬意や配慮、共感の心を育みます。親愛の気持ちを持って注意深く言葉を選ぶことを通じて、私たちは寛大さを学び、人びとの間に信頼を築いていくのです。相手の意見の深い部分にまで耳を傾けてみることは、他者に対する敬意や配慮、共感の心を育みます。親愛の気持ちを持って注意深く言葉を選ぶことを通じて、私たちは寛大さを学び、人びとの間に信頼を築いていくのです。

評価をせず、注意深く観察したことを表現する技術を身につけることは、さまざまな対立を解決する上でよい出発点になります。さらに、自分の感情を意識的にとらえ、欲求が満たされているかどうかの目安として読みとることを学ぶ必要があります。そうすることによって、わたしたちは相手を非難したり攻撃したりせずに感情を表現することができるはずです。そして周囲の人が防御的な反応を示すことも少なくなっていくでしょう。

自分や相手の心の奥底にある欲求を汲み取る訓練を通じて、自らが望むことを明確にはっきり言えるようになります。これは、相手に自分の要求を押し付けることなく、わかりやすく伝えることを意味します。すべての人は同じような基本的要求を持っていて、だからこそ互いにつながり、深いレベルで互いを理解できるのです。問題の原因を突き止めたり、判断を下すのではなく、観察し、感じ、求められたことを明確にすることに集中することで、私たちが本来持つ思いやりの美しさに気づくことができます。これが、私たちと他者との間で互いに心から与えあう流れをつくるカギになります。
敵意のあるメッセージや批判を個人攻撃と受け取ったり、屈伏したり、それによって自尊心を失ったりせずに受け止めることができたなら、正しい方向に進んでいるといってよいでしょう。

対立と向き合う

対立は避けられないものです。さまざまな天候の中には嵐もあるように、私たちの生活の中にも対立はつきものです。実際、本当に多様性のあるグループでは、相違点は健全さのあらわれであると同時に、創造性への導きでもあります。もっとも重要な教訓は、対立を避けようとするのではなく、関心と率直さを持って対立に向き合うように態度を改めることです。これは、勝ち負けの観点から、互いに利益のある観点「ウィン・ウィン(win-win／両者両得)」へと抜け出すことです。対立に関係するすべての関係者が発言の機会を与えられ、理解されることで、互いに満足のいく解決が可能になります。

人びとがある状況を「対立的」だと感じるときは、たいていの場合、互いにつながっている感覚や帰属感、意思の疎通の感覚が失われています。誰かの意見に賛成したり、反対したりする前に、その人が何を感じ、何を求めているかに感覚を集中してみましょう。「ノー」を言う代わりに、あなたにどのような要求があって「イエス」と言えないかを話します。もし、自分が取り乱したり怒ったりしていると感じたなら、自分や誰かの何が悪いのかを考える代わりに、自分の心の奥底にあるどんな要求が満たされていないのか、それを満たすために何ができるのかを意識するようにします。

円満なコミュニケーションを阻害するものとして、感情的な過剰反応、地位や特権、文化や社会構造に起因する敵対心、陰口、個人攻撃、皮肉などがあります。

この課の資料

Internet

Center for Nonviolent Communication - www.cnvc.org - Books, tapes, courses, etc.

Community at Work -www.communityatwork.com - Workshops on facilitation skills, organisational development, and more

Institute for Cultural Affairs - www.icaworld.org - Facilitation and group process trainings around the world

International Association of Facilitators - www.iaf-world.org - Sponsors an annual conference, group facilitation listserv, publications

International Association for Public Participation - www.iap2.org - Trainings and publications related to effective citizen involvement

International Institute for Facilitation and Consensus – www.iifac.org - Beatrice Briggs, director. Website, electronic monthly publication, courses

Process Work Institute - www.processwork.org - Trainings based on the work of Arnold Mindell

The Holocracy web site can be found at www.holocracy.org

The Sociocracy web site is www.sociocracy.net

実践を通しての学び

計画、行動、チェックのサイクルを用いることで、ファシリテーションの能力はトレーニングを通じて教えられ、手本を示されながら訓練されていきます。コース全体のファシリテーションプロセスにおいて、トレーナーが役割とすべきことを割り当て、実践すべき架空のシナリオをワーキンググループに与えるというのは良い考えです。これらの役割とすべきことは以下のような内容を含みます。検討課題の立案、ミーティング場所の準備、基本原則に沿った進行、決定のルール、ミーティングの評価、協調性に富んだ環境づくり、ファシリテーターとしての複数の役割をこなすこと、自己認識を形成するツールを使いこなすこと、「考える」環境づくり、グループ・ダイナミクス、ファシリテーション能力の確立など。どのコースにもファシリテーターがいます。参加者とともにまた、参加者の一人として、そのファシリテーターが日々行われる「チェックイン」や「シェアリング」を通じてグループの指導を助けてくれます。ある時点で、ファシリテーターは他の参加者にこの重要な役割と進行を譲り、注意深く彼らの働きを見守ります。各課を担当する講師も出席した際には毎日顔を合わせ、ファシリテーションの方法をチェックしてカリキュラムの中に採用するようにします。

社会 3：個人の主体性の確立、自立した力とリーダーシップ

目 標

- 「抑圧する力」と「創造力」の違いを知る。
- 自分、または他者の内なる力をつけるという概念を受け入れる。
- パワフルな個人の集まりが、どのように責任を分かち合い、支え合いながら組織として共同作業をすすめることができるかを学ぶ。
- 地位、権力、特権などの諸問題への認識を深め、変化させる。
- 新しいリーダーシップのスキルを習得することで、グループでリーダーシップを引き受ける力を身につける。

内 容

現状のグローバルなシステムにおける力関係の下では、地球上の大多数の人たちには、平和や正義、富はもたらされていません。人間の持つ力はこれまで、残虐行為や人々を疎外する方向に使われてきました。しかし、力そのものは良いものでも、悪いものでもありません。私たち人間は意識を持った存在であり、生まれながらに自由な意志と、選択の自由を与えられています。だからこそ、この「力」を発揮することは、私たちの責任ともいえます。ここではこの「力」を、人々やその集団、制度、そして生命を創造したり、持続したり、変化させたり、影響を与えたりする能力と定義します。私たちには、意識的に進化のプロセスに深く関わっていく能力があるのです。自己の自立に前向きなスタンスで臨めるようになるためには、力には二つあることと、その力の差異を認識する必要があります。その二つの力とは、生命を支配しようとするような「抑圧する力」と、生命エネルギーそのものに欠かすことのできない「創造力」です。

抑圧する力

抑圧する力とは、個人や社会、自然が持つ生命エネルギーを抑えつけるもので、元をたどれば恐れと疑いに基づいた世界観によるものです。「抑圧する力」を選ぶ方が賢明だとする以下のような考えは、世界中の文化に浸み込んでいます。

- 地球上にあるものは、すべての人に行き渡るほど十分ではない。
- 世界はそれぞれが切り離された、個別の存在によって形づくられている（すなわち、わたしたちは周囲にあるものから切り離された存在である）。
- ダーウィン（進化論）の生存競争では強いものだけが勝つ、だから人類はいつでも自分たちの利益のために行動するものなのだ。
- 「賢明である」ことは、自分達がしたくないことをすることを意味する。
- 弱点を見せると食い物にされてしまうような冷徹な環境で生き抜くためには、防御が必要である。

しかし、外部からの、望ましくない大規模な反応から私たち自身を守ろうとすると、肝心な情報を見落とすことになります。環境の健全な一部分となるために、私たちは心を開いていく必要があります。

創造力

「創造力」とは、「生きる」プロセスにおいてその質を向上させるような私たちひとりひとりに授けられた智恵そして美を意味します。「創造力」は、私たちの所有物ではなく、むしろわたし達が心を開いていく、そのプロセスのことなのです。「創造力」は、次に挙げるような前提の下で養われていきます。

- 私たちの地球は本来、賢く管理すればとても豊かな場所であり、必要なものは十分に得ることができる。
- 人生は、成長するために最適な機会を常に与えてくれる。
- 関わっている人すべての必要を満たし満足できるような解決方法は必ず見出すことができ、実行することもできる。
- 地球で暮らすすべての生命体の要求を尊重する解決方法を採用する必要がある。
- 世界中の人が基本的に必要とするものは同じである（食べ物、住まい、意義ある仕事、愛情、敬意）。

私たちの力を取り戻す

グローバルな社会システムによって、多くの人が希望を見失い、絶望感を抱いています。明確に捉えにくいものではありますが、多くの人が時折、自分自身や人類の行く末に「あきらめ」に似た感情を覚えています。マスメディアは、私たちに誤った情報や、安っぽく長持ちしない日用品を与え、私たちの欲望を満たし続けています。しかしそれは、実際は私たちがそうさせているのです。そういう現実に目を向ければ、私たちが目を覚まし、個人の力と希望を取り戻すために行動すべき時は十分に熟していて、今まさにその時が来たようです。

用心深く、感受性豊かに現実をとらえてみると、私たちが今何をすべきかについて、はかり知れぬ程大切な情報が見えてきます。「創造力」が呼び覚まされると、私たちは持って生まれた才能を最高の形で表現することができます。このプロセスにおいて、コミュニティは重要な役割を担います。周囲の人々からフィードバックが不可欠だからです。周囲の人々は、どういうところがわたしたちの強さ、弱さだと捉えているでしょうか。また、エコビレッジの中では、未知の分野で独創的に自己を表現する機会も十分にあります。自らの才能が形になり、認められ、そしてそれが愛する人々、みんなの幸福を生み出していると確信できたら、創造する意欲が強く湧きおこることでしょう。

草の根の力

すべての人が自分の役割として果たすべき責任を十二分に持っています。リーダーシップを引き受けるということは、本来、必要とされる多くの仕事を引き受けることを意味します。これはどんな分野でも当てはまります。グループを自分で引っ張っていく大変さを一度でも経験すれば、他者がリーダーシップを取ってくれるときに感謝の気持ちを持つことができるでしょう。これは野鳥のガンが、力強い手本を示してくれます。一羽が常に先頭を飛び、後に続く群れの風除けになり進路を示しますが、先頭の一羽が疲れるとすぐに、他のガンが先頭に立ちます。この話の教訓は「グループになることで私たちはより強くなる」ということ。コミュニティでは、すべてのメンバーが自分の得意分野でリーダーの役割につくことが求められます。

コミュニティをつくる際には、「抑圧する力」と「創造力」の境界線は紙一重です。そしてそれが争いの主たる要因になっています。リーダーシップのパターンは、メンバー間に自然に生じる影響力だけでなく、グループのニーズや状況に合わせて変化させていく必要があります。地位や特権の問題に関しては透明性を確保することが大変重要です。地位を得た人々は特に、批判を受け入れ、それに向き合って仕事をすすめる能力が必要とされます。

多くの社会において、影響力は才能や個人の智恵から自然に柔軟性を伴って育ったものではなく、言語や性別、文化的なしつけ、階層、肌の色などの要素によって決められてきたものです。私たちはこれらの要素が人間の潜在能力を存分に発揮するのを妨げるものであることを認識し、そして乗り越えなければなりません。思いやりと友情を最高の形で示すことは、「草の根の力」へと至るための真の鍵なのです。それは、抑圧に対して声を上げることです。抑圧された人々が自分で声を上げることができない時であってもそれは必要です。

創造的なリーダーシップの資質

- コミュニティの運命だけでなく、自分自身の個人的な運命のために働く。
- メンバーそれぞれの生まれ持った優れた能力や長所を、みんなで分かち合う。
- 自分たちがもっている目的が明確である。
- 見返りは期待せずに自ら進んで奉仕をする。
- 自己をよく知り、自分の弱さ・強さを隠さない。
- 他者を教師としてみる。
- より大きな視点で全体を見渡し、何が起こっているかすぐに理解できるようにする。
- 今ある枠組みの中で、すべての観点の中にある真実を示す努力をする。
- 他の人もリーダーになるように促す。
- 自然界での生命の移り変わりのように、物事は常に変わり続けていることを知る。
  状況にまかせ、「いま。ここ」を生きることに専念する。
- いのちの自然な流れから生起する出来事に従う。
- すべての状況を意識的に捉えて判断するのではなく、受け入れる。

実践を通しての学び

3 人か 4 人のメンバーに分けてグループを作り、以下の話題について議論します。議論の後、全体で分かち合いをします。個人とグループの活動の結果を確認する方法について考えてください。

1. グループで、何が起こっているかについて観察したことを共有し、分析する。
   そうすることで、グループの位置づけについての現状を確認できる。そして、以下の問いを考える。
   このグループは「社会」でどう位置付けられるか？ グループ自身は自らをどう位置付けるか？
2. リーダーシップを共有して、グループを健全な生き物のように組み立てる。そのためにだれがどのような流れでリーダーを引き受けるかについて問うてみる。そして、この方法で目の前の問題に取り組んでみる。
3. 演劇の技法を使って、参加者の基本的な特徴を演じてもらい、それを模倣する時間を取る。まず現在の原型について議論する。
4. 「力の物語」を語り合う。それは、私たちが力があると感じた時、そして何か特別なことを成し遂げた時の出来事についての物語だ。どのような力を、どのように、誰に対して、いつ使ったのか、そして私たちの役割は何だったのかを語り合う。
5. 個人的な力を表現するために芸術作品を作ってみる。そして、それがどのような感じか問うてみる。
6. グループの中でリーダーシップの役割を担ってみる。リーダーシップはどのようなものか。そして、このグループでそれは何を意味するか問うてみる。

世界観４：アート、儀式、社会変革

目 標

- 個人とグループの成長、癒しそして変化していくための素晴らしい媒体として、技術のレベルを問わず、誰でも参加できる芸術的な活動を用いる。
- 私たちに本来備わっている無限の創造力を、再認識して取りもどす。この創造力は宇宙の根源から生まれる流れのようなもので、花が咲くように自然なものでもある。
- ひらめきや直感の力を高められるような、美しくて刺激的な環境をととのえる。そこでは、いのちを讃えるような創造力が、とどまることなく溢れだすだろう。
- 集団で表現する芸術である「コミュニティの祝祭」を考案して実践する。互いの絆を感じとり、コミュニティで暮らすことが祝祭の文化を育てていくことにつながっていくという過程を、経験的に学んでいく。
- 私たちの生活を芸術作品とするために、個人とグループの創造性のもっとも良い形を用いる。

内 容

芸術は限られた芸術家だけのものではありません。わたしたちが行うすべてのことに美しさ、優雅さ、祝福の喜びを加えること、それが芸術です。芸術活動は普遍的な想像力の源、つまり命の源そのものとつながる一つの方法です。芸術表現を用いて、夢や希望やビジョンを楽しみながら表せるようになると、さまざまな喜びや感謝が常に湧き出るようになります。このように、芸術を通して命の創造力の源と、活発につながることは、人が癒され、成長し、変化していくための非常に効果的な手段になります。

コミュニティ作りにおいて、創造の場は、個人的活動のためよりも、もっと大きなビジョンと目的に集中するためにあります。そのことによって個としての制限、自己限定的な制限を乗り越えることができます。アーティストがたった独りで芸術をしていても、活動は広まっていかないでしょう。アーティストは、他の人たちが行う芸術に参加して楽しむ術を身につけなくてはなりません。そして、集合的無意識から生じるグループ全体へのメッセージ、情報、象徴といったものに敏感でなくてはなりません。

すべての人が共同して創作に貢献しようとすると、ある種の相乗効果が蓄積されていきます。それが「集合的創造力」です。「集合的創造力」という考え方は、ひとりだけの創造的才能を高める行為とは相反する位置にあります。適切な条件さえあれば、その相乗効果はコミュニティ全体に反響し、やがてほとばしる「集合的創造力」は勢いを増し、みんなの気持ちが高揚していきます。これは、ルネッサンス初期の質素な工房で、多くの「巨匠」たちが活発に意見を交換しあいながら意識を高めていった状況とよく似ています。

今日エコビレッジが持っている創造性溢れる土壌にも、こういったグループ全体を高め合う「種」を意識的に蒔くことが可能です。芸術が、空いた時間にやる趣味の域を超え、時間をフルに費やしたその人の生き方そのものになると、工芸、家内工業、組合業、工房、作業場、各種芸術表現の教室などが盛んになり、物質的な糧とともに、心の糧も与えてくれるのです。エコビレッジという場で行われる芸術は、美や調和や気品という概念を一歩先に進めようとするでしょう。その概念は、深いエコロジーの価値や精神的な価値と結びつき、ある場所における固有の祝祭、つまり文化的多様性の表現と一致しているのです。

あらゆるコミュニティにおいて、祝祭は、重要な社会的グルー＝接着剤としての役割を果たします。祝祭は、グループとしてのアイデンティティを表す営みです。わたしたちはこれを、新しく生まれはじめた世界観に沿って学びなおし、組みたてなおし、復活させていかなくてはなりません。季節や天体や地球の事象を祝ったり、節目の日を設けたり儀礼を行ったりすることは、深いエコロジーや心のあり方に意識を向けるコミュニティで暮らしていれば、自然に生まれてくる集合的な芸術表現です。生きている喜びを音楽や踊りで表現して祝うことに、特別な場所は必要ではありません。その代わり、エコビレッジには必ず歌ったり踊ったりする機会があるべきです！これまでの数年間、エコビレッジは地球全体に共通する文化ともいえる特徴を育みつづけてきています。その文化は、時代を超越した古くからの考え方が現代的な文脈にうまく融合されていて、とても豊かなものになっています。

歌、詠唱、踊り、演劇、音楽演奏、あらゆる儀式、祝祭。世界のどのエコビレッジに行ってみても、ずらりと並んだ芸術的な創造表現を目にすることでしょう。セラピーにもなりうる芸術、個人の内側の変化を表現する芸術、グループとして象徴的な意味を持つ芸術、環境における芸術、建築という芸術、実用的な道具として使える芸術、内に流れる創造的な生命力に表現を与える手段としての芸術。このように、エコビレッジでは創造力と芸術を通して、いのちを祝う文化を生み出しているのです。

そういった創造的な芸術と祝祭が持っているいろいろな側面がひとつひとつ精選されて、「エコビレッジ・デザイン・コース」に組みこまれていくことになります。芸術は、グループとしての表現ばかりでなく、個人の魅力をも引き出します。すべての人が、生まれながらにして豊かな創造力を持っていることを忘れてはなりません。ある人にとっては、色鮮やかで躍動感溢れる人生を創りあげていくことが、芸術の形となります。新しい試み、自立的な生活様式や生活方法に十分に注意を払いながら、持続可能性と創造性は手を取りあって共存するものなのです。

人生の様々なステージを讃えよう

人生は変化の連続です。循環と季節、成長の様々な段階が絶えることなく流れていきます。伝統的な文化では、誕生や死、成人といった人生の主要な節目で儀式が執り行なわれていました。この儀式を通じて人々は、ひとりひとりを力づけ、蓄えてきた自分たちの知恵を伝えていくことができました。このような人生の大切な節目を讃える文化と、平和で持続可能な文化とは、互いに密接な関係を持っているように思われます。現代社会が陥ってしまっている混乱の大きな一因は、このような儀式が失われてしまったことにあると考える人は少なくありません。周りでこういった智恵を伝えてくれる大人は少なく、お年寄りとなるとさらにその数が減っています。そうして、社会や文化の連続性が失われていきます。消費主義という名のもとに起こる無味乾燥なモノカルチャーは、永遠に続く成長を必要とし、それに投資するよう、わたしたちに求めてきます。けれどもコミュニティの中で、時代を超えた伝統を学び、そして自らの伝統をもう一度考えなおすことで、祝祭の儀式を再度つくりだし、過ぎゆく人生を悼んだり祝ったりすることができるようになるでしょう。そこでわたしたちは、それぞれの人生にかわるがわる訪れる痛みや喜びを、お互いに見つめあい支えあいながら、かつてなかったほどに、愛し与えることができるようになっている自分自身に気がついていくのです。これこそまさに「創造」といわれるにふさわしい経験でしょう。

この課の資料

Music
Taize - a booklet from Findhorn with wonderful circle songs

Videos
Sacred Dances - Findhorn Foundation

実践を通しての学び

ファシリテーターが以下の活動の一つ以上をリードするか、グループの誰かに試しにやってもらうように頼んでみましょう。これらの練習の学びと効果を確認する方法を考えましょう。

1. **ダンス：**輪になる踊り（サークルダンス）、自由形式の踊り、アフリカの踊り、その他、身体を解き放ち、からだ全体への気付きを得るような踊り。
2. **グループの祝祭を開催する：**月や太陽や場のサイクルに関わる儀式を創作する。又、その他、どんなものでも祝いあい、癒しあい、そしてグループの絆を強めるためのツールとして儀式や祝祭を考案していく過程を学ぶためのものであれば暮らしに取りいれる。
3. **歌うこと：**歌詞カードを準備して以下のような歌をアカペラもしくは楽器の伴奏で歌いましょう。テゼ、ネイティブアメリカン、アフリカンアメリカン、今歌われている歌、カノン、心の唄、環境系の歌、ニューエイジ系の歌。ハーモニー、その他グループの歌。
4. 個人的なビジョンやグループとして共有できるビジョンを見つけていくために、未来をイメージするワークショップを創造的な方法を駆使して行う。
5. 学ぶ姿勢を促したり補ったりできるような、そして全員が参加できるようなゲームや遊びを選んで行う。
6. 即興による芝居の練習や演技をリードする。
7. 絵、彫刻、自由形式のデッサンのための時間と材料を提供する。
8. ゲーム・オブ・ライフを楽しむ（ダマヌール：『The Real Dream』を参照）

社会 5：学ぶこと、つながること、そして行動に起こすこと

目 標

- 過去、現在、未来にわたる人々が暮らす場としてのコミュニティに敬意を払うことを学ぶ。
- 「我々」と「彼ら」というように分けて考えることをやめ、近隣の人々や来訪者と友好関係を築く。
- 公的空間と私的空間のバランスがとれた暮らしのデザインを考える。
- 地域の持続可能性を高める方法を明らかにする。
- 地球規模でのネットワーク・交流・教育・支援・団結を通じて、視野を広めていく。

内 容

歴史の糸は「いのちの繋がり」の中をしっかり通っています。どこでコミュニティをつくるにしても、その土地の歴史を深く探求することは、現在をより理解する手助けとなるでしょう。景観は、人間が繰り返し手を加えることで、姿を変えてきました。たとえば一本の道や屋根の形の中に、崇高な智恵や古い出来事の記憶が表されていることもあるでしょう。一見しただけでは深遠な意味を読みとることは難しいかもしれませんが、注意深く観察を重ねていくことで、奥底にある「流れ」が姿を表し始めます。耕地の形状を熱心に観察することは一冊の本を読むことにもなぞらえることができます。場所のことを知りたかったら、その「土地」で使われている言葉を学びさえすればいいのです。

ある地域に足を踏み入れるということは、そこにある文化の中に入っていくことも意味します。そこに特別な世界観や自己表現の方法があり、それは私たちがそれまでいた地域のものとはまるで違うものかもしれません。ある特定の場所で人びとが経験してきたあらゆる出来事 ― 当たり前の平和で幸福な日常から、戦争・苦難・民族離散まで ― そういった出来事のすべてが、そこに流れる現在の空気やものの見方をつくりだしています。ある場所に慣れ、そこにある文化を受け入れるには時間がかかります。その土地の暮らしの流れに目を凝らし、耳を澄ませ、自分自身をどっぷりと浸らせてみることが必要なのです。

わたしたちはまた、新自由主義的なグローバリゼーションによって豊かな多様性が失われていく時代を生きています。あらゆる文化が、退屈で個性に乏しい消費文化へと吸いこまれ、急速かつ劇的に変容しつつあります。それぞれの土地には、それぞれの特性に合うように配慮し培われてきた生活様式がありました。多くの国々で、元々あった伝統や習慣が一気に捨てさられてしまったために、今この生活様式を再発見する必要が生じています。一方で、その土地特有の文化を継承していくために、支援や協力を非常に強く求めている国々もあります。

文化が消えていくとき、その土地の生態的、地理的な要件にうまく適応できるよう積み重ねられてきた膨大な智恵や知識体系も失われてしまいます。こうした貴重な知識を取り戻して残してくために、お年寄りの話をきいたり、地域の伝説や民話を研究したりする必要があるでしょう。考古学的に関する資料を調べたり、土地固有の言語や祝祭を敬ったりことも欠かせない重要なことです。

異なる世代の人たちが暮らすコミュニティでは、年齢を重ねることの素晴らしさを生活にもたらしてくれます。お年寄りたちは若い人とともにいることで生きがいを感じ、逆もまた然りです。お年寄りの知恵や経験を再び生活の中に取り入れることは、わたしたちに大いなる恩恵をもたらしてくれるでしょう。また、子供たちが日々成長していく姿を目にすることは、コミュニティの人々が生活のためにしていることが、やがては誰のためになるのかを思い出させてくれるでしょう。わたしたちのコミュニティは、昔からいる人も、今住んでいる人も、これから来る人も喜んで受け入れる場です。―コミュニティは過去・現在・未来が連続し

た場なのです。

隣人そして他者と親密な関係を築く

「いのちの繋がり」は、時間という糸を垂直に走らせながら、今、ここに水平に広がっています。エコビレッジが、持続可能なものとなるためには、この垂直軸・水平軸という両方の次元とつながることが必要です。全ての生物の営みは透過性の細胞膜と、開放系のシステムで機能しています。すなわち、自分もその一部である、より大きなコミュニティとの間に自由な交流や交換を取り入れ、それを続けていく必要があるのです。

時にはごく身近にいる隣人より、同じ考えを持つ友人たちと世界レベルのネットワークで交流するほうが簡単に思える場合もあります。古くからコミュニティ作りに励んできた人は、変革や社会問題全般を提起する新しい規範を試そうとしてきました。こうした理想に燃えた人たちの変革への熱意の根底には、現代社会に問題を見いだし、もともとの居場所になじめなかったという部分もあります。変革を成しとげることに彼らが情熱を注ぐ一因は、そこにあるのです。この昔ながらの絵画的な情景のまわりにいつもいるのは、何世代にも渡ってその地で暮らし続けてきた人たちです。従って、その人たちは自分たちのやり方をしながらも、持続不可能な現在に暮らしているのです。未来志向で進歩的な理想主義と慣習や伝統を重んじる保守的な考え方のバランスをとるのはなかなか大変です。コミュニティを作ろうとする人たちには、前向きに変わっていくための直感的なインスピレーションがあるかもしれません。しかし、自分は何が正しいのかわかっているのだという頑なさを一度手放さないことには、コミュニティづくりのそのビジョンは達成できないでしょう。自分の意思を理解してもらい受けいれてもらうための言葉を創っていく過程は、傲慢にならず、周囲からの情報を受け取り、そして特にユーモアを持つことが大切です。そうすれば、ビジョンは具体的になり、良い結果をもたらし、支持を得るでしょう。時間がかかるかもしれませんが、このようなプロセスを経ることで、地域に希望をもたらすとともに、その地域内での自分自身の確固たる基盤を築いていくことができるのです。

もてなしの心

寛大なもてなしの心は平和を愛するあらゆる文化の中心にあります。ある特定の意思のもとにできたコミュニティが、近隣の人たちと親密な人間関係を築き、そして世の中に良い刺激を与えたいのなら、まずは自分自身を解放し、誰もが訪ねやすいコミュニティになり、他者を排除したり孤立したりする気持ちは、乗りこえていかなければなりません。とはいえ、コミュニティの生活をぜひ見てみたいと毎週のようにやってくるお客さんたちを、どのようにオープンに受け入れていけばいいのでしょう？土地のデザインや建築面での方法を工夫することが、解決策の一つになり得ます。殺到するお客さんのことを考慮に入れることと、住んでいる人たちのプライバシーや暮らしを尊重すること、この二つは設計の段階において重要な基準となります。

協同とコウ・ハウジング

ここでは、極端に偏らない穏やかな手法を紹介します。コウ・ハウジングは、住宅形態をコンパクトにし、土地利用を効率的にし、世帯の消費を減らすのに役立ちます。また、住民同士の行き来を促し、社会的に不利な条件に置かれた人にも手を差しのべやすくなります。コウ・ハウジングは独立した個々の住まいに、キッチンやダイニング、作業所やオフィス、それに子どもたちの遊び場など共有の機能と設備が併設された、新しいタイプの共同住宅です。コウ・ハウジングの住人は、意図的に作られた一つのコミュニティを構成することになります。ともに生活し、物や資源を共有することを選んだというわけです。食事も定期的に一緒にとることで、住人は豊かな社会生活を送ることができます。住人は社会的に意義のあるつながりや、強い「共同体の感覚」を切望しています。純粋にコミュニティを追求する人たちにとっては、コウ・ハウジング

は正しい方向へのはじめの一歩にしか過ぎません。しかし、多くのいわゆる「主流派」に属する人たちにとって、エコビレッジの考え方や実践を理解し受け入れやすくするための、ひとつの手段にはなり得ます。すべてが持続可能なコミュニティへと進化していく過程における、重要な位置を占めるモデルなのです。コウ・ハウジングの集落を住居地のインフラに取り入れていくことで、エコビレッジはよりエコビレッジらしくなっていくでしょう。

生命地域主義（バイオリージョナリズム）

生物圏全体の規模で解決策を手に入れようとするのは、多くの人にとって、手の届かないことのように思えるかもしれませんが、少なくとも自分が暮らしている特定の場所で何をすべきかについてなら考えることができるでしょう。まずはごく身の周りの命のつながりと、社会的にも生態学的にも矛盾しない生活を送ることを目指しましょう。人はみな、一人ひとりが、特定の「いのちの場＝バイオリージョン（生命地域）」で暮らしています。それは、地球に広がる「いのちの織物」の中で、ひとつとして欠かすことのできない大切な「場」なのです。地域での状況を良くしようとするちょっとした努力であっても全体としての大きな改善へとつながっていくでしょう。こういった努力は、生活の上ではっきりと成果をもたらすと同時に、他の社会や自然界にまでその影響が広がっていくことになります。そしてこれらはまた、包括的かつ現実的な暮らしの目標にもなり得ます。

また、自分の地域の暮らしについて、特にその社会と文化が含んでいる意味あいについての情報を得ることが大切です。以下は、わたしたちが生活する場の維持と再生のためのスタート地点をはっきりさせるためのポイントです。

- 実際に動いている活動を優先する ― 生活の場で、自然界の健康を取り戻すための動きを実践することによって学んでいく。
- 自然の景観を可能な範囲で再生して維持する ― この活動をしていく過程で、社会構造もまた健全さを増していく。
- 基本的な人間のニーズを満たすための持続可能な方法を創出する ― 必須なものとしては、食べ物・水・エネルギー・住居・原料・情報など。
- 経済や文化から政治や哲学に至るまで、生活のできるかぎり広範囲にわたって支援する ― これには、生態系の破壊や崩壊、社会の不公平に対する反対の声を上げるだけでなく、前向きな「もうひとつの道」を創出していくための先見性のある行動も含まれる。
- 地域でかつ地球規模で、地元行政や教育を巻きこみ、公共メディアを通じて、バイオリージョンに関する問題への認識を高める。

時が経つにつれ、地元住民がコミュニティに関わりはじめ、反対にコミュニティのメンバーが地域周辺に散らばって暮らすようになり、そのようにして混ざり合いが進んでいきます。エコビレッジが存在することで、革新的な教育の手法が地域の学校に導入される可能性があります。地域経済のネットワークが強まり、新たな市場が開かれていくかもしれません。生態系への意識を高めてそれを再生していくためのプログラムがつくられたりもするでしょう。持続可能なテクノロジーも広まっていくでしょう。エコビレッジが、地球規模の交流の結び目となり、世界中から人だけでなくアイデアや習慣が入ってきて、元からあった地域の文化との間に相互作用が起こるでしょう。多くのエコビレッジが、地元や国、そして国際的な報道機関から大きな注目を集めています。エコビレッジが健全に機能するようになれば、そこからもたらされる影響は、「生命地域圏」全体に響きわたっていくでしょう。地域の政治に関わることは、持続可能性の重要な要素であることを、今一度強調しておきます。

国際的なネットワーク

グローバリゼーションのプロセスには間違いなく、良い面もあります。初めて月を訪れた宇宙飛行士は、地球を外から見た劇的な体験をレポートするとき、その青くて美しい姿を、広大な宇宙空間に浮かぶ繊細な家のようだと伝えてきました。その地球で暮らす住人として、わたしたちは同じ空気を呼吸し、同じ星空を見上げ、そして人間としての必須なものを分かち合っています。問題の一部になるか、それとも解決の一部になるかを選ぶのは、すべての人、わたしたちひとりひとりです。そして質素な美しさを選び、考えを具現化していくにあたってお互いに助け合うことが出来るはずです。持続可能な未来を目指していくために、国際的に交流し協力しあうことには、大きな意義があります。グローバル・エコビレッジ・ネットワーク（GEN）のような多くのネットワーク活動を通じ、わたしたちは、心の中に地球の新しい姿を描くことができます。そこでは、光と希望が結びあって点となり、その点はゆっくりと、しかし着実に広がっていきます。そして人びとは、暮らしやすくて平和な未来へと、共に力を合わせて生きています。社会的公正と団結、そして持続可能性を求めて活動を続ける数多くのネットワークや組織による仕事とその成果が、このことをすでに示しています。そうであってもなお、私たちは地球上の全ての場所に伝わるそれぞれの地域独特の文化や伝統、行動様式や信条を敬うことを身に付けなくてはなりません。

この課の資料

Internet
www.ecovillage.org
www.gen-europe.org

実践的な学びの活動例

一つ以上の以下の活動を実施するために参加者が自ら準備できるようにする。

- 小グループで、「ローカルマーケット」をつくり、それぞれの場所の産物を売買する。実際のものではなくカードを使ってもよい。
- この課で学んだことを発表するために地元のコミュニティ、村、町の人を招いて「文化祭」を開催する。
- 地域のお年寄りにインタビューし、地元の物語を語ってもらい、その中にある教訓を学ぶ。
- 地域のエコビレッジやコウハウジング・プロジェクトその他、意識的につくられたコミュニティを訪問し、地域の人々とのつながり作りを練習する。
- 特定の分野で活躍する国際的な組織のリストを作り、新しいグローバルなネットワーク作りの第一歩とする。
- クループのメンバー間で、ペアをつくり、言語、ダンス、ジェスチャーなどを互いに教え合う体験をもつ時間をもってもらう。
- 社会的な暮らしの風景を「読む」ために、近所を観察しながら歩くイベントを企画する。
- 社会的変革を創り出す活動についての瞑想やイメージをもってみるエクササイズをガイドする。たとえば、貧困やホームレス、飢餓といった共通の社会問題に焦点をあててみる。

基礎資料

Aberley, Doug. (1993). Boundaries of Home: Mapping for Local Empowerment. Gabriola Island, BC: New Society Publishers

Anundsen, K. and Shaffer, C.R. (1993). Creating Community Anywhere. New York, NY: Putnam Pub. Group

Arguelles, Jose, and South, Stephanie (2007). Cosmic History Chronicles. Volume II:I Time and Art. Galactic Research Institute.

Auvine, Brian. (1977). A Manual for Group Facilitators. Madison, WI.: Center for Conflict Resolution.

Avery, Michel. (1981). Building United Judgment: A Handbook for Consensus Decision Making. Madison WI.: Center for Conflict Resolution.

Bang Jan Martin. (2005). Ecovillages: A Practical Guide to Sustainable Communities. Gabriola Island, BC: New Society Publishers.

Berg, Peter. (1995). Discovering your Life-Place: A First Bioregional Workbook. San Francisco, CA: Planet Drum Foundation

Bohm, David. (1996). On Dialogue. New York: Routledge.

Bond, George. (2003). Buddhism at Work: Community Development, Social Empowerment and the Sar vodaya Movement. Bloomfield, CT: Kumarian Press.

Briggs, Beatrice. Facilitation and Consensus Manual. Available from www.iifac.org

Buck, John and Villines, Sharon. (2007). We the People: Consenting to a Deeper Democracy. www.Sociocracy.info Press.

Cameron, Julia. (1992). The Artist's Way: A Spiritual Path to Higher Creativity. Los Angeles, CA: Jeremy P. Tarcher/Perigee.

Christian, Diana L. (2003). Creating a Life Together. Gabriola Island, BC: New Society Publishers

Coleman, Daniel. (1996). Emotional Intelligence. New York.: Bantam Books

Diaz, Adriana. (1992). Freeing the Creative Spirit. San Francisco, CA.:Harper San Francisco

Doyle, M. and Straus, D. (1993). How to Make Meetings Work: The New Interaction Method. New York.: Jove Publication

Duhm, Dieter. (1993). Towards a New Culture. Verlag Meiga

Durett, Charles. and McCamant, K. (1994). Cohousing: A Contemporary Approach to Housing Ourselves. Berkeley, Calif.: Ten Speed Press

Durrett, C. (2009). Senior Cohousing: A Community Approach to Independent Living. Gabriola Island, B.C.: New Society Publishers.

Eisler, Riane. (2000). Tomorrow's Children: A Blueprint for Partnership Education in the 21st Century. Boulder, Colo.: Westview Press

Elgin, Duane. (2000). Promise Ahead: A Vision of Hope and Action for Humanity's Future. New York: Quill

Elworthy, Scilla. (2002). Power and Sex. London: Vega.

Fritz, Robert. 1989. The Path of Least Resistance. New York: Ballantine

Heider, John. (1985). The Tao of Leadership. New York: Bantam Books

Helmick, Raymond G.; Petersen, Rodney Lawrence. (2001). Forgiveness and Reconciliation. Philadel

phia: Templeton Foundation Press.

Jackson, Hildur. (2000). Creating Harmony: Conflict Resolution in Community. Denmark.: Gaia Trust

Jackson, Hildur.; Svensson, Karen. (2002) Ecovillage Living: Restoring the Earth and Her People, 2002, Totnes, Devon: Green Books.

Joubert, Kosha and Alfred, Robin (Eds.). (2008). Beyond You and Me: Social Tools for building Community. The Social Key. Permanent Publications. UK.

Kaner, Sam, and Lynn, Jenny. (1996). Facilitator's Guide to Participatory Decision Making. Philadelphia, PA: New Society Publishers

Krebs, Valdis and Holley, June (2007). Building Smart Communities through Network Weaving. Retrieved July 2011 from http://www.orgnet.com/BuildingNetworks.pdf

Lane, John. (2003). Timeless Beauty: In the Arts and Everyday Life. Totnes, Devon: Green Books

Macy, Joanna. (1983). Despair and Personal Power in the Nuclear Age. Philadelphia, PA: New Society

Manitonquat (Medecine Story). (1991). Return to Creation. Spokane, Wash.: Bear Tribe Pub

Mc Laughlin, Corinne and Gordon Davidson. (1986) Builders of the Dawn: Community Lifestyle in a Changing World. Walpole, N.H.: Stillpoint Pub.

Meltzer, Graham. (2005). Sustainable Community: Learning from the Cohousing Model. Victoria, BC: Trafford

Merrifield, Jeff. (1998). Damanhur - The Real Dream: The Story of the Extraordinary Italian Artistic and Spiritual Community. Santa Cruz, CA: Hanford Mead

Metcalf, Bill. (1995). From Utopian Dreaming to Communal Reality: Co-operative Lifestyles in Australia. Sydney: UNSW Press

Mindell, Arnold. (1995). Sitting in the Fire: Large Group Transformation Using Conflict and Diversity. Portland, OR: Lao Tse Press

Mindell, Arnold. (2000). The Leader as Martial Artist. Portland, OR: Lao Tse Press

Mindell, Arnold. (2002). The Deep Democracy of Open Forums. Charlottesville, VA: Hampton Roads

Morgan, Gareth. (1986). Images of Organization. Beberky Hills: SAGE Publications

Nhat Hanh ,Thich. (2000). The Art of Mindful Living: How to Bring Love, Compassion and Inner Peace into Your Daily Life. Findaway World, and Sounds True.

Osho. (1999). Creativity: Unleashing the Forces Within. New York: St. Martin's Griffin.

Plant, C. & J., Van Andruss, and Wright, E. (1990). Home! A Bioregional Reader. Gabriola Island, BC: New Society Publishers

Perry, Danaan. (1995). Warriors of the Heart. UK: Findhorn Press

Rosenberg, Marshall. (1999). Nonviolent Communication: A Language of Compassion. Del Mar, CA: Puddle Dancer Press.

Sales, Kilpatrick (1991). Dwellers in the Land: A bioregional reader. Gabriola Island, BC: New Society Publishers.

Schmookler, Andrew B. (1984). The Parable of the Tribes: The Problem of Power in Social Evolution. Berkley: University of California Press.

Schwarz, Roger. (2001). The Skilled Facilitator: Practical Wisdom for Developing Effective Groups. San Francisco, CA: Jossey-Bass

Shields, Katrina. (1994). In the Tiger's Mouth: An Empowerment Guide for Social Action. Gabriola Island, BC: New Society Publishers

Some, Sobonfu, Welcoming Spirit Home: Ancient African Teachings to Celebrate Children and Community. 1999, New World LibrarySome,

Some, Malidoma P. (1993). Ritual: Power, Healing and Community. Portland, Or.: Swan/Raven & Co.

Starhawk. (1997). Dreaming the Dark: Magic, Sex and Politics. Boston: Beacon Press

Van der Ryn, Sym, and Calthorpe, P. (1986). Sustainable Communities: A New Design Synthesis for Cities, Suburbs and Towns. San Francisco: Sierra Club Books

Walker, Liz. (2005) Ecovillage at Ithaca: Pioneering a Sustainable Culture. Gabriola, BC: New Society Publishers

Warburton, D., ed. (2000). Communities & Sustainable Development. London: Earthscan Pub.

Wheatley, Margaret. (1999). Leadership and the New Science. Discovering Order in a Chaotic World. San Francisco: Berrett-Koehler

Wilber, Ken. (2001). Sex, Ecology and Spirituality: The Spirit of Evolution. Boston: Shambhala

経済

学びの成果

参加者は以下のことについて学びます。

- ✓ 現在の経済において何が支配的な傾向なのかを知り、それを変革するレバレッジ・ポイントをいかに働かせるか
- ✓ レジリエントな地域経済を構成する多様な要素をいかにデザインするか
- ✓ その地域の環境にふさわしい地域通貨システムをいかにデザインし実際に使えるようにするか
- ✓ 個々人の経済活動をいかにエコロジカルな価値と協調させるか
- ✓ その地域でどのような法制度と資金調達戦略が社会的に重要なのか

「我々は、どのようにしたらこの苦しみを終わらせることができるかを知っているし、そのためのリソースも持ち合わせている。我々は、そのことを重々承知している。それは、様々な学問、社会学や人類学から経済学にいたるまで、あるいは教育学やエコロジーからシステム分析に至るまでが、証立てている。私たちは、〔苦しみを終わらせるのに〕何が効くかを知っているのだ。」

フランシス・ムーア・ラペ

概 要

今日、経済学は「主要学問」として最強の力を発揮し、それに関連する他のありとあらゆるテーマや価値を支配しています。危機的なことに、環境は経済のサブシステムと見られており、その逆ではないのです。従って、「環境」は、もっぱら人類の様々な活動を行うための資源の貯蔵庫として見られます。持続可能な社会に移行していくためのわたしたちの使命はこの図式を逆向きにする、
つまり経済が生態系に従属するものだと、きちんと理解されるようにしていくことです。この新しいパラダイムによって、経済活動の規模やあり方は、地球の生態系を維持できる範囲内に収まるようになるでしょう。

この新しいパラダイムへ移行していく前に、まず、現在の社会システムがどうしてこうした大混乱に陥ったのかを、明確に理解する必要があります。そうすることで初めて、新自由主義的なグローバリゼーションに代わる社会システムは無いと強調するリーダーたちの運命論を乗り越えることや、現在の不自然で持続不可能なシステムを作ってきた、さまざまな政策上の選択をより深く理解することができるのです。そうすることによって、より公正で持続可能な社会を作っていくためには、どんなオルタナティブな方策が必要かつ可能なのかが見えてきます。

- ✓ **経済１「グローバル経済を持続可能な世界へとシフトさせる」**のは、現行のグローバル経済を形成する力関係や利害関係を探求し、経済をより持続可能なものにするためにはどんな政策が必要なのかを考えるところから始まります。それにはまずグローバル経済の分析から始めましょう。地球規模での構造変革が必要であるとともに、地域に根差し、活力のある新しい経済体系の出現が必要だということも心に留めておかなくてはなりません。それによって、たとえ古いシステムが自滅したとしても、新しい力が前進し続けることができるからです。そこでこそ、エコビレッジが、経済活動の代替案を研究し、実証し、広めていくという重要な役割を担います。

- ✓ **経済２「適正な暮らし」**は、地域の素材を使い、地域での需要に応えるような小規模なものづくりが、いかに現在の経済構造や経済的動機づけでは、採算に合わないものにさせられているかを見ていきます。しかし、地球の環境収容力の範囲内で人類が生存していくためには、こうしたものづくりの仕方こそが必要なのです。それらの経済構造や動機づけが変わり始めるまで、わたしたちの経済活動は、以下のような価値基準をめぐる問いに苛まれつづけるでしょう。
  ・どれくらいで十分か？
  ・物質的な消費量と人間としての豊かさの間の関係は何か？
  ・わたしたちの富は、他者の貧困に依存していないか？
  ・わたしたちの富は、人間界以外の世界の破壊に依存していないか？
  ・どんなときに消費を減らしたり、あるいは本当に必要な分以上にお金を使ったりするのか？
  これらの価値基準をめぐる問いが、「経済２」のテーマを構成しています。
  小規模より大規模を好む世界経済の中にあっても、エコビレッジや、その他のより持続可能な暮らしを追求しているコミュニティは、自らの経済活動を成長させるための手法を見いだしてきました。
  経済３と経済４では、地域経済の育成について学びます。

- ✓ **経済３「地域での経済活動」**は、特に、ここ数年非常に重要性を増している、地域における「社会起業家精神」を取り上げます。多くのエコビレッジで独自のさまざまな形の社会的企業が成長しています。たとえば、社会から取り残された人たちや、身体の不自由な人たちに雇用を提供したり、傷ついた生態系を回復したり、あるいは保育や高齢者介護、健康的でオーガニックな食材の提供といったコミュニティの必要に応じたりしながら、相応の利潤をあげています。この「経済３」では、この社会起業家精神の理論と実践の双方を掘り下げます。また、参加者に彼ら自身のコミュニティの中でどのようにして実践的なやり方で社会的事業を創設し、支援していくのかを分かるようにしていきます。どのような品物やサービスがエコビレッジの事業に適切か、といったことも検討します。

- ✓ **経済４「コミュニティ銀行とコミュニティ通貨」**は、地域経済を育成するためのもう一つの重要な要素である、貨幣と富【財？】の役割について学びます。コミュニティ銀行は、コミュニティで、メンバーやサポーターの預金が地域の会社・事業に還元できるような役割を果たしてきました。また、地域通貨システムは、お金を地域外の大規模な投機的経済に流出させず、地域経済内にとどめるのに役立ってきました。

- ✓ **最後の経済５「制度面と資金面の問題」**は、では、エコビレッジと社会的企業を創り出す際の法的、財政的側面について考えます。いかに豊かさを生み出す風土をつくるか、さまざまな財務手法をどう見分けるかなどが含まれています。特に、力点が置かれているのは、エコビレッジと社会的企業のために採用される所有権および法制度を、いかにそれらの事業を成長させるために用いられる財政手法と調和させるかということです。ですから参加者には、自分たちのコミュニティに戻り、その中で自らのプロジェクトを立ち上げられるよう、経済のカリキュラムの中で得たすべての技術や手法をどう使うかを思い浮かべながら学ぶことを勧めます。

経済領域の資料：『ガイア経済学』

『ガイア経済学：有限の地球の中でよく生きるには』はガイアエデュケーションの双書『地球上のどこででも使える持続可能性のための四つの鍵』の経済の鍵です。これは無料で次のサイトからダウンロードできます。www.gaiaeducation.org

経済１： グローバル経済を持続可能な世界へとシフトさせる

目 標

以下の理解を深める。

- 現在のグローバル経済の仕組み。
- グローバル経済が、人、社会、自然界に及ぼす結果。
- なぜ、グローバル経済が、このように発展したか。
- どのようにしたらグローバル経済がより公正で、レジリエントで、持続可能となりえるか。
- 持続可能な経済に向けて我々はどのような変革をできるか。

内 容

過去 250 年間において、経済活動、消費、資源の枯渇、人口増加、CO_2 排出量が前例のない水準に達しました。そしてこの 50 年間で、この流れが幾何級数的に増加しました。世界のほとんどの地域で（「北」の工業国ですら）、ほとんどの生産と消費が地域単位で行われていた状態から、世界中をますます物資が飛び、海を越えるような状態に移っていきました。驚くことに、食料品など、痛みやすくその土地に根ざした伝統的なものでさえそうなのです。多くの国が、肉や乳製品など似たような食料をほぼ同一量輸出したり輸入したりしています。

その結果、20 世紀の間に人類が地球上に残した「エコロジカル・フットプリント」は激増しました。つまり、消費が増加し製造・流通過程で資源やエネルギーを多大に使うようになるにつれ、人類の経済活動による生態系への影響は劇的に増加しました。1970 年代半ば以降、人類は、生物の種として一年間自らを再生産できる消費量以上に、地球の天然資源を使い尽くしていると考えられています。さらに言えば、もしも人類全体が典型的な北米人のようなレベルの消費生活（そうした生活が、支配的な「成長」型パラダイムの－一般的には暗黙だとしても－論理的な帰結です）を送るとすれば、地球３個以上の資源が必要になるでしょう。

「経済１」では、以下のような問いを立てます。なぜこのようなことになったのか？
どんな経済的、政治的、文化的、精神的要素が、自然の資源の浪費を引き起こしたのか？
どんな特別な決断によって、この人類の多くと環境に利にならない経済システムが作り出されたのか？
それに対して、我々にできることは何なのか？

「経済３」では主に以下のような課題が扱われます。

グローバリゼーションとは何か？

グローバリゼーションのさまざまな次元に関する議論を行う。こうした議論
は参加者に、「文化的」グローバリゼーション（このグローバリゼーションはもし地域の文化が重んじられるなら概してポジティブな新たな出来事とみなされるでしょう）と、「経済的」グローバリゼーション（こちらのグローバリゼーションは社会的にも経済的にも環境的にもより問題な結果を伴います）との区別をつけやすくします。

なぜグローバリゼーションへのシフトが起きたのか？

なぜ、そしてどのように経済のグローバリゼーションは起きたのでしょうか？
このプロセスを、ある意味で必然的だったと考えるのではなく、ある特定の（またくつがえすことのできる）政策を選択した結果として、捉えるようにしてみましょう。鍵となる主題は以下の通りです。

- 限りある地球上では成長に限界があることを受け入れること。
- これからは地球上のオイルピークを過ぎてエネルギーが下降曲線を描く時代であること。
- ニュートン的還元主義的パラダイムがどのような帰結を生み出すか。
- 製品･サービス･金融市場の規制緩和と自由化。
- 大規模な事業に提供される大きな助成金。
- 労働集約度以上に資本集約度に有利に働く税制。
- 社会的・環境的コストの外部化
- 国際的経済機構の働き：WTO、世界銀行、IMF

その結果は？

経済的グローバリゼーションの結果を探っていくときに、参加者は以下のような点への影響について（新しい発想や洞察を記録するマインドマップを使いつつ）体系的に考えるように求められています。

- 経済･政治的権力の集権化。
- グローバルな公正さと労働者の権利。
- 他の生物種にとっての生息域の健全性。
- 生物多様性。
- 経済成長（GDP）に代わる幸福の指標。
- 資源の枯渇。
- 土壌や大気の健全性。
- 廃棄物の発生と管理。
- コミュニティの結束と統合。
- QOL（生活の質）や心の健康など。

各グループがそれぞれ他のグループに対して、これらのことに関して自分たちの文化的･地理的な文脈においてどのような状況や影響があるか発言しあうことによって、更に学びが深まります。

私たちに何ができる？

より公正で、より公平で、よりリジリエントで、より持続可能なグローバル経済はどのような形か？
そうなっていくためには、どのような政策の変化が必要か？
ここ数年で提言されてきたものの中で最も興味深いものを以下にあげます。

- ホリスティックな縁起の世界観へのパラダイム・シフト
- 税制の改革：国民への課税（所得税、雇用税、収益税、付加価値税、資本税）から資源使用や汚染への課税（エネルギー使用税、水使用税、渋滞税、廃棄物税、二酸化炭素排出税へなど）への変革。
- 環境にとって有害な持続可能ではない活動に対する補助金の停止（大規模なエネルギー発電、大規模な非有機農業、化石燃料使用、大企業に利する研究開発、大企業への税制優遇など）
- 環境に良く、持続可能な活動に対する補助金の導入（小規模の有機農業、小規模のエネルギー発電、省エネルギー、低エネルギーで動く公共交通機関などへの補助金）
- 土地税の導入
- 市民の収入源の創出
- 持続可能なコミュニティのネットワーク作り
- 国家間の「不当な」債務の抹消
- フェアトレードの促進
- 鍵となる国際経済機関（世界銀行、IMF、WTO）の再構築、廃止、またはそれに代わる新機関の設置。
- 以下に対する国際税の導入（すべての国が支払うべき賃貸料として）
- 汚染を引きおこす活動
- 「グローバル・コモンズ」（空路、海路など）を使う活動
- 大洋での漁業エリア、海底での採掘
- 軍備支出、武器貿易
- 世界貿易
- 国際通貨取引

参考資料

Videos
Ancient Futures: Learning From Ladakh - International Society for Ecology and Culture
www.localfutures.org
Peak Oil: Imposed by Nature - Tropos Dokumentar, troposdoc@hotmail.com
The End of Suburbia: Oil Depletion and the End of the American Dream – The Electric Wallpaper Co., www.endofsuburbia.com
The Battle for Seattle - Independent Media, www.seattle.indymedia.org

Internet
World Development Movement - www.wdm.org.uk
Third World Network - www.twnside.org.sg
Global Ecovillage Network - www.ecovillage.org
George, Susan (2007) Of capitalism, crisis, conversion & collapse: The Keynesian alternative.
http://www.tni.org/detail_page.phtml?act_id=17306

体験的学びのいくつかの例

以下に示す学習活動の例は、グループ全体で行ってもいいし、一人一人行ってもかまいません。それぞれのエクセサイズから得た学びや気づきを比較検討する方法を皆で考えてみてください。

エコロジカル・フットプリント分析(Ecological Footprint Analysis; E FA)

屋外（芝の上など）で、世界のさまざまなところから来ているグループのメンバーに、各々の国のフットプリントの大きさを、手をつないで表現してもらいましょう。（北米がおそらく一番大きく、欧州も比較的大きく、中間的な収入の国々の円は少し小さく、最貧国のものはきわめて狭いものになるでしょう。）このエクササイズの間、ゆっくりと太鼓を鳴らすのもよいでしょう。お互いの円をよく見ることに時間を使ってください。このエクササイズの狙いは、大きな円を作った人々に、罪の意識を持ってもらうことではありません。これは、内省的な観察をするエクササイズですから、批判する気持ちを捨てて、単に内面と外面を観察してみてください。そして大きなあるいは小さなグループに戻って、何を感じたか話し合いましょう（そこからどんな解決策を導き出せるか後で議論する時間があるので、ファシリテーターは、この段階での議論や反応をなるべく感覚レベルに留めるよう努めましょう。）

このエクササイズに続いてすぐ、（グループでの議論に入る前に）あらかじめ地球をあらわす大きなサークルを描いておきます。貧しい国から来た参加者をこのサークルの中に入れ、歩き回ってもらい、そのスペースの広さを楽しんでもらいましょう。最終的には、サークルの中のスペースが狭くなるまで、他のメンバーをサークルの中に入れましょう。太鼓のリズムは途絶えることなく続けます。参加者が歩いている間、オノンダガ族の信念を伝える人であるオレン･リオンズ（Oren Lyons）の次の一節を何回か読みましょう（1993年アースデイ宣言）：

「私たちは生きていく上で、何か決断をするときにはいつも 7 世代後の子供たちのことを考えます。母なる大地の上を歩くときには、地面の下から未来の子どもたちが私たちを見上げていることを意識し、常に細心の注意を持って足を下ろします。私たちは、未来の子どもたちのことを決して忘れません。」

製品はどこから来ているのか？

ファシリテーター役の人は、わたしたちが消費している食物や物資のほとんどがどれくらい遠くから来ているか、また、ほとんどが複数の産地から来ていることを示すケーススタディ用の素材や例を示す必要があるでしょう。（新聞、雑誌、教材等に多くの例が見つけられます。）参加者は身の回りにあるものがどこからどうやってそこにたどり着いたのかということに興味を持つようになります。生産物の由来についての調査やプレゼンテーションの準備は、宿題とすることもできます。

変化を目に見える形にしてみる

小グループで自分たちでファシリテーションしながら、参加者各々が現在住んでいる家を想像してみるようにしましょう。現代の生活がいかに安く簡単に手に入る化石燃料に依存しているか、その例を色々と書き出してみてください。自分たちが（地球一個分の）エコロジカル・フットプリントに収まる暮らしをしていたとしたら、どのような違いが生まれるか想像してみましょう。そうした暮らし方をすると、食物はどうやって作られるようになるか、人びとはどこにどうやって旅をするようになるか、建物や集落はどんな感じになるか、発電はどのようにされるようになるか、娯楽がどのように提供されるようになるかなど、ブレインストーミングをしてみましょう。そして、こうした転換を実現するにはどんな変化が必要になるかについて皆で考えてみましょう。

経済２： 適正な暮らし

目 的

- 自分たちの経済や生活の選択肢と価値観とを調和させる。
- より深いところで人生の目的とつながるようになる。
- 地球全体の健康と幸福を損なうよりも、それに貢献するような生活の選択肢を広げる。

内 容

「今日の贅沢品は明日の必需品。」この古い格言が、今日ほど真実を捉えていることはないのではないでしょうか。50 年ほど前は、工業国の食物消費の世帯収入にしめる割合は 22 パーセントでした。しかし今日ではその半分です。人間の健康と環境の健康を推進するために、地域で育った品質のよい食物の方にお金をかけるという考え方は、今や多くの人びとにとって想像しにくくなってしまっています。それは、多くの人々が、休日の海外旅行、娯楽、テレビ、季節はずれの果物野菜や、ありとあらゆるモノにお金をかけないといけないと感じているからです。

しかし､物質的繁栄がある一線を越えてしまうと - 工業国ではとっくに超えてしまっているのですが - 物質的に豊かになればなるほど、人間としての幸福感は増えるどころか減りかねません。多くの研究がそれを示唆しています。しかし、わたしたちはなかなかこのことを理解しないようです。事実、西洋文明社会の消費レベルは、年々増え続けているのですから。

したがって、この「経済２」では「持続可能な豊かさ」という考えを紹介していこうと思います。事実、もともと物質的でない豊かさがたくさんあるのです。（ただしこうした豊かさは市場経済の中では軽視されがちです。）その豊かさの中にはいわゆる「社会資本」（あるコミュニティに貢献し深くつながることで形成される資本）と「自然資本」（それ自体で持続可能で健全な生態系の一部として生きることで得られる資本）が含まれるでしょう。こういった考え方は、最近出てきた幸福の「オルタナティブな」指標とも関連します。（ここでいう「オルタナティブ」とは、従来の GDP＝国内総生産という金銭だけに基づいた指標に代わるという意味です。）

価値観は､より公正で持続可能な満たされた世界へ移行するための鍵になるでしょう｡理由は次の通りです。
1）制度を改革するだけでは、有効な変革として不十分です。ひとりひとりの内的な価値観を変えていくことが常に必要です。
2）いくら技術革新を重ねても、それだけでは地球がまかなえる範囲内の持続可能な生活に戻ることはできないでしょう。先進工業国では物質を消費するという次元から離れて、生活の質とは何かを考え直す必要があるでしょう。

この「経済２」の核心では、エコビレッジという文脈において、そのような生活の質の再定義を実際の暮らしの中でうまくおこなっているコミュニティ、先進的取り組み、そして個々人に接していくことになるでしょう。

- より創造的な時間や、家族の時間を増やすために、生活の規模を縮小したり、簡素化したりすることを選択した人々
- 多くの人々には受け入れがたいほど少ない報酬で、長い時間働くコミュニティの農家
- 自分のコミュニティに尽くす純粋な喜びのために、ボランティアベースで働くヘルパーや、介護士
- 自分たち自身のためにがむしゃらに活気ある美の創造活動にいそしむコミュニティ・アーティスト
- 自分のコミュニティや、世界の反対側にあるコミュニティに社会的・環境的な利益をもたらすために、地元で生産されたものや、フェアトレードされたものにより多く支払う消費者
- スリランカのサルボダヤのような発展途上国の村のネットワーク

この章は、エコビレッジという文脈以外では伝えることが難しい体験的な要素が豊富にあります。それらは知性よりも、より心や想像力に訴えるでしょう。その目的は、幸福と物質的消費の間にある見せかけの繋がりについてじっくり考えることで、参加者の心と意識を変えてゆこうとすることにあります。

食べ物を育て料理すること、娯楽と芸術を創造すること、他の人の世話をすること、自分が他の人に提供できる、持って生まれた多くの才能についてより深く理解すること、人生を充実させるための人生の目的を定義すること。参加者は、そうしたことに全身全霊を傾けるよう促されるでしょう。

さらに概念的なレベルで、参加者は、経済と社会の進歩を計るオルタナティブな指標をつくる最新の取り組みについて学んでいきます。それらの取り組みによって、既存のお金の流れや成長を測る従来の指標から、種々のサービス、生活の質、幸福、そして環境の健全性に基づくより裾野の広い指標が作られようとしています。

コミュニティの食物を育てたり、若者や高齢者の世話をしたりすることが、最も尊敬すべきことで、生命の営みに真に必要な職業なのです。しかしながら、資本主義経済学の歪んだ理論の中では、そうした職業は社会の隅に追いやられているのです。特に地域に根ざした小規模の農業は、コミュニティの経済活動の基礎になってきました。私たちは、CO_2 排出量が少なくなった将来において、この「適正な暮らし」が再び脚光をあびることを願っています。

「経済２」の資料

Videos
Ancient Futures: Learning From Ladakh - International Society for Ecology and Culture
www.localfutures.org

Internet
E.F. Schumacher Society - www.schumachersociety.org
International Society for Ecology and Culture - www.isec.or

実践を通しての学び

グループを小グループに分けて、以下のエクセサイズを可能な限りたくさんやってもらうようにしましょう。エクセサイズが終わったら、グループ全体にどうだったか報告しましょう。これらのエクセサイズがどんな効果をもたらしたか、それを評価するための手法を考案することも忘れないようにしましょう。

何が豊かさか？

生活の質と幸福感を最ももたらすものを 10 個挙げるリストを作ってみましょう（物質的なものと、「愛」のように無形のものも含みます）。リストを作り終えたら、そのリストを読みあってみましょう。その後グループディスカッションで、他の豊かさの形と比べてどれくらい、そしてどのような物質的なものがリストに上がっているか、話し合ってみましょう。

指標ゲーム

近年、世界中のコミュニティは GDP（国内総生産）に替わる指標を探していて、自分たち自身のコミュニティやエコシステムの豊かさを測るために、より生物中心で、遊び心のある指標を作ってきました。そこには、鮭や鷹の繁殖数や、子供の喘息の発生数、通学の際、何回自転車や歩きで通ったかなどが含まれます。自分たちのコミュニティに導入するのに良い指標について、考え、議論してみましょう。

適正な暮らしの目録

適正な暮らしの手段に転用・開発できるような技能・資源の調査を実施して目録を作ってみましょう。（個人レベル、参加者が属するコミュニティ、このエクセサイズに一緒に参加しているグループなど、最も有用と思われる単位で実施しましょう）

適正な暮らしの可視化

1. 深くリラックスして瞑想する状態を作ります。そして、たっぷりと時間をとって、以下のシナリオを思い描くようにします。
2. 心の目に、あなたが今住んでいるコミュニティ、キャンパス、家族、都市などを、詳細に描いてください。（これらの中でもっとも適切と感じるもので構いません）その風景に人々はいますか？ 彼らは幸せですか？ 彼らは何を食べていますか？ どこからその食べ物は来ているでしょう？ どんな建物が見えますか？ どんな交通手段ですか？どんな娯楽ですか？などなど
3. さてあなたは、この風景がどうあって欲しいか、今一度描いてみてください。ファシリテーターは、今検証したエリアのそれぞれに対し目を向けるよう、きっかけを与えてください。
   １）から２）のシナリオへの移行を促すためにあなたができる役割は？（それは大きなことか小さなことか？ひとつか、複数か？）

コミットメント

以上の「実践を通しての学び」をおこなったすぐ後に、各参加者は実際どんなコミットメントができるか、自分がこれから引き受けたい変化や行動を説明していきます。グループには、その証人となってもらい、サポートを頼みます。

経済３： 地域経済

目 標

- 社会的企業という概念とそこで起こっていることに関する理解を深める。
- 起業や支援に携われるような社会的企業の活動を、具体的に想い描けるようになる。
- エコビレッジとその周辺地域が持っている規模や特性に、どういったビジネスがもっともふさわしいのか考え出す。
- エコビレッジの場で成功に結びつきそうな社会的企業の活動の種類を考察する。

内 容

現在の経済活動では、大量生産と大量流通に重きが置かれています。これは、地産地消に相反する方向です。しかし、このような状況下にあってもなお、エコビレッジやその他のコミュニティは地域経済を育て発展させていくために多くの役割を果たすことができるでしょう。

コミュニティの経済が進む方向を自分たちの手に取り戻しコントロールできるようにするために、まずコミュニティがすることは、お金や資源・資産が地域経済と外部との間をどのように動いているのか調査することです。これにより、外部からもたらされている数ある製品やサービスのすべてを、明らかにすることになるでしょう（逆にいえば、その分は、お金は地域経済を離れて外に出ていくということがわかります）。
次に、そういった製品やサービスのうち、どれであれば自分たちで生みだすことができるか調査をします。『水漏れに栓』と呼ばれる調査がそれに当たります。（その詳細については、以下の「実践を通しての学び」の頁を参照）。

地域のコミュニティにとって、「社会的企業」のモデルはとても有益です。中でも、環境面や社会面なども配慮した目標を据えて、地域経済の発展を目指すコミュニティにとっては、特に意義深いものとなるでしょう。社会的企業は、「第三の経済」を発展させていく上で鍵を握る要素となります。民間部門と公共部門の中間にあり、双方の長所をいかす試みでもあります。その所有形態や活動も多岐に渡ります。つまり、社会的あるいは環境的に益することを第一の目標に置きながら、第二に収益を上げその利益を投資した人たちへ公正に分配する企業が社会的企業だといえるでしょう。

社会的企業のモデルは、昨今よく語られるようになったホリスティックな考え方、そしてエコビレッジ的な環境に大変適しています。このモデルは、以下に挙げるような、これまでは相反していた目標の達成を促します。

- 利益を上げる一方で、社会面に関わる目標（雇用の創出、子供やお年よりのケアなど）や、環境面に関わる目標（森林の再生や回復計画）に向かう。
- 地域のコミュニティと同時に投資家たち（エコビレッジという状況の下では、この二つは同じ人たちの場合が多い）にも利益をもたらす。
- 有償無償のスタッフが協働する。
- 製品やサービスを創出しながら、他の人たちにそのノウハウを伝え、従来の通貨と代替的な通貨の両方を扱う。

さらに、社会問題や環境問題に重きを置いていること、また、その多くが「共有」という所有形態を持っていることなどから、従来の民間企業には利用出来ない外部資金を利用する社会的企業もよく見られます。

社会的企業のいくつかは、エコビレッジ内部でも外部でもみられます。
デンマークでは、地元の市民団体や農家の人たちが風力発電装置を建設する資金調達に「再生可能エネルギーのための市民の集まり」が助けになりました。イタリアのダマヌールでは、30を超える地元企業が、地域通貨システムを利用して資金を調達しています。ハンガリーのガルガファームでは、有機農業や地元宿泊施設などによって、エコビレッジを発展させる資金を自分たちで支えて来ました。
日本のアズワンコミュニティでは、農業やお弁当屋などの製造販売を通して、コミュニティの経済を支えるだけではなく、地元の産業と連携しながら、地域発展にも貢献しています。

それぞれの参加者が、自分のコミュニティの中で（目的共同体かどうかは問いません）事業を始めたり、あるいは支援するために果たせそうな役割を視覚化したりするトレーニングを行います。その中で、コミュニティに豊かさをもたらす製品やサービスにどんなものがあるか、また、それらの製品やサービスが確かに供給されるよう自分はどんな貢献が出来るかをじっくり考えます。

最後に、社会的企業がその母体たるコミュニティに貢献し続けているかどうかを確認する手法として、社会評価法をみてみましょう。これは、企業の業績を「トリプル・ボトム・ライン」から分析する、すなわち従来通りに収益性で評価するだけでなく、社会的貢献度（事業が、クライアントや有償無償スタッフたち、あるいは納入業者、近隣住民たちなどからどう思われているか）、さらには環境への貢献度も分析するものです。

参考資料

Videos
Creating Prosperous Communities: Small-Scale Cooperative Enterprise in Maleny - Alister Multimedia, 2002
The Economics of Happiness - www.localfutures.org, 2011

Internet
FEASTA, Foundation for the Economics of Sustainability - www.feasta.org
International Society for Ecology and Culture - www.isec.org.uk
Relocalization: www.naturalsystems.blogspot.com/p/relocalization.html
Local First: www.livingeconomies.org/local-first
Social Enterprise Coalition. www.socialenterprise.org.uk

実践を通しての学び

グループを小グループに分けて、以下のエクセサイズを可能な限りたくさんやってもらうようにしましょう。エクセサイズが終わったら、グループ全体にどうだったか報告しましょう。これらのエクセサイズがどんな効果をもたらしたか、それを評価するための手法を考案することも忘れないようにしましょう。

「水漏れに栓」

参加者たちは「類縁グループ」に分かれます（グループ全体の構成にもよりますが、この「類縁グループ」は例えば、地方で暮らす人、郊外で暮らす人、都会で暮らす人などの３つのグループに分けることもできます）。そして、自分たちの地域経済からのお金の出入りを図にします。どういった物やサービスを外から購入していますか？ 自給自足できているものやサービスはありますか？ 自給レベルをさらに上げることができますか？ 外部に頼る代わりにコミュニティ内で自給するのに最適と考えられる物やサービスは何でしょう？

社会的企業のスライド・ショーの上映

世界中のエコビレッジやその他の地域経済の動きを見ることで、コミュニティ、企業という比較的小さな規模で可能となる商品やサービスにどういったものがあるか、そのヒントを得ることができます。
スライドショーは、ファシリテーターが準備します。

エコビレッジの起業家たちを招くパネル・ディスカッション

地域に根ざした社会的起業家たちとの間で、質疑応答の場を設けます。
パネルを行う前に、ディスカッションを促すような質問をいくつか準備するといいでしょう。

社会的企業を調査する

まず、自分たちが属するコミュニティ（目的共同体かどうかは問いません）について話しましょう。
さらに、そのコミュニティで現に備わっている、あるいはあって欲しいと願う様々な商品やサービスに思いを巡らせます。食品小売業、食品加工、子どものケア、娯楽、環境の復元等々の中で自分が特に魅力を感じるものはありますか？
はじめは一人で、次に小さなグループをつくり、地域に根ざすような仕事としてどういったものがイメージできるか、そしてそういった商品・サービスを提供する企業の創出や運営に自分がどのように関われるかについて理解を深めます。

経済４： コミュニティ銀行とコミュニティ通貨

目 的

- お金とは何か、そしてそれはどのように機能しているかの理解を深める。
- エコビレッジとその他のコミュニティ（目的共同体でも従来型共同体でもいい）による、地域経済を活性化させるための様々な取り組みに関する事例研究を行う。
- コミュニティ銀行やコミュニティ通貨をどのように始め、そして運営して
- いくか具体的なノウハウを培う。

内 容

現在の持続不可能なグローバル経済を動かす主要な原動力は、お金をつくりだし循環させるその仕組みにあります。循環するお金の大部分は、利子が付された貸付金として、銀行によってつくりだされます。すべての借り主が、元金と利子を返済するために収入を増やさなければならないので、必然的にこの仕組みにおいては、成長することが大前提として組みこまれています。利子支払いの仕組みはまた、「持たざる者（借り主）」から「持てる者（貸し主）」へ富が流れることをも意味し、結果として、収入の不平等がますます広がっていきます。

1980 年代に国際的なレベルで始まった金融市場の規制緩和により、ボタンひとつで地球上のあらゆるところに資本を動かすことが可能になりました。その結果、世界の金融システムは劇的に不安定さを増し、例えば 1998 年や 2008 年の金融危機を招いたのでした。さらに、企業が労働力がより安く得られる場所や、環境規制がより緩い場所へと急速に移動できるようになったため、地域コミュニティや微妙なバランスの上に成り立つ生態系は脅かされるようになりました。

このように様々な問題をはらんだグローバル通貨システムとは別に、もっと弾力性に富み、公正で、しかも環境に優しい通貨システムのモデルを確立しようとする動きがいくつか始まっています。これらの動きには、次のように様々な特徴があります。

- 国際的な資本の移動を管理する仕組みの再導入。
- 民間銀行の貸付政策をよりよく管理する仕組み。
- コミュニティのレベル、都市レベル、国レベル、地域レベル、地球レベルなど、異なるレベルで運用される複数の通貨の導入。
- どの国の通貨からも独立して、貿易決済ができる国際通貨の創設。

地域でまかなえる物やサービスが少なくなるとお金はさらに地域から出て行きます。そしてそのことによって、地域ビジネスから購入したり、それに投資したりするために地域で循環するお金も減って行き、地域の需要を満たすための物やサービスを生産するのがより難しくなっていくという悪循環に陥っています。

経済学者のリチャード・ダウスワイトはこう説明しています。「ある地域で暮らす人たちが、外部で発行されたお金を使わないと売買や取引を行えないとき、彼らの地域経済は常に、地域の外で起こる事象に左右されることになる。したがって、より自足的生活ができるよう目指すすべてのコミュニティにとっての第一歩は、まず自らの通貨システムを確立することである。」

地域の外へのお金の流出の問題に取りくむために、エコビレッジでは、二つの方法が考えられてきました。ひとつめは、独自の地域交換取引制度（LETS）やコミュニティ通貨システムを作り出すことです。参加者たちは、異なるそれぞれのシステムにどんな長所や短所があるか、またそれらが辿ってきた過去の経緯への理解を深めます。現在実際に機能しているコミュニティ通貨システムを見る機会を得、さらに、自分たちが暮らす場に適した通貨をつくりだすプロセスに導かれていくことでしょう。

お金の循環を地域経済の中に留めるための二つ目の方法は、コミュニティのメンバーやその友人、支援者たちが、コミュニティの企業や計画に対して投資をしやすくするためのコミュニティ銀行やその他の法人をつくりだすことです。このプログラムの参加者は、信用組合、マイクロ・クレジット、その他のコミュニティ銀行の歴史を調べ、現在実際に稼動しているコミュニティ銀行を見る機会を持ち、さらに、同様の仕組みをつくりだすプロセスを学びます。

最後に、経済３の社会的企業、そしてこの経済４で学んだ内容を結びつけるための方法として、地域に根ざした活気ある経済の実践的な成功例をみていきます。具体的な例として、スリランカのサルボダヤの活動、スペインにおけるモンドラゴン協同組合運動、オーストラリアのマレニー・コミュニティ、イタリアのダマヌール・エコビレッジなどがあります。

参考資料

Videos
Brave New Economy - New Economics Foundation, London

Internet
New Economics Foundation - www.neweconomics.org
Zero Emissions Research Institute - www.zeri.org - leaky bucket model
Community Currency Magazine www.ccmag.net
LETSystems - the Home Page - www.gmlets.u-net.com

実践を通しての学び

LETS（地域交換取引制度）ゲーム
LETS がどのような仕組みかを体験するゲーム。参加者たちは各々、自分が提供できそうな物やサービスをリストアップし、次にそれらの物やサービスを自分たちの間でお互いに交換します。このとき、お金や他のどんな形の紙幣も使わないようにします。このエクセサイズで交換される想像上の物やサービスにどんなものがあるか索引カードを作ってみましょう。

実地体験セッション
コミュニティ銀行やコミュニティ通貨システムをすでにつくりだしている人たちと一緒に、その設計、構築、そして運営の各プロセスを学びます。
このセッションを通して、独自のオルタナティブな通貨システムを新たに構築することを学びます。

経済５： 制度面と資金面の問題

目 標

- エコビレッジや社会的企業に有用な、制度面、資金面の様々な選択肢について理解を深め、個々の具体的状況にもっとも適したものを見きわめられるようになる。
- 自らエコビレッジを計画したり社会的企業をつくろうとする際に、この「経済５」や「経済１～４」で紹介されている様々な方法を使いこなせるようになる。
- 予備調査の実施やビジネスプランの立て方に慣れる。

内 容

エコビレッジや、社会的企業を立ち上げようとする際、どのような制度的仕組みを採用するか、あるいはどのような所有形態をとるか、それぞれ無数の選択肢があります。その上、その選択の幅は地球上の地域によっても異なり、ときには、同じ地域でも国によって違いが生じることさえあります。（教える立場の人は、参加者たちの出身地域や国で広く適用されている具体的な制度について、一定程度精通していなくてはなりません。）

制度と所有形態の選択に関して適切な決定をする際に、考慮に入れるべきカギとなるポイントがふたつあります。

1. それらの制度や所有形態が、グループ内の核となる、社会的・経済的価値観を反映していること。
   - 収入は、事業・エコビレッジのメンバー間に平等に分けられるべきか？
   - あるいは収入に差をつけるべきか？
   - メンバーがエコビレッジの外で働いた仕事で得た収入は、コミュニティの共同資金に充当すべきか、あるいはその収入のすべてまたは一部を個人収入にすべきか？
   - 事業は、私有にするのか、共有にするのか、株式資本の形を採るべきなのか？
   - 株式による所有形態をとる場合、投票権の重さはそれぞれの出資額に応じるべきか、それともすべての出資者が、同等な投票権を得るべきか？
   - エコビレッジの場合、土地は私有とすべきか共有とすべきか？ 地価の増額分は個人に帰すべきかあるいはコミュニティ全体に帰すべきか？ 住まいを購入したり建てたりする経済的余裕のないメンバーに、住まいを提供する特別な規定を設けるのか？ 設ける場合、どのような規定にするのか？

2. それらの制度や所有形態が予定している資金源と関連していること
   - エコビレッジや各種事業が、政府助成金や慈善寄付金、あるいは株式資本への出資などを受けるためには、ほとんどの場合、ある特定の法的制度と所有形態が必要とされる。
   - ほとんどの国で、営利か非営利か、または社会的企業なのかで、異なる法的制度が定められている。

これらの課題をすべて検討していくことで、制度面ではどういったものを採用するのか、所有形態はどうするのかに関して、適切な選択をすることができるようになります。

計画に着手し進めていく上で、短期的、長期的にどういった資金源を予定しているのか、前もって明確にしておかなければなりません。エコビレッジ、またはそこを基盤にして行われる事業にとって、利用が考えられる資金には以下のような４つの異なるタイプのものがあります。
元手資金：予備調査、プランニング、ゾーニング、その他の許認可を得るための資金。

1. 株式資本：投資の形で集められる資金。
2. 共有資本：投資家は通常、所有権や管理権、そして事業から生じるリスクも共有する。
3. 借入金・負債：これには普通、利子の支払いも含まれる。
4. 贈与・助成・寄付

次に、潜在的に資金源となりうる７種類の財源を見てみます。

1. エコビレッジや事業の構成員・雇用者。
2. 個人の協力者。地元の住民であったり、興味関心を共有する広い意味での「家族」の一員であったりする。
3. 「ビジネス・エンジェル」：ビジネス・コミュニティの中で、プロジェクトの価値観を共有できる富裕な支持者。
4. 慈善財団や基金や様々なサービスを供給する NPO
（例えば、スイスのエピドーレ（Epidaure）・エコビレッジが、恵まれない若者や亡命者たちと仕事をしたことで、スイス青年支援聖職者協会から資金を得た例がある）
5. 「フレンドリー・ベアーズ」と呼ばれる、事業の目的に共鳴する、より大規模な組織。住宅供給組合や有機食品加工組合などもここに含まれる。
6. 政府（地域・地方・国など、行政単位にこだわらない）
7. 国外の支援団体。

これらの財源のうち、どれが資金調達にもっとも適しているかを図式化し、それぞれについて、あてはまる実際の具体例を書き出します。そして、好ましいと思われる財源が決まったら、そこから資金を調達するのに最もふさわしい制度や所有形態を再び照らし合わせます。

以上の情報はすべて、「豊かさを創出する」ために与えられます。つまり参加者たちは、自分の事業にふさわしい資金をみつけ、それをうまく運用するやり方がごく限られていることを理解できるようになるでしょう。一般的に成功するかどうかは、どんなビジョンを描くかにかかっています。そして、そのビジョンにしっかりと従って事業を運営することで、その人自身の手で事業を成功へと導くのです。

次に参加者たちは、資金調達に関わるいくつかの主要な課題を学びます。例えば、リスク-リターン比率（これは、リスキーな事業に取りくむ際の資金集めの戦略となります）、担保（通常貸し方から求められ、リスクに付随します）、資金調達力比率（ギアリング：出資資本と借り入れ資本との比率）、そして適正報酬（資金の借り手に公正な利率を提示し協議します）などの課題です。

参加者たちは、地域ごとの小さなグループに戻り、各自の地元の条件や状況にとって妥当と思われる制度や資金調達の選択肢について討議をします。

さらに、参加者たちは、予備調査の実施やビジネスプランの立て方を考案するための、理論と実践も学びます。それぞれについて適切かつ具体性のあるモデルが紹介され、個人であるいはグループで、同様の文書を

作成してみます。

最後にガイデッド・メディテーション（瞑想）の時間が設けられ、参加者たちは、経済面についてのカリキュラム全般を振りかえります。これによって、今や自分たちのコミュニティの経済を考えるための道具一式ともいうべき次のような方法や手段をもう一度頭の中で結びあわせることができます。「エコロジカル・フットプリント」の考え方、「適正な暮らし」への積極的な取り組み、「水漏れに栓」の調査活動、コミュニティ銀行やコミュニティ通貨、社会的企業に着手するためのアイデア、制度面・所有形態・資金調達の選択肢に関する知識など。参加者はこうして、エコビレッジをつくるプロジェクト、社会的企業を設立するプロジェクト、または社会的企業を支援するプロジェクトに専心するよう促されるでしょう。そして、こうした方法や手段を最大限に活用して夢を実現するにはどうしたら良いか、考えるように促されます。

参加者はその後で次のどちらかの取り組みをしてもいいでしょう。

1. 地域ごとの小さなグループに戻り、ビジョンをそれぞれ説明しあい磨きをかけ、実践に向けてグループメンバーの支援を求める。
2. 少数の「未来像を持っている人」、つまり、進めていきたい具体的な計画についてはっきりとしたアイデアを持っている参加者を中心に、実働グループをつくる。

時間とそれから雰囲気が許せば、以下のようなことをして、カリキュラムを締めくくります。

- 参加者全員に向けて計画のプレゼンテーション。
- 今後の活動に向けて、各人の思いを一言ずつ。
- 簡単な評価。うまくいったこと。もっとうまくいくはずだったこと。
- 謝辞。

参考資料

Internet
A Feasibility Study for Community Supported Agriculture
Co-op movement www.cds.coop/coop_movement/new-to-co-ops
Land Trusts: www.smallisbeautiful.org/clts/related_articles.html
Roundup of Business Incubators www.entrepreneur.com/article/202260
The Coalition of Community Development Financial Institutions www.genesisfund.org/cdfi.htm

実践を通しての学び

３、４ 人の小グループに分かれて、予備調査を実施したり、ビジネスプランを立ててみる。その成果の評価方法を考案してみる。

Adams, M., Blumenfeld, W., Castaneda, C., Hackman, H.W., Peters, M.L., and Zuniga, X. (2010). Readings for Diversity and Social Justice. New York: Routledge.

Assadourian, Erik and Gardner, Gary. (2010). Rethinking the Good Life. Worldwatch Institute, State of the World 2010 Report. New York, NY: W.W. Norton.

Borzaga, Carlo and Defourny, Jacques. (2001). The Emergence of Social Enterprise. London ; New York: Routledge

Boschee, Jerr. (2001). The Social Enterprise Sourcebook. Minneapolis, Minn.: Northland Institute.

Boyle, David.(2003). The Little Money Book. UK: Fragile Earth Books.

Brown, Lester. (2008). Plan B 3.0: Mobilising to Save Civilization. London: Norton.

Christian, Diana Leafe. (2003). Building a Life Together: Growing Ecovillages and Intentional Communities. Gabriola Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Chopra, Deepak. (1995). The Seven Rules of Spiritual Success. San Rafael, Calif.: Amber-Allen Pub.: New World Library.

Daly, Herman E. (1991) Steady State Economics: 2nd Edition with New Essays. Washington, D.C.: Island Press.

Dauncey, Guy, (1996.) After the Crash. Suffolk: Green Print.

Dawson, Jonathan, Norberg-Hodge, Helena, and Jackson, Ross. (Eds.) (2010). Gaian Economics: Living Well within Planetary Limits. UK: Permanent Publications. Downloaded gratis from www.gaiaeducation.net

Dawson, Jonathan. (2010). Ecovillages and the Transformation of Values for Sustainability. Worldwatch Institute State of the World 2010 Report. New York, NY: W.W. Norton

Dees, J. Gregory, Economy, Peter, Emerson, Jed. (2001). Enterprising Nonprofits: A Toolkit for Social Entrepreneurs. New York: John Wiley & Sons.

Douthwaite, Richard. (1999). The Ecology of Money. Bristol: Green Books.

Elgin, Duane. (2000). Promise Ahead: A Vision of Hope and Action for Humanity's Future. New York: HarperCollins.

Fox, Mathew. (1994). The Reinvention of Work: A New Vision of Livelihood for Our Time. London: Harper.

Furnham, Adrian. (1998). The Psychology of Managerial Incompetence. London: Whurr Publishers.

Goodall, Chris. (2007). How to Live a Low-carbon Life: The Individual's Guide to Stopping Climate Change. London: Earthscan.

Greco, Tom and Robin, V. (2001). Money: Understanding and Creating Alternatives to Legal Tender. White River Junction VT: Chelsea Green.

Hawken, Paul, Lovins, Amory and Lovins, L. Hunter. (1999). Natural Capitalism. Memphis TN: Little Publications.

Heinberg, Richard. (2003). The Party's Over: Oil, War and the Fate of Industrial Societies. Gabriola Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Henderson, Hazel. (1999). Beyond Globalisation: Shaping a Sustainable Global Economy. Bloomfield, CT: Kumarian Press.

Hines, Colin. (2000). Localisation: A Global Manifesto. London: Earthscan.

Jackson, Ross. (2012). Occupy World Street: A Global Roadmap for Radical Economic and Political Reform. White River Junction, VT: Chelsea Green.

Kennedy, Margrit and Declan. (1995). Interest and Inflation Free Money: creating an exchange medium that works for everybody and protects the earth. Philadelphia, PA: New Society Publishers.

Kennedy, Margrit. (2007). Financial Stability: A Case For Complementary Currencies. Retreived from http://www.margritkennedy.de/pdf/pre_finstab.pdf

Kretzmann , John P. and McKnight, John L. (1993). Building Communities from the Inside Out: A Path Toward Finding and Mobilizing a Community's Assets. Evanston, Ill.: The Asset-Based Community Development Institute.

Krishnamurti, J. (1992). On Right Livelihood. New York: Harper-Collins.

Korten, David. (1999) The Post-Corporate World: Life after Capitalism. Bloomfield, CT: Kumarian.

Korten, David. (2010). Agenda for a New Economy. San Francisco: Berrett-Koelher.

Leadbeater, Charles. (1997). The Rise of the Social Entrepreneur. London: Demos.

Lietaer, Bernard. (2001). The Future of Money: Creating New Wealth, Work and a Wiser World. London: Century.

Mander, Jerry and Goldsmith, Edward. (1996). The Case Against the Global Economy. San Francisco: Sierra Club Books.

Martenson, Chris. (2011). The Crash Course: The Unsustainable Future of Our Economy, Energy and Environment. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.

McKeever, Mike. (2007). How to Write a Business Plan. Berkeley, CA: NOLO.

Merkel, Jim. (2003). Radical Simplicity. Gabriola Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Nicholls, A. (Ed.) (2006). Social entrepreneurship: new models of sustainable social change. Oxford, GBR: Oxford University Press

Norberg-Hodge, Helena, Merrifield, Todd and Gorelick, Steven. (2000). Bringing the Food Economy Home. Berkeley, Calif.: ISEC Publications

North, Peter. (2010). Local Money: How to Make it Happen in Your Community. White River Junction, VT: Chelsea Green.

Perkins, John. (2004). Confessions of an Economic Hit Man. San Francisco: Berrett-Koehler.

Robinson, Andy, and Kline, Kim. (2002). Selling Social Change Without Selling Out. San Francisco, Calif.: Jossey-Bass.

Schumacher, E.F. (1999). Small is Beautiful: Economics as if People Mattered. New York: Hartley & Marks.

Schwartz, Walter and Dorothy. (1988). Living Lightly: Travels in Post-consumer Society. Oxfordshire: Jon Carpenter.

Shuman, Michael. (2008). The Small-mart Revolution: How Local Businesses are Beating the Global Competition. San Francisco: Berrett-Koehler.

Wackernagel, Mathis, and Rees, Bill. (1996). Our Ecological Footprint. Gabriola Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Whitmeyer, C. and Callenbach, Ernest J. (1994). Mindfulness and Meaningful Work: Explorations in Right Livelihood. Berkeley, CA: Parallax Press.

Spadaccini, Michael. (2007). Business Structures: Forming a Corporation, LLC, Partnership, or Sole Proprietorship. Entrepreneur Press

環　境

学びの成果

参加者は以下のことについて学びます。

- ✓ 世界観、社会、環境、経済の統合されたシステムをデザインする。
- ✓ ローカルフード製造システム又は CSA のデザインし参加する（あるいはいずれか一つ）。
- ✓ 水、エネルギー、移動手段の統合的な仕組みをデザインする。
- ✓ 炭素中立エコロジカルフットプリントのために測定しデザインする。
- ✓ 都市部及び農村部で、自然及び環境に優しい集落を再生し回復する。

「様々なシステムの全体はギブアンドテイク、互恵的な関係の中で働いています。全体のシステムの学びは私自身の生活と組織の中におけるこの基本的な相互関係に気づくことと関連しています」

ジョアンナ・メイシー

概要

一つの家から複数の家をデザインすることに至るまで、私たちは今集落全体をデザインしており、それにはエネルギーや食品製造システム及び社会的また新しい経済構造を生み出すことまでが含まれ、生活スタイルに関する全く新しいパラダイムをデザインすることを意味します。

自然な建築

私たちは自然の家から始めます。自分の自然な家を建てることは多くの人の夢になっています。それはあなた自身の新たなパーソナリティを形作るようなものです。多くの人たちは、これを自然やその土地で取得可能な材料から作られた美しい家を建てることによって少ない出費で実現してきました。このような実例が、どのような方法がうまく行くのかを教えてくれます。自然な断熱及び冷却はエネルギーを節約するのに重要です。既存の家を改造するという手法が主なものとなるでしょう。なぜならば新しい家を建てるのには費用がかかりすぎるからです。

ローカルフードと栄養素のサイクル

農業ビジネスから新鮮で地元の食べ物の製造への移行が進んでいます。それは又現在よりもより少ないエネルギーを使った農業構造の一部となるでしょう。個人、村単位及び街へのそのようなシステムのデザインは全体的なデザインの一部となるでしょう。栄養はその一部が不足してきている為、「ゆりかごからゆりかごまで」の考え方の中で再生することが重要です。

インフラ

水が不足してきおり、生活条件としての重要性が高まっています。ここで、私たちは水が海に戻っていくまでの道のりでの全体的なサイクルと最大限の利益で考えます。道路、輸送、エネルギーと熱は CO_2 中立状態（排出量と吸収量が同量のこと）を達成するための要素として扱われるようになるでしょう。地球上のいくつかの都市は CO_2 中立達成の試みをリードしています。なぜならば政府は関連する方針に合意できていないからです。アイスランド、その後デンマークは 2050 年までに 100%再生エネルギーを使用するという目標を宣言しました。自転車は輸送の必要不可欠な手段となっています。

天災後の復興、都市の活性化

集落やトランジション運動、及びすべての都市は、地球を住める場所として保持するために CO_2 中立になる必要があります。コペンハーゲンはこのことにおいて 1 位となるために他の首都と競っています（交通手段としての自転車、再生エネルギーによる発熱及び電力、オイルと石炭の廃止、ボトルの水よりも清潔な地下水からの水）。しかし食品はまだこの競争に含まれていません。

エコロジカルデザイン/パーマカルチャーデザイン

環境に対する関心はエコビレッジ及びサステーナブルコミュニティのデザインと展開の基本です。エコロジカル及びパーマカルチャーはここでは同義語として使われます。エコロジカルビレッジは人間及びそれらを取り囲む環境両面に資するような形でその場所になじむように作られます。デザイナーは命を支える自然の働きを単に保全するだけでなく可能な限りこれが高められることが確保されるように細心の注意を払います。ここでの戦略は自然に対抗するというよりは自然と共に働くというものです。持続可能な集落デザインの完全なゴールは、自立的、自主持続的で自己再生する「生態系」を作り出すことです。そこでは生き物が、CO_2 フットプリント中立状態であると想定できます。ここでは、パーマカルチャーが単一の家（もともとはそのために開発された手法だが）だけではなく、村のゾーンとセクターの全てのエコロジカルな構成手法として適用されます。

システム全体のデザイン

私たちは、この課をこのシステム全体の学びで閉じます。ここで学ぶのはどのようにして持続可能な暮らし—地域の豊かさを活かした楽しく美しい生活であり、許容される環境負荷の範囲内です—を営むのかということです。それはすべての 4 つの課で学んだことを統合するものです。

新しいエコビレッジや持続可能なコミュニティの建設プロジェクトを、人間の生息域を特定の生態系の隙間に合致させ共生できるかどうかという斬新で創造的な挑戦と捉え、またとないチャンスなのだという視点に立つことができればエコビレッジの立案と設計は、ワクワクする刺激に満ちたものになります。そして、超えるべきハードルは高いですが、やりがいのある自然の技（アート）であり、科学的なものとなるのです。エコビレッジのデザイナーは、パーマカルチャーデザイン、エコロジカルデザイン、総合システムデザインなど、デザインの専門分野を実務的に理解していること、これが一つの前提条件になります。こうした分野の専門知識は相互補完の関係にあり、生態系の要素はもとより、社会的、経済的、精神的な要素などを包括した「エコビレッジ総合デザイン」（俯瞰的視点からのシステムデザイン）へと集約され得るからです。デザイナーにはまた、自然の摂理と作用および、それを集落のデザイン計画に適用する方法についての十分な理解も求められます。ラジェンドラ・パチャウリ氏は、IPCC の代表としてノーベル賞を受賞した際のスピーチにおいて次のように語りました。すなわち、世界が今必要としていることは「相乗効果をもたらす全ての素晴らしいアイデアの一つひとつの事例であり、そしておそらくそれはスカンジナビア諸国のうちの一つか

ら出てくるはずです」。これは、エコビレッジと全体のシステムをデザインする人たちが、すでに何年もの間世界中で地域住民と協力して達成しようとしていることです。

熟練のエコビレッジデザイナーは、いわば真の学際的マエストロ（巨匠）です。たとえば、工学技術から植物学、景観設計から風水、再生可能エネルギーから作物栽培、文化人類学、社会人類学といった多岐に渡る分野の知識を駆使し、それを説明し伝えていくことができるでしょう。確かにデザイナーには以上のような要件がありますが、人々が本当に必要としているものが何かを理解すること、効果的にコミュニケーションでき社会的生活が営めるスキルこそが、デザイナー自身が自ら高め身につけることのできる最も有意義な知識と言えるかもしれません。だから、この全体的（ホリスティック）な教育が求められているのです。
エコビレッジを建設するのはそこに定住する人たちです。計画を押しつける開発業者がいないエコビレッジは、その土地の生物の体系の一部として成長できる可能性を持っています。未来永劫途絶える事の無い持続可能なシステムのお手本は、自然の生態系システムです。周囲と調和し、地域の生態系を支える結果、それがすべてにとって有益になる。それがエコビレッジなのです。エコビレッジは、ある状況での最善の知識を使うことの相乗効果を示します。このようにして、エコビレッジは都市や町を立て直し、活性化させたいと望む人たちにとって、手本であり学びの場であるような役割を果たします。トランジションタウン運動は、その目的の一つとしてこのことを含めています。

デザイナーの役割

優秀な環境デザイナーは非常に有能な観察眼を身につけています。充分に時間をかけて特定の土地との強力で実践的な関係を築き、その場所に固有の特質や属性、循環のサイクルや動向、周期性に対する理解を徐々に深めるからです。その土地のエネルギーの流れを捉え、導き、蓄えることは、デザインの重要な側面です。
一般に従来の開発業者は、最大限の利益を上げようと脇目も振らずに急いで計画実施に着手します。
その行為が長期的にどのような結果をもたらすのかについては、ほとんど考えません。エコビレッジを建設する人々は幾世代にもわたってそこで生活する人々です。当然、長期的結果がとても入念に考慮されます。
したがって、デザイナーの役割は住民の人たちが最終決定ができるように、彼ら/彼女たちに異なる選択肢を提示することです。

以下の学びの課は、「環境分野での情報収集理解力（リテラシー）」をじっくりと学ぶためのものです。
つまり、それは使える知識の蓄えです。その蓄えは私たちの考えと批判的なデザインの判断だけに影響を与えるのではありません。これはまた、有機的で変わりゆく充足と豊かさを祝うような私たちの生き方に影響を与えます。

- ✓ **環境１：エコ建築と改修**
  最初の段階では、グリーン・ビルディング（緑の建築）と呼ばれるエコ建物の建造と改修を学びます。これは、その土地の特性と地域に根付いている様式を損なうことなく、より健康的で生態系と共生でき、かつエネルギーを節約できる環境の構築の学習です。

- ✓ **環境２：地場産の食べものと栄養素の循環**
  個人の健康の維持や向上、さらには地球環境の健全な保全のためには、地元地域で食物を育てることがいかに必要かを参加者に気づいてもらいます。

- ✓ **環境３：水、エネルギー、社会基盤（適正技術）**
  「最先端」の技術を概観し、実際の効果を評価します。

- ✓ **環境４：自然再生、都市再生、災害復興**
  地元に健全な環境を回復し、再生するというエコビレッジの機能を活用できる多様な方策を説明します。人的災害や自然災害が起こったとき、総合的なエコビレッジを構築することこそ、最も効果的な復興への近道となります。また、これは社会的なつながりを取り戻すことにも役立ちます。

- ✓ **環境５：俯瞰的視点からのシステムデザイン**
  これが、わたしたちの学習の最後の仕上げのステップです。エコビレッジデザイナーは、地域の生態系の一環となるようにエコビレッジを構築し、そうすることによって大宇宙の中にヒューマンスケールの小宇宙を、すなわち全宇宙の中に、局地化したどこを切り取っても全体を反映するホログラフィーのような存在体を創造することになります。概念の面でも実践の面から見ても、この章が EDE の集大成となるでしょう。この課のエコロジカル/パーマカルチャーの部分は特別に扱います。

「環境」の資料：環境に配慮した住居をデザインする

「環境に配慮した住居をデザインする―場の感覚を想像する―」は、ガイアエデュケーションの双書『地球上のどこででも使える持続可能性のための四つの鍵』の環境の鍵です。これは無料で次のサイトからダウンロードできます。
www.gaiaeducation.org

環境１： エコ建築（グリーン・ビルディング）と改修

目 標

- 「現代建築」の建物とその技術に特有の問題点を客観的に評価する。
- 人間への健康効果と省エネ効果を向上させ、環境に対する悪影響を減らすように設計された多様な「グリーン」な建築技術、時として「代替」技術とも呼ばれる技術についての知識を深める。
- 建設資材や建築様式を選択するにあたり、地域によって適切なものを選ぶことが必要である。このことを認識できるようにする。
- 都市および近郊の不十分／不良な設計による建築物の改修問題を取り上げる。
- 部分的、あるいは全面的に廃墟や廃村となって現存する定住地域の復興や再定住を推進し、失われた文化的アイデンティティーを再構築する。

内 容

環境１では、健康的な建築物とは何かを細かく検証し、その多様な改善策を示します。建築材をひとつひとつ吟味し、資材製造者と使用者の健康、環境への影響、コスト、使用者の快適度の観点から評価します。また、「総エネルギー使用量」の概念を掘り下げて議論します。ここでの学習の焦点は、持続可能な自分用の住居を設計、建設、修復できる能力を身につけるように参加者を指導することです。
環境１では、特に断熱と省エネルギーの重要性を、他の付加的技術に優先して教えます。設計プロセスの発端から省エネに重点を置いていれば、後になって修復するよりも長期的にみれば、ずっと効果的で安くつきます。ここではまた、地域に伝わる知識や伝統技術を活用して、その土地特有の設計や地域の生物圏を取り入れることを強く提唱します。

具体的に考慮すべき事項:

住居の立地

- 一に方角、二に方角、三に方角！（住居の向き）
- 地表に近い部分が受ける気候の影響
- 火事、洪水、災害対策設計
- 立地（位置決め）– 関連するインフラや地形を考慮する

快適性のための設計

- パッシブソーラー設計の原則（動力を使わずに太陽熱を取り込む設計を原則とする）
- パッシブおよびアクティブな断熱方法（動力や機械的な装置を使用する方法をアクティブという）
- 呼吸する壁
- クロスフローの重要性

予算に見合う（経費効率の高い）設計

- 建物の大きさは大切な要件
- 共有設備/経費の分担
- 建築材の材質等による経費への影響・打撃

建物は、あらゆる材料を使ってあらゆる形状に建築できる

- 木造軸組建築
- 煉瓦、積層煉瓦
- コンクリートブロック
- 版築／柔らかい練土を注ぐ（コンクリートの打設と同じ）
- アドービ（土レンガ）
- コブハウス（Cob house は 粘土と砂、ワラを練り、とうもろこしの穂軸で編んだ骨組みに塗り重ねたいわゆる土壁の構造）
- ドームハウス、ジオデシックドーム
- ストローベール（藁ブロック）
- Ａフレーム
- ポールハウス
- 石造
- 地下住宅—アンダーグランドハウスとアースシェルター
- 再生資材の利用

健康のための建築（基本的懸念事項を含む）

- 心配するべきか
- 危険の兆候
- アレルギー
- 細菌との戦い
- 臭いはあるか？
- 家具の異臭はあるか？
- 電磁場
- 暖房と調理
- 鉛中毒
- 化学物質過敏症
- 農薬
- 放射線

どんな対処ができるのか（汚染物質への対応）

- 暖房
- 電気
- 建築材
- 木材と木製品
- 布や繊維
- 塗料、ニス、染料
- 接着剤、除去剤
- 金属製品
- プラスチック
- 住宅の維持管理
- 農薬と殺菌剤

地球上の多くの場所では、数千年もの間、人口が集中し、集約的な農耕が行われてきました。しかし、そうした土地がこの数十年の間に、部分的あるいは全面的に見捨てられ、廃村や耕作放棄地となりました。第一の原因は、農村から都市部への人口流出です。典型的な事例は、地中海沿岸の丘陵地帯に見られますが、アフリカ、アジア、南米各地でも同様の事例があります。エコ建築とエコ修復の原則は、集落全体にも個々の建物にも等しく応用できます。廃墟と化したあるいは過疎化した集落を復興し再定住を進めることは地域の文化の回復と活性化のために、地元の法規制、習慣、経済、動植物相、歴史、伝統を注意深く考察し、地元の文化を再生・強化することに他なりません。過疎地に残ることを選択した年配者、すなわち自分たちが生活してきた地域を深く熟知している人々とのコミュニケーションは、かけがえのない情報源となります。

更に考慮すべき事項：

- 既存集落の観察：残っている建物、その基本的構造や細部を観察して、歴史、文化、地域社会の生活を読み取ること。
- 航空写真をはじめ、印刷物や文書で残っているもの、口伝えで語り継がれて来た事がらなど入手可能情報源の調査研究をおこなうこと。
- 対象地区の原図であるもとの集落平面図を見て、無秩序に混在している場所と秩序正しく配置された場所、かつての集落で公共の領域と個人の領域が重複していた場所を見極め、どのようにして最大の「接縁効果」をもたらしていたかを確認する。
- 対象地区特有のモノや目印（配色や色合い、扉や窓の様式、モチーフ、間仕切り、付属建築物）を特定し、デザインの中に有機的に取り入れること。

本書で概説してきたように、エコビレッジ設計の原則は、既存の都市（たいていはかなり機能不全に陥っているが）、および郊外における居住形態の修復のためのガイドラインや情報提供としても最適であり、このような原則は他に例をみません。「ピークオイル（原油生産量のピークがすでに到来したという説）」の影響が本格的に感じられるようになるとともに、かつての暮らしを修復することへの関心が高まると予測しています。

実践を通しての学び

実施する場所や時期によって異なりますが、参加者は 1 人であるいは小さなグループでデザインをし始めることができるでしょう。結果を測定する方法とさらに改善する方法を考えましょう。デザインする際には、以下の中から最低 2 つの点を採用しなくてはなりません。

1. 地元の材料を使い、その地域特有の様式でコテージの設計図を作る。
2. 現場にある建物のエネルギー効率を評価する。
3. コブと呼ばれる伝統的な練り土の材料を混ぜ合わせてコブミックスを作り、煉瓦やオーブンを作る。
4. フレーミング部分を含めたストローベールハウス作りに参加する。
5. リサイクル可能な資材を見つけ、利用可能な状態にし、実際に建築に利用する
6. 既存建築物の改築やリフォームに積極的に参加する。
7. 現存する公共の空間や個人用あるいは私有の空間の新しい利用方法を紙面上に設計してみる。
8. 農業インフラの復旧や修復作業に参加する。

環境２：地場産の食べものと栄養素の循環

目 標

- 地域で食物を育て、流通させ、いただくことの恩恵（「地産地消」の意義）を認識する
- 個人の健康と幸福を地球の健康と平和に関係づける
- 村や近隣地区で食物を生産する仕組みをデザインする
- 有機栽培による食料生産と保存のための様々な方法や技術を学ぶ。
- 地域農業を自ら実際に体験するための場を見つける

内 容

環境２のテーマは、広範多岐に渡る問題を含んでいます。従って、EDE の他の章同様、ここでの述べる事柄はほんの導入部です。食料の一面を見れば、非常に現実的で深刻な政治的かつマクロ経済的問題があります。例えば、国産対輸入産物、中央集権対地方分権、生産者から食卓までの総フードマイル、石油依存型で工業化した農業が環境に与える悪影響などです。石油価格の影響に、将来的な住民の再定住の動きが加わって、農業は新しい形を取ることになるのでしょうか。そのことを事前に予期することはできるでしょうか。家族経営農家や農村社会の喪失、アグリビジネス、政府補助金、多国間自由貿易ブロックなどはどうでしょう。地域の自立の問題、先祖伝来の知識や遺伝子資源の消滅、海や投棄地に行き着くゴミを無くすことなどに関しては、私たちはどのように取り組みことができるでしょうか。

同時に別の側面を見れば、生産的で活力があり、そして実に楽しい「やり方」があります。野菜や果物を家庭や地域で育てるやり方、食料の複合生産に家畜を導入するやり方、食用植物を取り込んだ景観の整備、野菜や果実などの食用植物を取り入れた造園設計、生産物に付加価値をプラスするやり方などです。自分で育てた食べ物を収穫し、貯蔵し、調理し、食べることは言うまでもありません。土壌が作られていくよう、栄養素の完全な循環を作り出していきます。このモジュールでは、この大きなテーマの中の課題について、その両方の面をバランスよく取り上げます。

食料の政治的側面とは

- 食料の真のコストとは？
- 食料が地球にかけている負担
- 食料の政治的力関係：先進国と発展途上国
- これに対して私たちは何ができるか？
- 持続可能な食生活とは？

自給自足を目指して

- 土壌学の紹介
- 土壌の有機的な改善
- NPK とは？
- 雑草防除
- 不耕起、バイオインテンシブ(多品種密植の集約農法)の菜園
- 有機栽培の家庭菜園や農地における豆科植物の役割
- 家庭菜園の要素と配置：パーマカルチャーのゾーン１と２

- 狭い場所に作る庭、コンテナガーデン、鉢やベランダで育てられる作物
- 植物学入門
- 総合的病害虫管理（IPM）
- 灌漑
- ベリー類の栽培
- 食べられる森：果物、木の実、薬草
- 果樹園の設計：造園と維持管理
- 種子の採取と保存管理
- 家畜と養殖
- 多層的総合園芸
- 地域レベルでの食料生産の仕組み。例えば、提携（CSA）、作物シェア、協同組合、ファーマーズマーケットなど
- バイオダイナミック菜園
- 輪作
- 食料採取林：果物、ナッツ類、薬草など

地元で作られる食料は、互いに支え合い成長を助け合う自立したコミュニティの大黒柱です。

このモジュールのリソース

インターネット
地元の食料ツールキット

体験学習活動

各アクティビティ終了時には、結果を測定する手段を考えましょう。

体験学習の条件が理想的な状態であれば、このコースの初期段階で、参加者に小さな野菜畑をつくる機会が与えられます。そこに苗を植え付け、終了する４週間後に収穫できれば、卒業祝いの野菜サラダの出来上がり！季節、場所、参加者の経験、使用可能な時間と予算によって異なる内容となるが、ここでは以下の活動が挙げられる。
＜追加＞

- 小規模食料生産システムの設計
- 堆肥または液肥づくり
- 収穫物を缶詰、保存、貯蔵する作業
- 豆類の種子に根粒菌を接種する
- マルチ資材を集めて利用する
- 果樹園の剪定や手入れ
- ハーブガーデンの設計と造園
- 鶏小屋又はチキン・トラクターを設計及び/又は製作
- 大型動物向けの牧草地ローテーションシステムの設計：牛、羊、馬

環境３： インフラストラクチャー、水、そしてエネルギー

目 標

- エコシステムにおける水の循環を理解する
- 集落及び各家庭におけるエネルギーの問題を検討する
- 地域の再生可能エネルギーシステムについて理解する
- 交通手段、道路、及び統合的インフラの基礎を知る
- エネルギー技術に限らずに、エコビレッジや各家庭で利用可能な低インパクト技術を幅広く比較する

内 容

環境３では、道路および交通手段のインフラ、通信、エネルギー、水、廃水処理、廃棄物リサイクルなどに応用される適正技術について学びます。

適正技術とは何か？

- 低コストで長持ちする
- 総エネルギー量が低い
- メンテナンスの必要性が小さい
- 合法
- 安全
- 地域内あるいは地元で生産
- 解決策（対策）が、必要最低限のエネルギー消費で実施できること

設計が完了したインフラには、当該の場所の「文化と気候にも適した」選択肢であることが期待されます。すなわち、その技術と解決策が「地域の状況にぴったりと」合っていて、地域住民が十分に理解して維持できることが重要です。

道路および交通のインフラ

このカリキュラムは、エコビレッジデザイナー実習生が、意思決定に積極的に参加するのに必要な情報を十分に学べるように組まれています。従って、最初に基礎的な工学技術用語を学びます。

- 設計要件（横断面／縦断面、切り盛り、「標準的な」道路の設計）
- 原材料の選択
- 視認性（visibility）
- 路肩
- メンテナンス
- 集水量の算出
- 豪雨対策設備の設計
- 橋梁とクリーク横断設備

通信

ここでは、主に技術的問題を検討します。ちなみに、EDE カリキュラムの「社会」ではトランスパーソナル、人間同士のコミュニケーションに特化して扱っています。
ここでは、通信インフラに注目して学習します。

- 通信・コミュニケーション産業の現状を把握すること
- 世界中のエコビレッジ事例から学ぶこと
- イントラネットについて
- 他の中間的技術やローテクの可能性を探る
- 設計や建設の過程におけるコミュニケーション

エネルギー

ここでは、現時点で可能な事を確認し、将来自分たちのエコビレッジの成長に応じて、そこに新しい創意工夫を取り込めるようなデザインを考察します。

- エネルギーとは？電力とは何か？
- エネルギー技術の現状は？太陽光、風力、バイオ燃料、ガス、水力発電を比較する。
- エネルギー（電力）の貯蔵は可能か？蓄電池、燃料電池、フライホイール、水、重力、スターリングモーター
- 節電と省エネをデザインする。他のエコビレッジの先例を見る。
- エネルギーと交通・運輸—多様な選択肢（訳注：自転車、燃料電池自動車など）
- 集落規模のエネルギー自給の可能性と解決策
- 「エコロジカルフットプリント」を測定し、カーボンニュートラルになるような設計をする。

水

利用可能な淡水量をめぐる議論は、今や世界規模の重大問題となっていますが、必要性と拝金主義の強欲さ、公正な利用という三本の対立軸を中心に、ますます深刻さを増す様相を呈しています。まず、飲料水と非飲料水の関係を理解する必要があります。換言すれば、１年 365 日を通じて、安全な水を安定的に集め、貯水し、分配する方法を理解しなくてはならないということです。

- 飲用水のインフラ
- 雨水の貯水システム。これには、貯水タンクの材料、タンク容量の算出、保水と貯水（給湯設備や汚水マス）に必要な道具や装置、バイパス配管が含まれる。
- 網状立体構造システム（浄水システム）
- 関連インフラ整備を含むダム建設
- 貯水池／ため池の建設
- 井戸
- 掘り抜き井戸

廃水処理

「廃水」と言うのは誤称です。廃水と呼ばれる水の実態を的確に表現するなら、富栄養化した水と呼ばなくてはならないでしょう。

家庭雑排水、下水—何が排泄物に含まれているのか

- 家庭雑排水と汚水‐糞尿の要素
- 浄化槽方式のトイレ
- くみ取り式トイレ
- バケツ設置式トイレ
- 乾式のコンポストトイレ
- 湿式のコンポストトイレ
- バクテリア（微生物）トイレ
- 固液分離式トイレ（スカンジナビア汚水リサイクル賞を受けた MatsWohlgast 教授の研究事例）
- リビングマシン式（廃水の生物処理システム）
- 廃水処理システムの比較
- 評価過程の策定

固形廃棄物／ごみ

- 課題の把握：現実を知ること
- 消費主義からの脱却：リデュース（削減）、リユース（再利用）、リサイクル）（再資源化）（3R）

この 100 年余の間「文明化」という人間のプロジェクトは、容易に採掘できる化石燃料という一度しかない大ヤマをあて、エネルギー好景気の恩恵を享受してきました。地球規模に拡大した社会経済基盤整備のすべては､未曾有の増加の一途をたどってきたこの安い化石燃料の供給に全面的に依存して建設されてきました。しかし現在、信頼できるアナリストらは、石油と天然ガスの世界的生産量がまもなく「ピーク」に達すると予測しています。今後は、需要が伸びても、供給量は減少するということにほかなりません。このことは同時に、いまだかつてない規模の再編成が起こることも示唆しています。輸送や交通網、農業、都市に密集した人口、国家間関係、グローバルな経済システムが深刻な影響を受けるでしょう。そしてこの状況が、地域社会の状況にどのような影響をもたらすのか、どのエコビレッジデザイン計画でも、これを真剣に精査しなくてはなりません。本カリキュラムで前述したように、エコビレッジデザインの原則が、世界共通の原則として認められる日はそう遠くないかもしれないからです。

参考資料

Videos

Natural Swimming Pools, Permanent Publications, UK The 4th Revolution, the Energy Revolution with Hermann Scheer and Preben Maegård.

実践を通しての学び

以下の活動を評価する測定方法を考える。それぞれの入手可能なものによって、下記の中から可能なことに取り組むことができる。

- 太陽光発電システムを評価し、実際に組み立てる。
- 屋上設置型雨水取水システムを設計し、実際に組み立てる。
- 統合的再生可能エネルギーシステムを評価する
- 雑排水処理システムを設計する。
- 人工湿地を設計する。
- 遊泳池を設計する
- それぞれの、又はエコビレッジプロジェクトのエコロジカルフットプリントを測定する。

環境４： 自然再生、都市再生と災害復興

目 標

- 生態学の基礎知識を得る。
- 自然を再生させ、地球の自然治癒プロセスを加速できる実践的な技術を習得する。
- 塩害、森林伐採、砂漠化、帯水層枯渇、地球温暖化、核のゴミを含むあらゆる種類の汚染、その他人間の行為に起因する災害の代償の大きさを理解する。
- 人的原因であれ、自然現象であれ、災害復興に活用できるエコビレッジデザインの原則を概念化する。
- 自然界と人間社会の両者のための復元・再生の媒体として、今すぐ行動し始める。
- レジリエンス設計の概念を、都市と田舎両方の持続可能なコミュニティの設計に適用する。
- 資源の希少性と代替利用に上手に対応する

内 容

自然の再生

地球は有限なシステムで、物質的には閉じた体系ですが、エネルギー的には開放しています。200 年の無謀な開発と弊害を伴う工業化を経て、今、地球の生物圏の重要な生命維持機能は大幅に低減し、悪化の一途を辿っています。地球の生態系と自然環境、経済的、社会的な観点、そして精神的な視点から見てもこの事態はかなり深刻で早急な対応を必要としています。地球を治癒すると同時に自分たちが生活する地域と自分自身をも癒すために、私たちひとりひとりができること、そのひとつは、自然の復元に向けた積極的で、実践的な第一歩を今すぐ踏み出すことです。例えば、木を植えたり、既存の果樹にマルチをほどこしたり、表土をつくったり、河川の護岸整備などで破壊された生態系の復元作業を始めることなどです。

自然再生の取組みにおけるエコビレッジの存在意義はかけがえのないものです。エコビレッジのプロジェクトは、エコロジカルデザインとパーマカルチャーデザインを熟考して作成されているので、損傷を受けた生態系の復元にも活用できます。例えば、現在では「アーバンビレッジ（都市型コミュニティ）」の概念が、工業跡地の再開発戦略として採用されています。エコビレッジでは、社会的、文化的、精神的、経済的な側面において、生活の中から自然に生まれた独自の形態があります。それらとともに共生する地域の環境の健全さと活力を維持することは、単に賢い生き方や今後長期的に生存が可能
であるというだけでなく、人間が生物圏に存在するひとつの生命として、実際に創造的な役割を果たすということです。すなわち人間が地球上の進化に必要な、自然再生を進める仲介者としての役割を意識的に引き受ける、ということです。この自然を敬い復元するという倫理的規範とその実践は、エコビレッジのライフスタイルに容易にとけ込んでいます。

いずれにせよ、自然を敬い、復元すると決意したら、時にはそれをどうするかという議論ばかりするのを止めて、ブーツと手袋をつけ、道具を持って外に出て実際に肉体労働しましょう。そうやって自然の復元作業の一助となるのです。以下に、もういつでもこのレベルで行動できるみなさんのために、必要な原則をあげておきましょう。これは、「自然が一番よく知っている」という前提に基づいた、本質的に不可欠な原則です。

- 可能なかぎりどこででも、自然を模倣すること
- 生態系が最も自然状態に近いところ、すなわち自然の力が強いエリアから作業を始めその周辺に自然の復元作業を拡大すること
- その地域の中で多くの生物が依存的な関係をもち、生態系の中で要になっている生物である「キーストーン種（根源種）」を見つけ、注目すること
- 先駆種と自然遷移を活用して、自然復元プロセスを促進すること
- 自然界で失われた生態的ニッチを再生すること
- 生態連繋を復元すること。これは、いのちの繋がりをつなぎ直す作業です
- 外来種を抑制または駆除すること
- 自然の自発的再生力を阻害する要因を縮小させる、あるいは排除すること
- できるだけ自然の再生機能に委ねること
- 自然を愛し、慈しむこと。すべての生物の生命力と精神力を高めることができる愛情は、地球を癒す上で、欠かせない重要なものです

都市の再生

自然災害後の復興

近年、これまでになく激しい自然災害が以前より頻繁に起こっているように思います。例えば、地震、津波、ハリケーン、洪水や山火事が起こり、どれもが大量破壊と計り知れない苦しみを人間社会に与えています。一方、塩害、森林破壊、砂漠化、産業による環境汚染、核関連の大災害、そしていうまでもなくこの世で最も痛ましい戦争の悲劇など、人間の行為が引き起こした災害も起こっています。自然災害と人災との相乗的被害を考慮すると、災害復興を効果的かつ効率的に進められる体系的な方策を確立しなくてはなりません。この章で概説しているエコビレッジ総合デザインの原則と実践こそ、そのためのひとつの明白な解決策です。

ひとつの事例として、インド、タミルナド州オーロヴィルで人々が取り組んだ植生再生と自然復元の努力を紹介しましょう。干上がって乾いた泥とひび割れた大地ばかりだったこの地域の景観は、この 30 年の間に生命力に溢れる森に一変し、今では人間はもちろん、多数の生物が成長できる生息地となっています。もうひとつ、スリランカの津波被害からの復興の事例をあげることができます。2004 年 12 月の大津波は、スリランカの沿岸地域の大部分を破壊しました。その直後、被災地に入ったサルボダヤという組織は、経験豊かなエコビレッジデザイナー、マックス・リンデガーと協議の上すぐに復興活動を支援し、この尽力に対してサルボダヤのヴィンヤ・アリヤトネ氏が国際的な賞を受けました。

エコビレッジ総合デザインを災害復興の方法として活用することの利点は数々あります。そのひとつは、自然のプログラムによる持続可能な開発パターンを、その基礎整備の段階にしっかりと設置できることです。するとその後の開発は、復旧の初期段階で設定したこの持続可能なパターンの上に建設していくことになります（道教の教えにも、よいスタートを切らないで、どうして満足な結果を得る事ができるか、とあります）。適切な表現ではないかもしれませんが、災害がすべてを破壊した後のさら地には以前より調和に富んだ高いレベルで再生できる可能性が満ちている、とさえ言えるかもしれません。災害後も人々は毎日を生き続けます。しかし、政府は被災者の必要に応じる能力がありません。それがこれまでの経験から学んだ現実です。被災した住民は自分たちだけが頼りです。自己や家族、住民同士のつながりなど、自分を取り巻く関係を失わず、どのような形態でも全員の絆と自主独性を維持するためには、自分たちの手で地域を再建しなくてはなりません。将来は、災害復興の再建築が始まる時に、基礎整備作業を手伝うエコビレッジデザイナーのチームを派遣したいと願っています。

参考資料

Videos
Wake Up, Freak Out - Then Get a Grip by Leo Murray: www.vimeo.com/1709110
Flow by Irena Salina: www.youtube.com/watch?v=oFAEulGGaCA
"The End of Suburbia": Oil Depletion and the Collapse of the American Dream

実践を通した学びの例

以下の回復と復元の活動の結果を評価する方法を考えてください。以下に挙げるような実際の復元作業は、体で覚える学びの体験に不可欠です。グループとしてこれらの活動を行うことは、強いコミュニティの絆を作り出します。周辺の地域のコミュニティに出かけ、地域住民から求められた仕事を成し遂げることは学びのプロセスに奉仕と善意の精神をもたらします。

あなた自身のコミュニティに変化のきっかけを作ってみてください。この活動は認定されたTTトレーナーによって進められる必要があります。

バイオリージョン又は最も近い大都市のための緊急行動計画を策定してみてください。これは価値のある理論的な練習になります。この件に関して地元の当局に対応し相談することで、担当者の信頼を得、良好な関係を築くことができるでしょう。結果を測定してください。

環境５： 俯瞰的なシステムデザイン

目 標

- 包括的な「エコビレッジ総合デザイン」を紹介する。―デザインプロセス（エコビレッジの設計過程）における精神的・社会的・経済的・環境的要素が生み出す相乗効果を示す。
- デザインチームとして活動し、将来のコミュニティの住民やエコビレッジサービスの利用者にとっての助産婦的な働きについて学ぶ。
- 集団行動を経験することにより、デザインチームの一員として作業する達成感を実感し、コミュニティの「絆」づくりを体験する。
- 真に環境に配慮したエコビレッジや住宅、その他のプロジェクトを設計（デザイン）し、実際に建設する上で考慮すべき技術的要件と生態学的原則の「基本」を理解する。
- 分かりやすく、再現可能なデザインプロセスを示す。
- コミュニケーション方法やデザイン・ツールの使い方をデザインチーム内で演習すること。

内 容

エコビレッジが「ビレッジ＝村」と呼ばれる所以は何でしょうか。これに答えるためには、地球の南北を問わず、いわゆる「伝統的な村」の歴史を復習するとともに、世界中に現存する様々な形態の「村」について調査研究しなくてはなりません（たとえば、エコビレッジ、「エコハムレット」と呼ばれる集落、スペイン語でエコビレッジという意味の「エコアルディア」、「サステナビリティ・ラーニングセンター」と呼ばれる持続可能性を学ぶ場所）。グローバル・エコビレッジ・ネットワークが過去 10 年間に達成した成果を見ると、素晴らしく驚異的な活動をしてきたことが分かります。その結果として、「主流」と呼ばれる世界の政策決定者達は、すでにエコビレッジの概念を信頼し、認めています。ますますエコビレッジの知見は町や都市をより持続可能なものにするためのプロジェクトで用いられるようになっています。私たちは、人間の住む場がどこであってもその環境負荷（「フットプリント」が許容量に収まるように働きかけていく必要があります。

パーマカルチャーデザインをあらかじめ体験しておくこと、これは、エコビレッジデザインのコースを学ぶ前提条件です。この章でも、パーマカルチャーの倫理と原則、自然界におけるパターン、自然の法則、生活態度の秩序など、パーマカルチャーの特性と、これらすべてが関連しあって形成される持続可能な人間生活のデザインと実践を概説します。デザインプロセスの手段としての「エコジカル（生態学的）・デザインの原則」については、世界中の顕著な実例を実際の映像を使って紹介します。「ホールシステムデザイン」と呼ばれる、全体を包括した総合的なデザインの様々な観点についても、その概念をどのように使うかを紹介します。

以上の概説後、エコビレッジ・デザイン・プロセスにおける生態学的特質の詳細を学びます。これは下記の項目ごとに行います。

デザインの着手と方法

ここでは、その土地その土地の生物構造と位相構造を分析して、利用可能なまたは潜在的資源、エネルギーの流れ、その放出源と吸収源などを把握します。ここでの作業は、しっかりとした構成を持つ系統的なもので、分水点やバイオリージョン（生命地域）にまで拡大した広域なものとなりますが、その成果は、実地調

査を可能な限り多く行えるかどうかにかかっています。

観察、調査研究および記録

この項目は、とかく軽視されがちな内容ですが、デザインプロセスに欠かせない段階です。この段階を季節が一巡する一年間継続し、できるだけ多くの情報（ただし、『新たな変革を可能にする新しい情報』）を収集することが理想的です。収集し、記録し、解釈したデータの量と質は、実際にどのぐらい実効力があり、実用的なデザインが出来るかどうかを直接左右します。

- オーバーレイ方式、除去法
- 基本計画（ベースプラン）の作成
- 向きとマイクロ気候（微気候）
- 水文学―水路、貯水、サージ、落差
- 土壌―耕地／非耕地、建設に適した土地
- 植物―在来種、外来種、侵入種、経済種
- 野生生物―残っている生物の確認と有用な種の調査
- 勾配―約 30cm 進むごとに約 150cm 以上傾斜する斜面は建設に適さない

総合デザインで考慮すべきこと

エコビレッジ設計のプロセスを開始する際の心構え、および決定条件とは何か。

- デザインのビジョン
- デザインの限界
- 価値観と倫理観
- 必要と欲

レイアウト（位置決め）で考慮すべき点

デザイン案を分かりやすく表現できる媒体をどのように活用できるか。

- 規模（数）
- その地域の生態系の扶養能力
- SWOT 分析（S=Strength 長所、W=Weakness 短所、O=Opportunity 機会、T=Threats 脅威）

インフラ設計の目標と意図

サイトプラン（敷地図）の工学技術的側面

- 道路や交通アクセス（橋梁、排水設備）
- コミュニケーション(新規設置の電話、または改修した電話設備、E メール設備など)
- エネルギー（輸送問題、電気、冷暖房、倫理的配慮など）
- 水利用（ダム施設、貯水槽、井戸、池）
- 廃水（水洗トイレの歴史、廃水処理の原則）
- ゴミとリサイクル
- 共同溝
- ソフト工学技術

デザインプロセスの社会的側面

- 移動や往来のためのデザイン—（自動車の他、歩行者、自転車、ローラースケート、馬が利用できる通路や道路、駐車場の整備から成る循環システム）
- 人々が自発的に、自然にコミュニティ社会のできごとに参画できるような機会の創出– 社会的つながり
- 共有施設の配置をデザインする。コミュニティセンター、保育施設、浴場やサウナの設備、来客用宿泊施設、イベントホール、カフェ、教育施設、医療／保健センター、瞑想のための神聖な場所、レクリエーション施設など
- 公共、準公共のスペースと個人的空間のバランスを保ちつつ、その境界の線引きをすること—人と付き合う際の距離感を保てるようにする
- 高齢者、移動困難者や発達障害者が参画できるコミュニティをデザインすること

デザインプロセスの経済的側面

- ビジネスセンター：事務所やオフィス、技術、通信設備
- 生産施設：家内工業、軽工業、認証を受けた調理場
- 農業インフラ：加工施設、貯蔵施設、畜舎、灌漑設備

デザインプロセスの精神的側面

- 自然の地形を利用した寺
- 風水、ワースツ（インド風水）、神聖幾何学
- 神聖なものが並ぶとされるレイラインやエネルギーの中心ポイントを、ダウジング法その他の手段で綿密に探査、探索する
- 現地の社会文化的歴史をよく理解すること。

デザインプロセスの生態学的側面

- 食料生産システムの設計：野菜、輪作、動物及びその餌のための敷地、ベリー類と果樹、ナッツ類の木
- シェルターベルト（防寒／防砂／防風のための植林）、防風林（設備）、日だまり
- 山と谷（丘陵と窪地）、生け垣
- 区域や区画の分析
- 野生のままの部分や、野生生物の回廊（通路）の設置
- 川岸地帯の生態系の増強とその保護
- 劣化した土壌の改良と草木の再生
- 森林システム、雑木林のシステム、再生可能な木材収穫
- 食用植物や果実、食べられる植生のある景観作り

プロジェクト管理

実現段階に必要な専門スキル

- システムとは何か？
- 未知の領域—理念から現実へ
- 建設段階

- 人間関係・人間社会の課題
- プロジェクトの変動要素（目標の設定変更を望むメンバーの存在など）
- プロジェクトの閉鎖／撤退

コンセプト・プラン(概念／構想計画) の準備

プロジェクトごとに異なる法的要件も含む

- チームとして結束できる拠り所／絆を築く
- 自治体の議会や役所との折衝
- プロジェクトを「売り込める」文書や資料を作成する
- 計画案のプレゼンテーション
- 環境影響評価の調査研究
- 土地区割り変更届けの提出
- 開発計画の申請

環境５には、コミュニティの建設用地の選択に関する項目もあります。これは、現場の土地評価リストで、エコビレッジのデザイナーが、鋭い批判眼を持って分析する事により、未開発地や産業跡地の長所と短所を評価するためのものです。この評価は、既存のコミュニティの弱点を特定するためにも有効活用できます。

重要な問題は、デザイナーの役割は助産婦のように居住グループが彼らのほしい決定をできるように助けてあげることである。

最後に、土地調査のチェックリストを検討します。この分析は、エコビレッジの立地場所の選定後に行いますが、環境・エコロジー的ツールであると同時に社会的・文化的なツールでもあります。

参考資料

Videos
Wake Up, Freak Out - Then Get a Grip - by Leo Murray. http://www.vimeo.com/1709110
Flow - by Irena Salina: http://www.youtube.com/watch?v=oFAEulGGaCA
The New We - European ecovillages www.newwe.info/
Crystal Waters Permaculture Village - GENOA www.ecologicalsolutions.com.au
Futures of Paradise: The European Ecovillage Experience - Light Source Films
Ecological Design: Inventing the Future - The Ecological Design Project

Internet
Ecological Solutions - consultancy and education - www.ecologicalsolutions.com.au
Village Design Institute - collecting, organising, researching, and disseminating knowledge for a sustainable, village-based future - www.villagedesign.org

体験学習活動

コースの参加者と連携して、下記のデザイン実験とプロダクトに基づいた結果を評価する測定ツールを考案してみてください。

現地（土地）分析
まず包括的な現地調査の実践を学びます。その後、デザインチームに別れて、それぞれのチームが現地分析を行います。この作業は、現場の特徴やエネルギーの流れを白地図に書き込んで行く作業でもあります。

オーバーレイ方法
イアン・マクハーグが確立したオーバーレイ方法を演習します。この方法を使用すれば、参加者は、テーマ（環境因子や特性）ごとにトレーシングペーパーに写しとって、複数のオーバーレイ（写し取ったペーパー）を作成でき、自分たちの現地分析を深く掘り下げて考察することが可能になります。

スケッチと独創的表現
サイトプラン（敷地計画）のラフスケッチ（略図）を作成します。この作業は非常に素晴らしい実習となります。参加者には、自分のデザイン構想やアイディアを、実際に眼に見える形で独創的なスケッチとして自由に表現することが求められます。この表現方法として模型作製を入れてもよいでしょう。

エコビレッジ総合デザイン
参加者は、エコビレッジデザインのコースで学んだすべての知識をフル稼働させて、完全に一体化したエコビレッジデザイン、—つまり、精神、社会、経済、生態学のそれぞれの分野の要素をひとつの体系として合体した総合デザイン—を自分なりに概念化し始めます。このレベルに達した参加者は、自分の生活の場、自分の帰りを待ち望んでいる人びとのいるコミュニティに戻り、コースで学んだ非常にホリスティックで、有機的で、ホログラフィックなプロセスをそこで再現して、新たなビレッジを創造することでしょう。

参考文献

Alexander, Christopher et al. (1977). A Pattern Language. UK: Oxford University Press.

Bates, Albert. (2010). The Biochar Solution: Carbon Farming and Climate Change.

Gabrioa Island, BC, Canada: New Society Publishers.

Benyus, Janine M.(2002) Biomimicry: Innovation Inspired by Nature. New York: Harper Perennial.

Bookchin, Murray. (1986). The Limits of the City. Montreal: Black Rose Books.

Campbell, Craig S., and Ogden, Michael. (1999). Constructed Wetlands in the Sustainable Landscape. New York: Wiley.

Charter, Steve. (2004). Eat More Raw: A Guide to Health and Sustainability. Eastbourne, UK: Gardners Books.

Borer, Pat and Harris, Cindy. (1998). The Whole House Book. Sheffield, UK: Centre for Alternative Techmology.

Broome, Jon. (2007). The Green Self-Build Book: How to Design and Build Your Own Eco-home. Totnes, UK: Green Books.

Evans, Ianto, Smith, Michael and Smiley, Linda. (2002). The Hand-sculpted House.

White River Junction, VT: Chelsea Green Publishing.

Fathy, Hassan (1973). Architecture for the Poor. Chicago: University of Chicago Press

Fukuoka, Masanobu. (1978). One-straw Revolution. Emmaus, PA: Rodale Press.

Gipe, Paul. (2009). Wind Energy Basics: A Guide to Small and Micro Wind Systems. White Water Junction, VT: Chelsea Green Publishing.

Girardet, Herbert. (2008). Cities, People, Planet: Urban Development and Climate Change. New York: John Wiley & Sons.

Gray, Nick F. (2008). Drinking Water Quality: Problems and Solutions. New York: Cambridge University Press.

Hall, Keith Dennis and Nicholls, Richard. (Eds.) (2006). Green Building Bible. New York: Green Building Press.

Hanscom, Greg. (2012). This old house: Why fixing up old homes is greener than building new ones. Retreived 1/27/2012 from
http://grist.org/cities/this-old-house-why-fixing-up-old-homes-is-greenerthan-building-new-ones/

Harland, Edward. (1999). Eco-Renovation: The Ecological Home Improvement Guide. White River Junction, VT: Chelsea Green Publishing.

Harvey, Adam, and Brown, Andy. (1993). Micro-hydro design manual - a guide to small-scale water power schemes. London: Intermediate Technology Publications.

Holmgren, David. (2002). Permaculture: Principles and Pathways beyond Sustainability. Hepburn, Victoria: Holmgren Design Services.

Hopkins, Rob. (2008). Transition Handbook: from Oil Dependency to Local Resilience. Totnes, Devon, UK: Green Books.

Harper, Peter. (1994). Natural Garden Book. London: Gaia Books.

Jackson, Hildur and Svensson, Karen. (Eds.). (2002). Ecovillage Living: Restoring the Earth and Her People. Totnes, UK: Green Books.

Kellert, Stephen R., Judith Heerwagen, and Martin Mador. (2008). Biophilic Design: The Theory, Science and Practice of Bringing Buildings to Life. Hoboken, N.J.: Wiley.

Kemp, William H. (2006). The Renewable Energy Handbook: A Guide to Rural Energy Independence, Off-grid And Sustainable Living. New York: Aztext Press.

Kinkade-Levario, Heather. (2007). Design for Water Rainwater Harvesting, Stormwater Catchment, and Alternate Water Reuse. New York: New Society.

Meadows, D. H., Randers, Jorgen and Meadows, Dennis L. (2004). The Limits to Growth. Minneapolis: Earthscan Publications Ltd.

Meadows, Donella. (2007). Thinking in Systems: A primer. White Water Junction, VT: Chelsea Green Publishing.

Maude and Clarke, Tony. (2004). Troubled Water: Saints, Sinners, Truth And Lies About The Global Water Crisis. White Water Junction, VT: Chelsea Green Publishing.

Mollison, Bill and Holmgren, David. (1978). Permaculture One, A Perennial Agricultural System for Human Settlements. Melbourne: Transworld.

Mollison, Bill. (1988). Permaculture: A Designer's Manual. Tasmania: Tagari.

Naess, Arne. (1989). Ecology, Community, and Lifestyle: An Outline of Ecosophy. New York: Cambridge

University Press.

Nabhan, Gary Paul. (2002). Coming Home to Eat: The Pleasures and Politics of Local Food. Boston: W. W. Norton & Company.

Newman, Peter and Jennings, Isabella. (2008). Cities as Sustainable Ecosystems: principles and practice. Washington, DC: Island Press.

Ochsner, Karl. (2007). Geothermal Heat Pumps: A Guide for Planning and Installing. Minneapolis: Earthscan Publications Ltd.

Odum, Howard T. (2007). Environment, Power, and Society for the 21st century: the hierarchy of energy. New York: Columbia University Press.

Orr, David. (1992). Ecological Literacy: Education and the Transition to a Postmodern World. Albany, NY: SUNY Press.

Pearson, David. (1989). Natural House Book. New York: Simon & Schuster.

Peterson, Garry. (November 9, 2009). Transition Towns and Resilience Thinking. Resilience Science.

Pilarski, Michael. (ed.). (1994). Restoration Forestry: An International Guide to Sustainable Forestry Practices. Asheville, NC: Kivaki Press.

Pocock, Bob, and Gaylard, Beth (1992). Ecological Building Factpack. Leicester: Tangent Design.

Register, Richard. (2002). Ecocities: Building cities in Balance with Nature. Berkeley, CA: Berkeley Hill Books.

Roddick, Anita, Biggs, Brooke S., Kennedy, Robert F., Shiva, Vandana, Barlow. (1999). Stolen Harvest: The Hijacking of the Global Food Supply. Cambridge, MA: South End Press.

Shiva, Vandana. (2002). Water Wars. New York: Pluto Press.

Snell, Clarke. (2005). Building Green - A Complete How-to Guide to Alternative Building Methods: Earth, Plaster, Straw Bale, Cordwood, Cob, Living Roofs. New York: Lark Books.

Steiner, Rudolf. (2005). What is Biodynamics? A Way to Heal and Revitalize the Earth. Great Barrington, MA: Steiner Books.

Walker, Brian and Salt, David. (2006). Resilience Thinking: Sustaining Ecosystems and People in a changing world. Washington, DC: Island Press.

Whitefield, Patrick. (1996). How to Make a Forest Garden. UK: Permanent Publications. Whitefield, Patrick. (2004). The Earth Care Manual: A Permaculture Handbook for Britain and Other Temperate Climates. UK: Permanent Publications.

Wolley, Tom. (2000). Green Building Handbook. London: E & FN Spon.

生きることを通して学ぶという教授法

どのように学ぶかは、何を学ぶかと等しく重要です。過程は内容と同様に重要であり、理 論は、現実に生きている人々の生活に応用できなければ無意味です。いま学びの世界 では、一つの革命が起こりつつあります。それは、解放教育法、関係学習、パートナーシップ教育、変容的学習、経験学習、行動学習、地球教育学等々、様々な新しい名 称で表現されています。そして現在、GEN（グローバル・エコビレッジ・ネットワーク）による「生活と学びの教授法」があります。これらの教育法 ― すなわち教育（指導）の原則と方法 ― に共通する重要な原動力は、教育の過程を人々の生活に直接関係させ、実際に経験している現実の問題の解決策を学ぶことに注力する、ということです。

エコビレッジでは、実際の学びの中で生活する経験ができ、このように心身を一体化する学びの機会を提供できる場はエコビレッジならではの特別なものです。私たち はこれを「生きること、学ぶことの教育」と呼んでいます。これは私たちの体全体で学ぶ方法です。生活そのものを通して学ぶのです。これはとても効果のある学びの方法です。エコビレッジ以外の都市や大学、学校において、この教授法の多くの要素が教室で取り入られています。

デンマークの Thy（チュー）で 1998 年に開催された会議には、世界中のエコビレッジから 55 人の教育者と熱心なリーダーや支援者が集まり、非常に意味深い声明書を発表しました。

> *「学習は、人々が生活する生活共同体の根源に立ち返る必要があり、もはや別に設 けられた機関や制度にあるべきではありません。そうすれば、学習の内容や方法も、自己啓発や個人の能力の発達も、すべてが年齢に関係なく同時に起こることになります。これこそ、各地域の問題と地球全体の問題をひとつにまとめる総合的な『生きていて、進化する 学習／教育システム』なのです。このシステムは、まさに次の 7 世代に向けて種子を蒔くことに他なりません。」*

GEN のパンフレットにはこう記されています。

> *「教育機能のあるエコビレッジは、変化をもたらすためのとても強力な触媒です。エコビレッジは、みんなが集まり、実体験を通して世界中で再現できる持続可能な生活を学ぶ場所です。そこは地域というひとつの地球モデルです。見て体験し、身につけて、他の人々と共有してください。そして新しい何かを創り出してください。地に足のついたプログラムに刺激を受け、トレーナーたちがトレーニング を受ける場所です。それは、世界のある場所でうまくいくことはたいてい他の場所でもうまくいくからです。それは、車輪を再発明するというような事 ではなく、共に働く新しく効果的な方法を創り出すこと場所だからです。私たちの前に立ちはだかっている挑戦を克服するためには、本当の協力と、素早い行動、深い洞察力 が何よりも必要だからです。」*

「生きることを通して学ぶという教授法」の重要な要素

1. 「生きることと学ぶこと」とは、教育の一環として実際のエコビレッジで生活することです。共同体の生活という新しい世界に自分自身を没頭させることです。それぞれのエコビレッジには、それぞれの個性があります。ですから、どのエコビレッジを選択するかによって学ぶ体験も異なるでしょう。いずれにせよ、どのエコビレッジでも、そのコミュニティを実現した先達と共に食事をし、共に祝い、そして彼ら彼女らから 学ぶという点では変わりがありません。エコビレッジの文化は新しい生き方の一つの表現として表れています。

2. この教授法の目的は、一人の人格全体を教育することです。人は、頭だけで学ぶ のではなく、身体全体とすべての感覚を総動員して学習します。これこそ、包括 的な学びにほかなりません。ハワード・ガードナーによって開発された「7 つの知能」や「多元的知能」と呼ばれる学習法は、私たちの意図を伝える手段として広く活用されています。個々の人間が異なるように、学び方にも個人差があります。 私たちは下記を活用しています。
   - 実践体験、ボディベース（肉体的体験に基づく）記憶
   - 理論、読解、議論、論理的な対話
   - ダンス、歌、創造力、演劇／寸劇、ゲーム、パフォーマンス
   - 静かな時間、内省／沈思、瞑想、自然とのつながり
   - ワークショップ、シンポジウム、セミナー
   - インタラクティブなグループプロセス、意思決定への参加
   - カフェ、バー、自由時間、お祝い

3. 生活共同体を維持するために個々が責任を持つための労働や仕事の分担は、「生きることを通して学ぶという教授法」の大切な構成要素です。
   - 菜園や庭
   - 工房
   - 台所
   - 清掃
   - 介護その他のケア

4. 学習グループ内に意図的なコミュニティを創造し、相互信頼の感性を育むことも 「生きること、学ぶことの教育法」の構成要素です。
   - アチューンメント
   - シェアリング（自分の意見・感覚の分かち合い）の時間
   - 心を開いたコミュニケーション
   - ファシリテーター（調整役）の動機に関する透明性
   - 安全で補完的安心できて、力を得られるような環境の整備

5. 私たちが創り出す学びの環境は、エコビレッジの価値観を反映しています。
   - 非階層的であること。（ヒエラルキーがないこと）
   - 責任の循環（持回り制）
   - 誰にでも役割がある。共有できることがある。
   - 一人一人がデザイナーだ。
   - 年齢、文化、能力の多様性を大切にすること。
   - 自分とは全く反対の意見を含め、異なる視点を尊重すること。
   - 全体の必要と健康を重視すること。

「エコビレッジ・デザイン・エデュケーション」での典型的な一日の時間配分として、お勧めの一例を下記に挙げます。

睡眠と休息に 8 時間、一人で、もしくはグループでの活動に 8 時間、交流に 4 時間、自由時間と食事に 4 時間

活動時間の典型的分割例

- 理論の学習に 4 時間（スライド、ビデオ、シンポジウム、ディスカッションを含む）
- 実務作業 4 時間（理論の適用、共同体のメンテナンス作業等）
- 個人の内面を整え、考えを深めるために 4 時間（瞑想、ダンス、歌、ヨガ、プライベートタイム等）
- 食事と雑談に 4 時間（朝食 1 時間、昼食 2 時間、夕食 1 時間）

エコビレッジでの EDE（教育プログラム）の毎日は、上記に述べた明確で特色のある各要素を、真にホリスティックで多元的な学習体験として一体化する毎日です。個々の学びは、様々なレベルで同時に起こり、学び手の心身全体、すなわち知性と身体、精神と感情に影響を与えます。深く入り込んだ体験としての学びは、24 時間起こり続けています。このことは、学びに深い変容をもたらす可能性を秘めているのです。心身ともに生まれ変わり、学習を終えて巣立った個人は、自分が生活 するコミュニティに帰って「生活と学びのセンター」【要確認】で生活し学んだすべてを新たに創り出すプロセスを始めることができます。このことこそ「生きることを通して学ぶという教授法」の真髄です。

教授法に関する資料と参考資料

Bowers, C. A. (1995). Educating for an Ecologically Sustainable Culture. Albany: SUNY Press.

Eisler, Riane. (2000). Tomorrow's Children: A Blueprint for Partnership Education in the 21st Century. Boulder CO: Westview Press.

Freire, Paulo. (1973). Education for Critical Consciousness. New York: Seabury Press.

Kolb, David A. (1984). Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. Upper Saddle River NJ: Prentice-Hall.

McGill, Ian and Brockbank, Anne. (2004). The Action Learning Handbook. New York: RoutledgeFalmer.

Mezirow, Jack. (1991). Transformative Dimensions of Adult Learning. San Francisco: Jossey-Bass.

Orr, David W. (2004). Earth in Mind: On Education, Environment and the Human Prospect, 2nd Edition. Washington: Island Press.

Sterling, Stephen. (2001). Sustainable Education: Re-Visioning Learning and Change. Schumacher Briefing No. 6. Totnes, UK: Green Books.

Stone, Michael and Barlow, Zenobia (Eds.). (2005). Ecological Literacy: Educating Our Children for a Sustainable World. San Francisco: Sierra Club Books.

Coming soon: The Pedagogic Key - The Fifth Key: A book on the Living and Learning Pedagogy, edited by May East and Daniel Greenberg.

地域のニーズに合わせた EDE

世界の南の国々、都市、町、大学、バーチャルな教室、学校

EDE は、以下の課題に取り組む世界中のあらゆるグループやイニシアティブが利用できるように意図されて作られています。

「南」での EDE

現在は消費者主義に漬かったライフスタイルを送る裕福な「北（先進国）」社会のエリートが、人口の大多数が貧困生活を強いられている「南」の国々を牛耳っています。「南」の貧困層の人々は、グローバルな市場勢力の支配のもとで悪化の一途をたどる環境の中で生き延びるために必死です。農山漁村の住民の多くは、先祖伝来の職業や価値観、生態系や共同体の慣習、そしてかけがえの無い多様な文化までをも放棄しようとしています。若者の多くが「北」への移住を夢見ており、地元の生活条件を 向上させようという意志はありません。故郷には望みがなく、「現代的ではない」からです。

このようなマイナスの力が高まる一方、自分たちの歴史や伝統の素晴らしさを守り続けたいという思いも高まっています。この「夢」の本質は、人間と自然の関係、環 境保護、住民の強い絆、前向きの価値観を基盤にした連帯、精神性の共有などに基づくもので、この面においてエコビレッジで生きることと非常に良く似ています。従って南の国々の多くの地域では、こうした住民の願いへの答えとしてのエコビレッジ運 動があります。確かに「南」こそ、活力に満ちた新しい形態のエコビレッジや地域ネットワークが生まれる可能性を秘めた肥沃な土壌と言えます。

こうした観点と理解に基づく提案として、南の国々を対象とした EDE のカリキュ ラムで採用すべき項目を以下に提示します。「南」の国々とは「発展途上国」、「第三世界」とも呼ばれる国々のことです。
近年の発展は、この古い北/南の二分法を打ち破りつつあります。私たちはより複雑な世界を目の当たりにしています。新しい発展の軸としての中国、インド、ブラジルそして著しい発展を遂げるアジアがその例です。

「南」におけるエコビレッジのタイプ

- 「北」のモデルに基づき「南」のエリートと協同で作り上げた選択的な現代的エコビレッジ。（例外はインドのオーロビル）
- 伝統的エコビレッジ。このタイプは、一定の近代化を選択して 導入しているものの、既存の村落はもちろん、その価値観とライフスタイルを維 持し、改良し、豊かに育てることを基本としている。
- 現代的モデルと伝統的モデルが融和したエコビレッジ。ここでは、都市部のエリート集団が伝統的な村落と協力している。のエネルギーと交わる。
- 一定のエコビレッジのモデルに沿ってリフォームした伝統的なエコビレッジの ネットワーク。(例えば、スリランカのサルボダヤやタイの SEM)

「北」よりも「南」への適用が容易な EDE の側面

- 先祖伝来の民族的伝統とライフスタイルを、その精神、文化、社会、経済、環境 面で守り採用し、消えつつあるこうした伝統を再導入すること。全てのものがつながっているという意識が依然存在する。
- 開発援助機関と協力する方法とそのような機関から助成金を獲得する手法。対象機関には、国家政府機関、多国間および二国間機関、NGO（非政府組織）、その他の寄付団体などがある。

- フレイレの参加の原則と参加型学習（アクション・ラーニング）に基づくエコビレッジ教授法。この教 授法はカリキュラムを教授する過程でエコビレッジを創設する。
- 基礎的な読み書き、簿記、管理、言語学習その他の能力向上のスキルを教えるエコビレッジトレーニング。
- 「南」のエコビレッジ間で協同作業や地域発展活動の交流を行う。ここでは、エコビレッジ代表者らが社会的なグループを形成し、が実際に農地や現場で一緒に働く。
- エコビレッジネットワークへ団体加盟資格を、エコビレッジに限定せずに NGO や既存の村落のパートナー組織など、エコビレッジネットワークへの関心を表明した組織にも拡大するという方針。
- 根本的な紛争の解決。これは、事情により一生涯同じコミュニティで同じ隣人と暮らさざるを得ない人や戦争やその他の紛争を経験した人が必要としている。

「南」と「北」のエコビレッジ間の知識交流の重要性

- 「北」の人々が利用可能な、先住民やコミュニティのすでに失われてしまった知識が豊かにある。
- 「北」の人々は、たとえ若い学生でも「南」のエコビレッジ住民に、技術や識字の基礎を教える活動に貢献できる。
- 南北で協力して、融合したエコビレッジを生みだせる可能性がある。南北それぞれのエコビレッジでは達成できない事を実現できるような、新しい協力の形態を ビレッジに作りだせる可能性を秘めている。

都市部での EDE

「持続可能な都市」という表現は、矛盾しているでしょうか。そうかもしれません。 しかし程度は異なっても、都市部の持続可能性を高め、より自給的に機能できるように、都市パターン（都市空間の構成）を構築し、設計せざるをえなくなるでしょう。70 億人の世界の人口のうち半分以上の人々が現在都市で暮らしているので、他に選択肢はないのです。エコビレッジのアイデア、価値、文化を都市が変わるために用いることができるでしょう。たとえば、コペンハーゲンは 100%再生可能エネルギー都市を目指しています。自転車専用道路が都市全体に広がりつつあります。地域で収穫した食材を販売するローカルフードマーケットが増えています。都市農園やコミュニティに支えられた農業（CSA）が広がと同時に、より良い社会的なつながりを創出するためのネットワークも形成されています。

鍵を握る のはあらゆる方法での「分散化」です。政治、経済、社会文化、地理的など、考えられるすべての分野を、 密集した飽和状態の都市中心部から調和のとれた「エコ地区」もしくは「都市の小コミュニティ」に分散することです。分散化のプロセスは、「再地域化」と一致するでしょう。それは、都市構造の網目全体に点在している無数 の「準中心地」を識別していく作業でもあります。これらの準中心地は、村社会規模の都市部空間を編成する新しい複数の中心地となります。村社会規模の空間の輪郭が見えて来たら、それぞれが自己編成、自己維持、自己発生の能力を持つリビングシステムとして機能できるように、転換に向けての様々な方法が取られます。この転 換による個々の地域の自主性は、持続可能性がどの程度効果的に作動できるかによって異なります。多くのもしくは一部の EDE の地方分散化についての学びが、たとえばサンパウロやメキシコシティのような巨大都市で実施されており、その価値を実証しています。

都市部で、融合した細胞のような村社会規模の空間地域、これを「都市ビレッジ」と呼びましょう。この都市ビレッジで持続可能な解決策に取り組むと、誰の目にも明らかな、そこそこの経費の、他の場所でも再現可能な結果がすぐに現れます。 さらに好ましいことには、大規模な社会基盤の問題が解決すれば、その後は住民が自分たちで持続可能な解決方法を実行できるるようになる！ ということです。EDE をこの規模に適用

すれば、20 のモジュール（学習のステップ）すべてがいかに適切であり、どんなに効 果的かが非常によく判ります。プロセスが「体験を通した学び（アクションラーニング）」を容易にし、その学習の中で、住民は自分自身の自立と自ら方向を決める力を育む、都市再生の責任を担うことになります。同時に、中央集権化した権力構造は影を潜めていきます。

都市のほとんどは、すでに識別可能な町内や区域、あるいは一定のまとまりのある 街のようなものを内在しています。それぞれの区分ごとに中心街と境界線を確認して、こうした既存の都市空間パターンの輪郭がもっと明確に線引きされれば、それだけで「都市ビレッジ」のパターンが浮き上がり、はっきりとしたビレッジとして形成できる可能 性が高まります。実際のところ、この数年、プランニングの専門分野では「都市ビレッジ」の概念が既に取り扱われてきました。しかし私たちは、彼らが使用してきた「都市ビレッジ」には、総合的で長期的な解決に必要な学際的な深さや多様性が欠けていると思います。

現実に、都市問題がいかに重篤な状態にあるのかを認め、これに取り組むことができないのなら、持続可能性を教育することに何の意味があるというのでしょうか？ 私たちは、ホームレスの人々やスラムの住人、親のいないストリートチルドレンなど、 毎日生き延びられるかどうかの瀬戸際にいる人々への深い思いやりを常に持たなくてはなりません。そして、安価な石油の流通と巨大に膨れ上がる都市の人口密度が直接の相関関係にあることを忘れてはなりません。いったん石油価格がピークに達すれば、都市の過密度は減少し始めます。近年急増している都市への人口移動が逆行し、人々は我先に故郷へと戻るでしょう。このような大規模な人口の逆流が起こる日は、もうすぐ近くまで来ています。総体的にみれば、人口は現在よりも環境に対するインパクトが低いレベルで安定し、全体的に均衡がとれた分布となるでしょう。

大　学

ダニエル・グリーンバーグのリーダーシップのもと、「リビングルーツ（Living Routes）」プログラムは、これまで 20 年間に渡り、様々なアメリカの大学から学生をアフリカ、ヨーロッパ、アジアのエコビレッジに送り込んできた。EDE を経験した学生と大学の教職員は「今あるコミュニティ」の中に「学びのコミュニティ」を創り出し、新しい知識とスキルを実生活の問題の創造的な解決に用いている。EDE はますます大学で求められるようになっている。というのもそこからの学びが、学生にも変化の途上にある社会にも関連が深いからです。大学と EDE の協力は多くの国でみられるようになっています。

ブラジルでは市立大学とガイア・エデュケーションのパートナーシップが、EDE が広まる主要な要因となっています。

学生たちは、現場での学びのプロセスの中で、概念的教材を解釈して具体的な結果に導くというエキサイティングな経験をします。EDE では、知識の習得とその活用をあえて分けてはいません。どちらも同じ流れの一部なのですから。知っていても行動に移さないのは、まったく何も知らないの と同じことです。学習することは、知識をうまく応用し、ライフスタイルを再構成することです。EDE の内部構造は、中身の濃い学際的なアプローチを提供できます。これにより、 知識の習得と、それを血肉化することができます。私たちは、データを ２進法のビットに分けて隔離するように、知識をバラバラな断片に分割する事はできませんし、原子を質量単位まで分解するように、最小単位に分けることも出来ません。知識は、全領域の経験にわたり、直接的な関連性があります。さらに知識を学ぶということは、その蓄積を増やすためという単純な事ではなく、常に全体を貫く包括的な主題を重視し、そこに集中するということでもあります。つまり、EDE の包括的な主題は、真に持続可能な人間の生息域をデザインしそれを作り上げることで す。配管技術はもちろん、物理学にもこの方法で取り組むことができます。学生は、自らとその将来に最も深く影響を与える包括的問題の解決に向けて、自分の潜在的な創造力を全面的に出して活用できることに喜びを感じるでしょう。また同時に、教室の内外でそれまでに学習した事柄のすべての糸を紡いで、豊かでカラフルな織物を創造できる

ことをありがたく思うでしょう。紡ぎ上がった織物（構成／デザイン）こそ、自分にしかない特別な才覚や素質の具現化に他なら ないからです。

学術界の機関や組織との関係構築に関する考え方をいくつか紹介します。

- 関心を持つ人たちに呼び掛けてミーティングを重ね、まずは自分たちのコミュニティ向けに、そしていずれ学術機関向けに企画案を作成する。
- 潜在的なパートナーを賢く選択すること。公開情報や資料を集めて精査する。例えば組織の使命、学科のカタログ「キャンパス現況」や戦略的計画に関する書類、管理部門や意思決定の構図を示す組織図など。これらの資料を見て、対象組織が自分のコミュニティと適合するかどうかを判断する。
- キーパーソンを知ること。留学、入学選考、会計、出版、履修登録、通信渉外<?>など、広く多様な部門の担当者と話をする。
- 選択肢を検討すること。エコビレッジと学術組織の連携を築く方法は数多くあります。
  そのアイデアの一部を紹介しましょう。
  - テーマを決めたエコビレッジツアー
  - 協同調査研究プロジェクト
  - エコビレッジをベースとした講座や科目
  - インターンシップ実施の機会
  - 合同教育プログラムや奉仕プログラム
  - エコビレッジをベースとした複数のプログラムをまとめて 1 組にしたセットプログラム

ヴァーチャル

カタルーニャ・オープン・ユニバーシティー（UOC）を通して、ガイア・エデュケーションはスペイン語と英語でインターネットを使った 8 ヶ月間の大学院コースを提供しています（GEDS：持続可能性のためのガイア・エデュケーション・デザイン）。受講生は自分の都合のいい時に一日 2 時間学習することになっています。このことにより世界中の人が受講することができます。彼らが仕事をしていてもカタルーニャまで来ることができなくても可能なのです。定員 20 名の国際色豊かなクラスルームでは議論と意見交換のためのいくつかのフォーラム、課題提出、デザイン＜実習＞が行われます。4 人の教師がそれぞれの内容の一つの課を担当します。受講生たちは関連参考文献情報も載っている良く考えられたデザインのインターネットページを利用することができます。このような状況下でも、エコビレッジの文化であるオープンであることと創造的であることが保たれてきました。2014 年、私たちはこのコースが EU 中の大学で単位認定されるようになることを望んでいますし、そのようになると予想しています。

専門性の高くないコースも UOC を通して 2008 年から提供しています。そしてこれは興味を持つ人すべてに提供が続けられることになっています。つまり、情報技術は、エコビレッジ・デザイン・エデュケーションの「ヴァーチャル」な領域を創り上げていくための興味深いもののまだ十分に開発されていない可能性を提供しています。このヴァーチャルな領域は、持続可能なコミュニティデザインと開発の課題に従事するあらゆるグループや、取り組みに関わる人を EDE 受講可能にするという目標の大きな助けになるでしょう。

学校

学校の生徒向けの EDE を開発してほしいとの要望に応えて、ガイア・エデュケーションは近年このテーマでも様々な試みをしています。目標は子どもたちにグローバルなつながりの感覚を与えること、そして彼らが見聞きする悲惨な出来事すべてに対する解決策はあるのだという感覚を与えること、つまり未来について問題を解決するための勇気づけと、それは可能なのだという楽観主義を与えることです。重要な学びは競争よ

り協力ということです。もう一つの目標は子どもたちが、自分自身の素晴らしい本質と創造性の源を信頼することを助けることです。三番目の目標は混乱した時にバランスを保つことを助けてくれる道具を子供たちに与えることです。

EDE のすべてのモジュール（課）は小学生から大学生までの子供たちにとって意味がある。それは特別週間として実施することもできます（たとえば 4 週間コースを 1 年間の何回かに分けて行うコース）。もしくは一年のプログラムに組み込むような形や学校でのあらゆる活用にわたって実施されるプロジェクトというのも考えられるでしょう。多くのアイデアは大地や自然が身近にある小さな学校で実施がより容易になるでしょう。最終的には国レベルで導入にふさわしいプログラムが出てくることが望ましいのです。内容についてのアイデアのいくつかを以下に示します。

世界観

子どもたちはすべてのレベルで自分たちの体を感じ、ストレスを感じた時にリラックスする方法を学ばなければなりません。子どもたちは夢を覚えているのにも、またそれをアートで表現することにも長けています。子供たちは互いにマッサージするなどして触れ合うことで安心し、自然や仲間たちに耳を傾けることを学ばなくてはなりません。自然を大切にし、動物や鳥に心を配ることもです。

社会

教室をコミュニティと見立てます。子供たちはファシリテーション、喧嘩の仲直り、リーダーシップをとること、-祈りや儀式を作ることなどを学びます。これは 1 週間に数時間、もしくはテーマごと、たとえば地域コミュニティの一部であることを学び、助けを必要としている地域の人たちに手を差し伸べるというようなテーマに沿って特別週間として実施することができるでしょう。プロジェクトは年上の子どもが年下の子どもに教えるように異なる年齢層で実施することが望ましく、そのように計画することも可能でしょう。

経済

学校を工場やお店、互いに欲しいものを交換する補完通貨のある村のように見立てた活動をすることも可能でしょう。子供たちはお金を得たり使ったり、また税金についての基本的なことを学ばなくてはなりません。そしてお金そのものには価値がないこと、そして思いやりがあり活気のある地域コミュニティ—つまり、それぞれが貢献できることによってすべての人が大事にされるようなコミュニティ—をつくるための本当の豊かさを達成することを助ける道具であることを学ばなければなりません。

エコロジカル

子どもたちは、フードマイル、食料の輸送、栄養素の循環について学ばなければなりません。何が地元で生産されているでしょうか。また、食べ物を育てる方法を学ぶことも必要です。さらに自分たちの野菜や木を世話する場所が近くに必要です。加えて火で調理することも学びましょう。命の循環、動植物の循環したつながりと互いに支えあっていること、また健康な土や水、空気についての学びも必要です。子供たちは鶏小屋を設計したり、ニワトリの餌ついてや育て方を学ぶのも良いでしょう。自分たちの体のつくりについて学ぶこともできるでしょう。エネルギーは子どもたちが理解できるトピックでしょう。省エネや再生可能エネルギーについてです。その他にも家や庭そして村をデザインも学べるでしょう。